
魔王使い

藤森 応輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王使い

【Nコード】

N7278S

【作者名】

藤森応輝

【あらすじ】

駆け出し冒険者のサイエスは、冒険者としてはまだまだ未熟だが、腰に下げるのは相手の剣をも切り捨てると言う名剣ソードキル。

ある村のギルドで魔王退治の依頼を受ける事に。

しかし古城で出会った身の丈3メートルを超える無敵の魔王は、実は異世界から来た子供だった。

そして、異世界の子供「まおう」を仲間の元へと届ける為、各地の魔王を巡る事に。

こうして魔王を従えている（様に見える）為、「魔王使い」と呼ば

れる事になった駆け出し冒険者サイエスと、子供の心を持った魔王「まおう」との旅が始まった。

途中推理物っぽい話になったりします。でも、冒険っぽい話になったりします。

プロローグ

俺は鬱蒼と生い茂る森の奥深く、裡捨てられていた古城の一室に居た。

一室といっても城主が家臣達と謁見する広間らしく奥の一段高い所には玉座が据えられている。

俺はその謁見の間で、小さな窓から差し込む申し訳程度の日の明かりの中、玉座へと上がる階段に腰を掛けていた。

そして俺は、横に座るそいつの身の上話を聞き終えると、そつとその肩に手を置いた。

「そうか……お前も大変だったんだな……」

俺はそう魔王に慰めの言葉をかけた。

第1話

魔王討伐の依頼をその村のギルドから受けたのは昨日の事だ。

俺は駆け出しの冒険者だった。と言っても剣の修行は故郷の村でみっちりやっている。

冒険者になるんだと、ろくに修行もせず故郷を飛び出し初仕事で命を落す。と言う様な事が無い様にと「冒険者のしおり」に、ちゃんと修行してから冒険者になりなさいと書いてあるのだ。

以前はその様な者が何人も居て、始はみなも「自業自得だ」「身の程知らずな」と笑っていたが、初仕事で命を落す者の数が多くなり過ぎ、さすがに不憫と思った各国のギルドが、村々に初心者冒険者の為の「冒険者のしおり」を配布したのだ。

冒険者に成りたかった俺は「冒険者のしおり」の教えに従い、村の道場で剣の修業に励んだ。勿論村には俺と同じ様に考える同年代の男も多く居たが俺に敵う者は居なかった。

そして師匠から、代々師匠の家に受け継がれてきた家宝の剣を託されて村を出たのだった。

「サイエス。お前にこの剣を託そう」

師匠はそう言って俺に剣を渡してくれた。

師匠には子供がおらず、自分の代で家が途絶えるならと、才氣溢れる将来有望な俺に剣を託したのだ。

まったくありがたい話である。

この剣は、敵の剣をも斬るほどの名剣と言う事で「ソードキル」

という、そのまんまの名が付いている。

こうして名剣ソードキルを腰に故郷を出た俺は、途中立ち寄った町や村で簡単な仕事をこなしながらこの村に辿り着いた。

この村は、アベル村といい、村と言ってもなかなか大きく、聞いたところによると昔は近くにこの付近一帯を治める領主の居城があったという。

もつとも、その領主も何代か前に居城を他の場所に移したらしいが、それでも町と言っても差支えが無いほどに村は賑わっていた。

俺は仕事の依頼を探しに早速この村のギルドへと向かった。

さすがに村のギルドとなるとあまり規模は大きくなく、中年のオヤジが暇そうに一人で番をしているだけだった。

とはいえ、贅沢は言えないと、俺は勇んで扉を潜って中に入った。だがあまり芳しくない状況だった。

「悪いが今はあんたに紹介できそうな依頼はねえな」

ギルドの幹旋人のオヤジへの「何か依頼はないですか？」という俺の言葉に、依頼受付のカウンター越しに、オヤジは開口一番そう言ったのだ。

「いやいや、何かあるでしょう」

しかし、食い下がる俺にオヤジは、首を横に振るばかり。

とにかく、今ある依頼の内容だけでも教えてくれという俺に、オヤジはどうせ無駄だろうにと、面倒くさそうに依頼の内容を話してくれた。

「娘を町まで無事に送り届けて欲しい。ただし娘に手を出されてはかなわないから、女冒険者に限る。あんた女か？　ちがうだろう？」

はい。ちがいます。

「えーと。で、次には……貴族の護衛。対象は男冒険者……」
あ。それ！

「ただし、その貴族には男色の趣味があるので、夜のお供も出きる者。あんたその趣味あるかい？」
すみません。ごめんなさい。

「最後に……昔領主が住んで居た古城に住み着いた、魔王を倒す」

魔王か……さすがにまだ俺にはちょっと難しいな。はあ……この村での仕事は諦めて、次の村に向かうか……。

魔王と言ってもピンからキリまであるが、ダンジョンや古城、屋敷といったところに住み着いて、ボス的存在の魔物をすべて魔王と呼んでる。まあその魔物達の王と言う事だ。

「な？ あんたには無理そうな依頼ばかりだろ？ 諦めて帰えんな」

俺を追い払う様に手を振るオヤジの態度にはむかついたが、確かにみな俺には難しいものばかりだ。とは言え、俺も中々諦め切れず、もたもたとその場に立ち尽くしているとオヤジが苛立った様に口を開いた。

「分かったんならとっとと帰れって。女装して女冒険者に成りすますか？ 男と寝るか？ 剣すら跳ね返す不死身の魔王と戦うか？」

俺はその最後の言葉に引っかった。

「その魔王って剣を跳ね返す以外にどんな能力があるんですか？」

「剣を跳ね返す以外？ それは聞いてないが、どっちにしろそんな魔王を倒しようが無いだろ。これは他の魔法使いを仲間につづ冒険者に頼む心算なんだよ。魔法ならどうにかなるかも知れねえからな」

「いえいえ。もっと詳しく教えて下さい」

食い下がる俺にオヤジは嫌な顔をしたが、求められれば幹旋人の業務として説明をしないわけにはいかない。オヤジはしぶしぶ俺に説明を始めた。

オヤジの話は、こう言う事だった。

一年ほど前、身の丈3メートルはあろうかという、硬そうなゴツゴツとした皮膚を持つ魔物が村にやってきた。

魔物は古城を指差し、毎日調理した肉を届ける様に村人に命じた。とはいえ、村人達もあいてがいくら魔物でもいきなりそう言われて「はい。わかりました」というわけにも行かない。

だが、相手は強そうな魔物だ。抵抗してみてもやっぱり強かったです。では、済まされない。下手すれば命は無いだろう。

どうしたものかと戸惑っている村人達に魔物の方から提案してきた。

「どうやら俺様の力を疑っている様だな。いいだろう。俺様を存分に攻撃してみるがいい。どれほど俺様が強いか見せてやろう」

魔物の言葉に「あ。いいんだ」と思った村人達は、万一の為にと

持っていた剣やさらに鍬や鍬といった農具を家から持ってきて、存分に魔物を殴った。

だが魔物の硬い皮膚にはかすり傷一つ付かず、さらに魔物は村人達達の剣や農具を取り上げると、両手でいとも簡単にへし折った。

魔物の恐ろしさに震え上がった村人達は、魔物の言うとおり毎日古城へと食事を届け、そして古城に住み着いた魔物を、魔王と呼ぶ様になった、と言う事だった。

「でも、毎日食事さえ届ければ良いんだったら、意外と無害なんじゃないですか？」

「うむ。まあはじめは村人達もそう思ってたんだが、その後魔王は食事以外にも生野菜や牧草を要求するようになってな」

「牧草？」

野菜はともかく牧草ってなんだ？

まさか魔王が、牧草を食うってわけじゃないだろ？

「うむ。牧草だ。しかも魔王の住む古城に毎日の食事と共に野菜と牧草を届けた村人が、その古城に親の形見だかを落してきてしまい、恐る恐る古城へと取りに戻ると、魔王が牧草と野菜を抱えある部屋へと入って行くのを見たそうなんだ」

「自分が食べるんじゃないや無くて蓄えてたんですか？」

「いやいや。その村人が興味を覚えてその部屋の扉に耳を当てて中の様子を伺うと、魔王の声で「もっと大きくなれ」「かなり増えてきた」と言う言葉が聞こえてきたらしい。どうやら自分の仲間を増

やしているらしく、そして村人達も、あんなのが増えられてはかなわない、もしかしたら数が増えてから本格的に村を支配しようとしているのでは。と放置できなくなって、魔王討伐の依頼を出して来たんだ」

「なるほど……」

確かに強そうな魔物だが、今の話を聞いている限りでは魔王は農具や剣では刃が立たないと言うだけで、火を噴いたり魔法が使えるわけじゃない様だ。

そして俺の腰には、剣すら切り落とす「ソードキル」がある。ソードキルなら魔王にも効くかもしれない。

「その依頼僕がやります！」

「あんたが？ まさかそのなりで魔法使って訳じゃないんだろ？」

オヤジはそう言って、改めて俺の服装をまじまじと見回した。

必ずしもと言う訳ではないが、剣を主体に戦う冒険者も魔法を使う冒険者もそれに見合った服装をするものだ。

そして俺は、剣を主体に戦う冒険者の服装としてありふれた、動きやすい服の上から軽鎧、そして腰には剣という格好だ。

ちなみに魔法を使う者は、服の上からローブ、手には杖という格好が主流だ。

「魔法使いじゃないですけど、やってみたいんです」

「いいのか？ 受けるって言うなら俺にとめる権限は無いが「冒険者のしおり」にも書いてあるだろ。簡単な依頼を何度かこなしたくらいで調子に乗って難しい依頼を受けるな。って」

う。確かに……。だが今更後には引けない。

「大丈夫です！ やります！」

こうして心配げなオヤジに依頼の手続きをしてもらい、古城へと向かったのだ。

古城は村から少し離れた森の奥にあり、門は錆びて朽ち果て、壁も風化したところどころ崩れ落ちていた。

俺は腐りはて、蝶番だけとなった扉を通り中に入ると、さらに奥に進んだ。

そして、いつも魔王が居るといふ古城の中の謁見の間の前まで行き中を覗き込むと、果たして魔王がそこに居た。

魔王はちょうど食事中らしく、地面に座りながらむしゃむしゃと大量の肉を口にほうり込んでいる。

俺は食事が終わるのを待つ事はないと、謁見の間へと踊り込んだ。

「貴様がこの城を根城に村人を支配するという魔王か！ 俺は村人とはまったく関係のない通りすがりの者だが、お前を成敗しにきた！」

もし失敗した時に、村人が危害を加えられない様にこう言え。と依頼の契約書に書いてあったのだ。

「え？ 関係ないのになんで？ いや、えーと……。愚か者め！ この俺様に敵うと思うてか！ 貴様など骨までしゃぶって食ろうてやるわ！」

なんか前半おかしかった様な気がするが、魔王はそう言うのと立ち上がった。

聞いた話では魔王の体長は3メートルという事だったが、薄暗い部屋の中の所為か、それよりも大きく見える。

顔も恐ろしげで爬虫類の様な黄色い眼をし、人間の首など一噛みで食いちぎれそうな鋭い歯。手足は意外と長く間合いは広そうだ。

だが、確かに体は大きいがその分鈍いだろう。俺のソードキルが効くなら、勝機は十分にあるはずだ

魔王との距離は8メートルほど。俺は慎重に魔王に近づくべく、静かに第一歩を踏み出した。

「え？ うわ！」

俺は間一髪で魔王が振り下ろす巨大な手を横に飛びのいて避けた。その爪は鋭く、当たって入れば俺の頭は潰れるというより、切り裂かれていただろう。

鈍いどころか、むしろくちや速ええ！ 魔王は8メートルの距離から一瞬で間合いを詰めて来たのだ。

俺は倒れた体制のまま床を転がり、魔王からまた間合いを取った。この距離なら魔王の爪も届かないだろう。

だが、巨体ならば鈍いに違いないという俺の思惑は外れた。

やはり幹旋人のオヤジが言うとおおり、俺にはまだ早かったのか…。

しかし簡単に諦めるわけにはいかない。

俺は改めてソードキルを構えて、身構えた。

すると魔王が俺に向かって掌をかざした。嫌な予感がする……。魔王の掌に赤い光が鈍く光り、その光りは段々と強くなっていく、そして、やっぱり！ と、その掌から火炎が吹き出し俺を襲ってきた。

「どわ！」

俺が慌てて床に身を投げ出すと、俺が今までいた位置を火炎が通り過ぎる。

魔法使えるじゃねえか……。

なんか色んな事の話が違い過ぎやしないか？

「んーと。どうだ。俺様には敵わんと分かったであろう。今日の俺様はたまたま気分が良い。今なら命を助けてやろうではないか」

魔王は勝ち誇ってそういったが、俺も男だ。引き下がる訳には行かない。

俺は改めて剣を構えて魔王と対峙した。

すると、また魔王の突進、俺はまたもや間一髪で避ける。さらにまた掌をかざして魔法。これも避けた。

次々と繰り出される魔王の攻撃を俺は何とか避け続けた。

だが俺は魔王の攻撃を避け続ける内に有る事に気付いた。

魔王の攻撃って直線的で単調だよな？

爪による攻撃は真っ直ぐ突っ込んできて手を振り抜くだけだし、魔法は打つ前から掌をかざすので魔法が発動するタイミングさえ気

を付ければ避けるのは訳ない。

これは、もしかしたら勝てる！

魔王と対峙し、魔王から一瞬も目を離さず突進してくるのを待った。魔王のスピードに追いかけるのは無理でも、迎え撃つ事は出来る。

そして……来た！

魔王の姿が消えたかと思うと、次の瞬間には俺の目の前に居た。

俺は、いままでの様に横ではなく、魔王の脇を通り過ぎる様に飛びのくと、ソードキルで魔王の足を払った。

足を狙えば魔王のスピードは殺されるはずだ！

だが振り返って魔王を見た俺は我が目を疑った。

俺の必勝を込めた一撃は確かに魔王を傷つけたが、それは魔王の足を切り落とすどころか、魔王の緑の血を僅かばかり流させただけだった。

終わった……。

この程度の傷をいくら与えても、魔王を倒す事など出来やしないだろう。

そしていくら魔王の攻撃が単調で避けやすいからと言っても、一回でも当たれば命がなさそうな攻撃だ。ずっと避け続けるのも無理だ。

俺は絶望し、いつその事魔王の次の攻撃は避けずに、楽にあの世に行こうかと考えていた。だが……。

「び……」

び？　なんだ？

「びえ〜ん。痛いよ〜〜！　痛いよ〜〜！　びえ〜ん。びえ〜ん」

魔王はそう叫ぶと、俺が僅かばかり傷つけた足を抱えて、床を転がりまわった。

俺はその光景を呆然と見下ろした。

第2話

俺と魔王は玉座へと上る階段に座り、魔王から事情を聞いていた。

魔王が言うには、自分は元は違い世界に住んでいたと言うことだった。

そして森を散歩しているといきなり深い霧が立ち込め、気が付くとこの村の近くの森に居たと言う。

はじめはあまりの事に呆然としていたが、どの様な時でも異世界の住人でも腹はすく。

幸いにも森なので、食べる物には事欠かないと、甘い香りに誘われ、これならば食べられそうと、近くの木に実っていた果物を一かじりしたところ、この世界の植物は体が受け付けなかったらしく、食べられたものじゃない。

だが腹がすくのは止められない。

なにか食べられる物はないかと森を彷徨っていると、先ほどの果物とはまた別の、食欲をそそる匂いがしてきた。

魔王は懸命にその匂いを頼りに、匂いのする方向へと進むと、果たしてそこには自分の背丈の半分よりちょっと大きいくらいの生き物が、火で何かを焼いているのに出くわしたのだ。

その生き物はなにやら叫んでいるが何を叫んでいるのか全然意味が分からない。

だが幸いにも魔法が使える魔王は、言語翻訳の魔法を自分に掛け、そしてその者に話しかけた。

「これはなに？」

だが、その者は行き成り魔王に剣で切りかかってきた。どうやら俺と同じ様な冒険者だったらしい。

だがソードキルの様な名剣ではない、その冒険者の剣では魔王には刃が立たず、その剣はあえなくぽきりと折れてしまった。

そして魔王は、捕まえたおびえる冒険者から色々な事を聞きだし、どうやら焼いた肉ならば食べそうだという事。さらに自分はこの世界ではかなり強いらしいと言う事が分かったのだ。

そしてこの古城に住み着き、生きる為に仕方が無く村人に毎日調理した肉を持って来させていたと言う事だった。

「だが、それくらい自分で動物を捕まえて調理したらいいんじゃないか？」

「だって、生き物を殺すなんて出来ないよ。そりゃ……食べておいって言うかもしれないけど、調理されたのを食べるのと、殺すのは違うよ！」

そうですか……。

「ん？　そう言えば、植物は食べられないんだよね？　どうして野菜や牧草なんて持ってこさせてたんだ？　そう言えば仲間を増やしているみたいな事も聞いたが」

すると魔王はもじもじと体をくねらせた。

ゴツゴツとした皮膚の3メートルを超える巨体でそんなポーズされてもはつきり言って気持ち悪いだけだった。

「えーとねー。どうしようかなー。教えようかなー」

魔王は体をくねらせ続けるが、とても見るに堪えない。

「……良いからはやく言え」

「仕方ないなー」

魔王はそう言いながらも、なにやら嬉しそうに謁見の間に隣接した部屋に向かった。

実ははじめから見せたかったんじゃないのか？

魔王の後ろに続いてその部屋へと向かい。魔王が扉の前で「開けてみて」と言うので、俺は扉を開けた。

俺はその光景に我が目を疑った。

そしてそのあまりの光景に、その場に膝を付いた。

……まさか。

まさか、こんな所に……。動物ふれあい広場が有るとは。

その部屋には大量のうさぎが飼われていたのだ。

「可愛いでしょ。森で見つけたんだ！」

魔王はそう言うのと跪く俺の脇を通り部屋に入ると、一匹のうさぎを抱きかかえた。

他のうさぎ達も魔王に懐いているらしく、その足元をぐるぐると回っている。

抱きかかえられたうさぎは、3メートルを超える魔王に頼ずりきれながら、嬉しそうに目を細め、足元を回っていたうさぎ達も「僕も、僕も」とでも言うように、魔王の足に寄りかかっている。

はははは……。

あまりの光景に俺は乾いた笑い声を上げた。

まあ確かに可愛いかな。

魔王にとっては、一人ぼっちで寂しい心を癒す大事な家族なのだろう。

俺は大量のうさぎの中で一際小さい、ふわふわそうな一匹を抱きかかえた。まだ生まれたばかりなのかもしれない。

そのふわふわの毛の固まりは俺の手の中で大人しく丸まっている。もしかして知らない人に抱きかかえられて怖くて固まっているのか？

「この子に名前あるのか？　なんて名前だ？」

「ギガバラン」

「……ギガ？」

「ギガバラン」

「そ……そうかー。お前はギガバランって言うのかー」

俺は、手の中で大人しく丸まる子うさぎを撫でた。

魔王の世界でのネーミングセンスは、きっとこっちの世界とは違

うのだろう。

どうやら森で見つけたうさぎを何匹か飼っていたら、この部屋の中でさらに繁殖して増えて行ったらしい。

しかし無害そうな奴だし、俺ももうこいつを倒す気はないが、いつかはギルドの依頼を受けた別の冒険者に退治されてしまうかも知れないな……。

「さっきは村人とは関係ないと言ったが、実は村人に依頼されてお前を倒しに来たんだ。いつまでもここに住んでちゃ危ないぞ」

「え？ やっぱり、村の人達怒ってるの？」

「そりゃまあそうだろう」

「でも、はじめに会った人の感じでは僕を見たらみんな脅えるみたいだし、食べる物を貰うにもああするしか……」

うーん。

悪い奴じゃないし、どうやらこっちの世界とむこうの世界では、寿命とかもまた違うのかも知れないが、さっきからこいつの喋っている感じでは、もしかしてまだ子供じゃないのか？

戦い方が単調だったのも子供な所為かもしれないな。

いや、生き物を殺すのが嫌だと言ってたから、もしかして手加減されてたか？

もし本当にそうだったら、なんかムカつくので聞かないで置くが……。

子供が異世界で一人ぼっちになって、しかも魔王だなんて呼ばれ

ているのも可哀想だな……。

まあ村人に食料を持ってこさせているんだから、自業自得な面もあるが、それでも他のところの魔王と違って、特に害はなさそうなんだが……。

ん？ 他のところの魔王？

「もしかして、お前の仲間が他にも居るかも知れないぞ！」

「え？ 本当！？」

「ああ。お前はずっとこの古城に居たから知らないかも知れないが、この世界にはお前みたいな魔王と呼ばれる奴がここ以外にも沢山居るんだ。そいつらがもしかしたらお前の仲間かも知れないぞ」

「本当！！」

「ああ。全員が全員とは言わないが、その内の何人かはそうかも知れない」

俺がそう言うと、魔王は喜び、その喜びをうさぎ達と分かち合うように、次々とうさぎを抱きかかえた。

「よし。じゃあ出発するから準備しろ！ 他の魔王に会いに行くぞ！」

面倒だが乗りかかった船だ。それに俺はなにやらこいつを気に入ってしまった。

仲間の元へ連れて行くぐらいしてやろうじゃないか。

「うん。分かった!」

魔王は元気良くそう答えると出発の準備を始めた。
だが準備を終えた魔王に俺はダメだしをした。

「いくらなんでもそれは無理だ」

「えー。だって置いてけないよ!」

3メートルを超える魔王が、うさぎが大量に入ったカゴを手立っている姿と言うのも中々シュールなものだ。

「森に放せないのか?」

「ダメだよ。一度飼われた動物は、野生では生きられないんだ!」

……そうですね。

異世界に住んではたはずなのに、どうしてもここら辺の感覚はこっちの同じなんだ?

まあ、何か考えないと行けないか。

「よし。分かった森に放さず、ちゃんと飼って貰えば良いんだな。
とりあえず村まで行こう」

「うん!」

こうして、俺と魔王は古城をでて村へと向かった。

「そういえば、お前名前はなんていうんだ? 俺はサイエスって言うんだ」

「僕はねー。ぴろろろろぴろろ。だよ」

「ぴろ？」

「ぴろろろろぴろろ。だって」

「……お前の名前は「まおう」な」

「えー！」

まおうは抗議の声を上げたが、俺は絶対、ぴろろ、なんて呼ばん。まったくこいつの世界のネーミングセンスはどうなっているんだ。

俺とまおうが村に着くと、みなまおうの姿に目を見開いて驚いていた。

そして慌てて逃げ出すが、しばらくすると戻ってきて恐る恐る、俺達の様子を伺っている。

先頭を進む俺の後ろに、まおうが大きなカゴを手に着いて来るのだ。どこから見ても、まおうが俺に付き従っている様に見えるのだろう。

「あの若い冒険者はどうやって、あんな恐ろしげな魔王を従えているのか」

あちこちでそう言う疑問の声が聞こえてきたが、俺はその疑問に無視してギルドへと向かった。

「倒したわけじゃないけど、これでも良いですよね？」

幹旋人のオヤジは俺の後ろに立つまおうを唾然として見上げた。
ちなみに喋って居るのはギルドの建物の中ではなく、外だ。まおうが建物の扉を潜れなかったのだ。

「まあ……。だが魔王を倒さず従えて来たなんて前例が無いからな……。俺にはどうにも」

オヤジはそう言って俺の申し出に「うん」とは言わなかった。
とはいっても、明らかにオヤジはまおうにびびっている様だ。
何とか喋れたのも職業意識のおかげだろう。中々立派なオヤジだ。

「じゃあ、どうすれば良いですか？」

「……依頼人に直接聞くしかないな」

「依頼人って、村の村長さんとかですか？」

「ああ。そうだ」

だったら話ははやい。どうせ村長にはこの後会いに行くつもりだったのだ。

俺はオヤジに「じゃあ、村長と話して来ます」と言い残し、まおうと共にその場を後にした。

そして教えられた村長の家へと辿り着き村長を呼び出すと、村長は腰を抜かして驚いた。

まあそりゃあ、そうか。

「だっ誰が魔王をつれて来いって言ったか！ それとも魔王に脅されて村から依頼されたと喋ったか！ 村は関係ないと言えと契約書に書いてあったはずじゃろ！」

「いえいえ。勘違いなさないで下さい。魔王を倒す事は出来ませんでした、ある秘術で魔王を従える事が出来たんです」

「本当か？」

「ええ。本当です」

そして俺が後ろに立つまおうに「なあ？」と話しかけると、まおうはコクリと頷いた。

ちなみにややこしい事になるから、まおうには喋るなど言っていない。

このやり取りに村長もやっとな俺の言う事を信じたようだ。

「それで、倒した訳では無いですが一応依頼達成と言う事で良いのか聞きに來たんです」

村長は金を払うのが惜しくなったのかしばらく口ごもっていたが、俺が「だめならここに魔王を置いていきますね」と言う慌てて「分かった。分かった」と頷いた。

俺も満足げに頷いたが、足に何かが当たるのを感じた。

どうやらまおうが、コツンと俺の足にうさぎが入ったカゴをぶつけたのだ。

うさぎの事はどうなってるの？ と言う事だろう。勿論俺もうさぎの事を忘れていた訳じゃない。

俺はその話を村長に切り出した。

「それで、魔王を従える秘術についてなんですが、実はある生き物に魔王の力を封じ込めたのです」

「ある生き物？」

「はい。これがその生き物です」

俺はそう言うと、まおうにうさぎの入ったカゴを村長の前に置かせた。

「……うさぎ？」

「そうです。うさぎです。この中の一匹に魔王の力を封じ込めたのですが、とっさの事でどのうさぎに封印したか分からなくなってしまいました」

村長はうさぎの入ったカゴを覗き込んでいたが、顔を上げて怪訝そうな表情になった。俺が何を言いたいのか分からないのだろう。

「つきましてはこのうさぎ達をこの村で飼って欲しいのです」

「どうして飼う必要があるんじゃない？」

「ですから、魔王の力を封じ込めているので、うさぎが死んでしまつては封印が解かれ魔王の力が復活してしまうのです。魔王の力が復活しては、僕が今、村から遠くに連れて行っても、魔王はまたこの村に戻ってきてしまうでしょう」

「それは責任をもって、あんたに飼って貰う事は出来んのか？」

「旅の冒険者に、こんな大量のうさぎを飼うのは無理でしょう」

「しかし……うさぎにも寿命はあろう」

「それは大丈夫です。子うさぎが出来ればちゃんとその子うさぎに封印は受け継がれますから」

「う……うむ」

村長はやむなく頷き、こうしてうさぎ達は村で大事に飼われる事となった。

なにせ、どのうさぎに封印されているか分からず、一匹たりとも死なせるわけにも行かず、子うさぎを産ませないわけにも行かず、生まれてきた子うさぎも全部大事に育てねば成らないのだ。

その後うさぎはどんどん増えていき、そうしてこの村は、後に「うさぎ村」と呼ばれる事になるのだが、それはまた別の話だ。

ギルドに戻った俺は、村長に承諾して貰ったと、魔王討伐の賞金を受取った。

こうして旅の旅費を稼いで村を出た俺とまおうは、まおうの仲間を探す魔王巡りの旅に出たのだった。

そして魔王を従えた（様にみえる）俺は、「魔王使い」と呼ばれる事になったのだ。

第3話

アベル村を出た俺とまおうは、旅を続けていた。

俺は腰に名剣ソードキルをさげただけの身軽な格好で、それ以外の荷物はすべてまおうが持ってくれている。

一応言っておくが、別にまおうをこき使っているわけじゃない。

「僕には軽いから、僕が持ってあげるね」

まおうがそう言って、軽々とすべての荷物を背負ってくれたのだ。やっぱりまおうはいい奴だな。

だが、旅の途中で出会う人々は、まおうの姿に驚いてみな逃げ去ってしまう。

まあ仕方が無いだろう。

冒険者の俺だって、こんなところに魔王がいまいだろうという場所、いきなり魔王に出くわしたら慌てふためく。

冒険者ではない、ただの旅人ならなおさらだ。

ただの旅人が護衛の冒険者もなしに、旅しているという事は、そこは「魔物発生地域」外という事だ。

何の武術や魔法の心得が無い者が、村々、国々を移動するたびに冒険者の護衛が居るのでは金が掛かって仕方が無い。

その為、冒険者の護衛がなくても旅できる地域を、各国の政府やギルドが協力して「魔物発生分布地図」を作成し、村々に配布しているのだ。

魔物発生分布地図は、冒険者や旅人達がどこそこで魔物に出くわした、どんな魔物が居た、という報告を元に、毎年1月1日時点の情報をもって作成され、4月1日に公布される。

そして今、俺達が進んでいる道は「魔物発生地域」外の道だった。にも関わらず魔王と出くわしたのだから、旅人達が「話がちがうじゃないかー！」と逃げ出すのも無理は無い。

旅を始めてすぐのころ、まおうの姿を見て、慌ててきた道を引き返して逃げる馬車に乗った旅人達が居た。

するとまおうが、

「戻らなくてもいいですよー」

と馬車を追いかけてしまった事がある。

まおうの足は速い。

逃げる馬車にも瞬く間に追いついた。

「まって！」

まおうはそう言って旅人に声をかけた。

自分はこわくないですよー。とでも言いたかったのだろう。

だが旅人は、恐ろしい魔王が自分達を襲うつもりで追いかけてきているのだと思い、さらに全力で逃げていってしまったのだ。

「えーん。そんなつもりじゃなかったのにー」

体長3メートルのまおうは、道端に俯いてしゃがみ込み、落ち込

んだ。

やれやれ、仕方が無い慰めてやるか。

「気にするな。相手にはお前が悪い奴じゃないって分からないんだから。しかし、お前は足が速いなー。馬車なんかよりよっぽど速いじゃないか」

「そうでしょ！」

俺が慰めて、さらにほめるとまおうはすぐに気を取り直した。
まあどんなにごつくても、ここらへんはやっぱり子供だ。

さっきまで俯いていた顔を上げ、俺に顔を向けて口を開けて笑っている。

こう言うのを、取って食われそうな笑顔とでも言うのだろうか。
しゃがむまおうの頭と、俺の頭は同じくらいの高さだった。

まおうの口は鋭い牙が並び、俺の頭など簡単に食いちぎられそう
だ。

「しかし、お前のいた世界ではみんなお前みたいに速いのか？」

「ううん。僕も元の世界に居た時はこんなに速くなかったよ」

「そうなのか!？」

世界を移動する事によって力が強化されるなんて事があるのかと、
俺は驚いた。

だがまおうの話を聞くと、強化されたというのとは少し違うらしい。

「僕のいた世界より、こっちの世界の方が体が軽く感じるんだ」

「それは、力が強くなったから体が軽く感じるんじゃないか？」

「うーん。上手く言えないけど、自分の体を軽く叩いたり握ったりした感じでは、僕の力は前と変わってない気がするの」

力が強くなっているなら、自分を叩いたら以前より痛いはずなのに、前と同じ程度にしか痛くないって事かな？

とはいえ、実際まおうの姿を見て逃げ出す旅人達の事は考えないといけないな。

折角旅をしていたのに、まおうの姿に驚いて、元来た道を引き返してしまおうと言うのも可哀想だ。

「よし！ まおう今度旅人に出くわして、旅人が逃げ出してしまったら、追いかけて一旦追い抜け！」

「追い抜くの？」

「そうだ。そして反対方向から追いかけて、元々旅人が進んでいた方向に追い込むんだ」

「うん。そしてサイエスと挟み撃ちにするんだね！」

「いやいや。挟み撃ちにしてどうする。そのまま旅人達を逃がすんだ」

「えー。でもそれじゃ、僕が怖がられているままじゃないか。ちゃんと僕が怖くないと説明してよー」

「贅沢言うな。旅人に攻撃する訳には行かないんだから、必死で逃げる旅人の足止めをするなんて簡単に出来るもんか」

「むー！」

むくれたまおうの形相に、一瞬殺されるのかと身構えたが、まあそんな事も無く、まおうもしぶしぶ納得した様だった。

こうして旅人に出会えば、旅人を元の進行方向に追い詰めながら俺達は旅を続け、ベイテという村にたどり着いた。

ベイテ村は大騒ぎだ。

まおうを連れているのだから当然だ。

俺だって、もし村に住んでいたときに、まおうがやってきていたら大騒ぎしていただろう。

しかも、村に近づいていくのを村人の一人が目撃し、俺達が村に着く前に村に知らせていたらしく、村は俺達の「襲撃」に備え臨戦態勢だ。

この村は「魔物発生地域」外だが、それでも万一の魔物の襲撃に備え村は柵で覆われている。

その柵の内側で竹やりやスキやクワといった農具を武器に村人達が立てこもっているのだ。

中には猟師なのか、矢を構えている者も居る。かなり大事になっている。

「仕方が無い。ここで待っているろ」

俺は魔王にそう言い残し、俺は村に近寄った。

そして声が届きそうな距離まで近づくと、立てこもる村人に話しかけた。

「大丈夫です。あの魔王は人に危害を与えません！」

だが村人からの返答は予想通りだった。

「なにを言っているだ！ あんな恐ろしげな魔王が人を襲わないわけなろう！ お前さんだって魔王に脅され、上手いことを言って魔王を村に引き入れようとしとるんじゃない！」

かなり年配の男が俺に向かって叫んだ。おそらくこの村の村長なのだろう。

まあ、そう思うのは当然か。
だがこの反応も予想通りだ。

俺はなるべくにこやかに村人達に話しかけた。

「いえ違います。ある秘術により、僕が魔王を従えているのです」

俺の言葉に村人達がざわつき、武器を手にしながらお互い顔を見合わせている。

とはいえ、にわかには信じられる事でもない。

村長らしき男は、再度俺に疑惑の言葉を投げかけた。

「魔王がお前さんに従っていると、どうして証明できるというんじゃない！」

ふっ。すべてが計画通り。

俺は不敵に笑った。

「では、今からそれを証明しましょう！」

俺は、まおうに向かって手を上げた。

俺の合図に、まおうは背負っていた荷物を地面に降ろすと、かばんの中からある物を取り出し、そしてある事を始めた。

村人達はそのまおうの姿にどよめいた。

「まさか魔王が……」

「魔王を従えているというのは本当なのか」

村人達は口々に呟きながら、三つのボールでお手玉をしているまおうを呆然と眺めている。

俺もまおうの姿を感慨深げに眺めた。

そもそもまおうの存在を知っているアベル村は、強引に入って結果的に上手く行ったが、始めてみるまおうの姿に逃げ出す旅人があまりにも多いので、どうやったら村に入るときに村人を安心させられるかを必死で考えたのだ。

そして、村人の前でまおうに芸をさせるという事を思いついた。

だが、動きの速いまおうならお手玉くらい簡単に出来るだろうと思っていた俺の思惑は外れた。

まおうはお手玉を全然上手くできず、

「むずかしいよー」

と泣き言を言ったのだ。

「どうしてあんなに速い動きが出来るのに、お手玉が出来ないんだ？」

「だって、動きが速くなっても、目が良くなってるわけじゃないんだもん！」

……なるほど。動きが速くても、反射神経が良いわけじゃないんだな。

しかし、まおうにはやってもらうしかない。

「でも、これが出来ないと、村人に怖がられるんだ！」

「うん。分かった。がんばるよ！」

こうして、旅の途中で日が暮れ夕飯を食べ終わってから、毎夜まおうのお手玉の猛特訓が行われたのだ。

そしてまおうは徐々に上達し、はじめは一つのお手玉も出来なかったのが、今では三つのお手玉が出来るようになったのだ。

やったな、まおう……。

俺は晴れの舞台を成し遂げた我が子を見る、ステージママの様な眼差しで、まおうを眺めた。

「どうですか？ これで安心できましたか？」

村人達は顔を見合わせて困惑している。

たしかに魔王を従えている様に見えるが、まださすがに信じきれないものもあるらしい。

だが、結局俺達は村に入ることが出来た。

村に立て籠もってみたものの、前持って冒険者に防衛を依頼している訳じゃない村が、魔王の襲撃に耐えられたなんて話はめったに無い。

村人達は、俺の言う事が本当かも知れないという事にかけてらしい。

それにもし本当だったとして、それでも村に入れる事を断ったら、俺達が怒って村を襲うかも知れないという事も危惧した様だ。

村人との話がついたので、俺はまおうを手招きして呼び寄せた。

「上手くいったみたいだね！」

ステージをやり終え、まおうが満足げに笑う。

その笑顔を例えるなら、世界を破滅に導く事に成功した悪魔の様な笑顔だった。

こうして俺とまおうは、ベイテ村に入ることが出来たのだった。

第4話

「思ったより、閑散としてるな……」

それがベイテ村に入った俺の感想だった。

「魔物発生分布地図」で「魔物発生地域」外に指定されている村ならもう少し旅人も多くよさそうなんだ。

「旅人はあまり来ないんですか？」

俺とまおうを空き家に案内してくれている村長に聞いてみた。村に入れて貰えたとは言え、さすがに好きに出歩いても良い、とはならなかった。

まおうが俺の言う事を聞くというなら、できるだけ、まおうは出歩かせない様に、と言われてしまった。

まあ仕方が無いか。

そして泊まる場所も、どこの宿も俺達を泊まらせがらず、村の空き家に泊まらせてもらう事になったのだ。

「以前はここも多くの旅人が立ち寄る賑やかな村じゃったんじゃが……、この村のすぐ東にあるデステイニ王国が、旅人を誘致する為に子供向けの遊戯施設から、大人の為の歓楽街までそろえた一大歓楽村を建設したんじゃ……」

村長の表情は深刻そうだ。

まあ村にとって旅人の数が減るのは大問題だろう。

宿や飯屋なんてものは旅人が来てくれない事には成り立たない。

デステイニ王国と言えば、ネズミを紋章とする王国だ。

はるか昔、神の使者としてネズミが王国に使わされ、王国に莫大な利益をもたらした事が由来らしい。

ちなみにこのベイテ村があるユニバース帝国は、世界は我が物とでも主張しているのか、世界を表す球体を紋章としている。

東のデスティニ王国と西のユニバース帝国はあまり仲が良くないとは聞いていたが、まさかこんな事でまで争っていたとは。

「でも、そんな観光目当ての旅人ばかりじゃないんでしょ？ 商人とかはどうなんです？ 商人はそんな遊戯施設なんて目もくれないんじゃない。それともさすがに仕事でも夜は遊びたいって言う事ですか？」

だが村長は、ため息を付きさらに深刻そうに口を開いた。

「いや。デスティニ王国は遊戯施設を作るだけでは飽き足らず、関税率を15%から10%に引き下げおったんじゃないよ……」

「関税率を！」

「うむ……」

わずか5%と侮ってはならない。

100Gで商品を買えばその金額に対して関税を15%払えば115G、それを150Gで売ると利益は35G。

だが、その商品を運んだり実際に売る人件費が1G掛かるとすると利益は34G。

だが、関税率が5%下がれば、利益は39G。

34Gと39Gでは、実に、約15%の利益率アップだ。
商人にとってはこの差はあまりにも大きい。

もちろんこれは単純計算であり、実際利益率は商品によって違うし、数カ国を旅する商人もいる。

だが、利益率が下がれば下がるほど、関税率が実際の数値以上の意味を持って来ることに変わらない。

デスティニ王国！ まさかそこまでするとは！

「それは大変ですね……」

実際俺に直接的には関係の無い話だが、さすがにこれには同情した。

一国をあげて旅人誘致に乗り出されては、こんな一村落が太刀打ちできる訳が無い。

だが俺の同情の言葉に、村長は落ち込むどころか、怒ったような表情で口を開いた。

「じゃが！ それももうここまでじゃ！ 我が村も帝国の本格的な支援を受けて、再開発する事が決めたのじゃ！」

「おお！」

やはりデスティニ王国と仲の悪いユニバース帝国は、指を咥えて黙って見ては居なかったか。

「それでどうするんです？」

「こちらも遊戯施設や歓楽街を建設し対抗するんじゃない！」

おいおい。二番煎じかよ。

「それに関税率も9%にするんじゃない！」

なんか微妙だな……。

商人にとっては1%の違いでも大きな違いかも知れないが……。なんか対策が中途半端な気もするが、大丈夫なのか？

まあ、村長がそれで良いと思って意気込んでるんだし、俺がとかく言う話じゃないか。

とつと俺達が泊まる空き家に案内して貰うことにした。

ちなみに、まおうは俺と村長の話はまったく理解できていないらしく、退屈そうに辺りをキョロキョロ見渡していた。

だが、まおうの事をもの珍しく見ていた村民は、キョロキョロとしているまおうと目があると、慌てて目を逸らしたり、家の中で、窓からまおうを見ていた者は慌てて窓を閉めた。

仕方が無い反応なのだが、村民達の反応にまおうはむくれて、こっとさら足を踏締め、ドシンドシンと歩くものだから、「うわーん！」と子供が泣き出してしまった。

「え？ あ。ちがうよ。ちがうよ」

まおうは子供を泣かせてしまったと、慌ててその子供をあやそうと近寄る。

だが当然、火に油を注ぐ事にしかない。

子供は「うぎゃー!」と叫び逃げ去ってしまった。

まおう……。

俺はうな垂れるまおうの背を見て、空き家に着いたら、また慰めてやろうと心に誓った。

しばらく歩くと、ある一軒家を村長が指差した。

「ここじゃよ」

まあ……ボロ家だな。

だが、まおうを住ませようと言うのだから、当たり前と言えば、当たり前か。

というより、ボロの方が都合が良いかな?

「この家って取り壊し予定なんですか?」

「うむ……。まあそうじゃの」

村長は歯切れ悪るそうに答えた。

廃屋に押し込もうとしている事を指摘されたと思って、気まずいのだろう。

「いえいえ。気にしないで下さい。じゃあ、ちょっとくらい壊しても大丈夫ですよ?」

「ああ、それは構わんがどうしようと言うんじゃ?」

「入り口を広げないと、まおうが入り難そうなので」

俺はそう言いながら、まおうに振り返りかえった。
かなり身を縮こませれば何とか入れるかも知れないが、廃屋同然ならいっそのこと入り口を広げても構わないだろう。
扉を壊したところで、俺達を泥棒しようなんて奴が居ると思えないし。

俺の言葉に、村長はまおうを一瞬見た後、慌てて目を逸らした。

「あ、うむ。そういう事なら、好きにして良いが……」

村長は、まおうの事に考えが及ばなかった事に、気まずそうにしている。

もしかしたら、まおうは家には居れずに、外に待たせておくとも思ったのかもしれない。

「じゃあ、好きにさせてもらいますね。案内ありがとうございます
た」

俺は村長に頭を下げ、まおうを促してその廃屋の入り口へと向かった。

「お前が入りやすいくらいに、広げてくれ」

「うん」

まおうは、バキッバキ！ と入り口を押し広げ自分が通れるくらいまで押し広げた。

そして俺達の中に入ったが、やはりまおうには天井が低いので、

まおうは屈みながら進まなくてはならない。

しかも、床は何か穴が開かずにすんでいるが、ミシミシと音を立てて危なっかしい。

この家は一応2階建ての様だが、2階を使うのは諦めたほうが良いだろう。少なくともまおうは。

まあ、俺とまおうが少しの間使うだけなら、1階部分だけで十分だし。

俺とまおうは1階部分の中で一番広い部屋を見つけると、そこに荷物を降ろした。

「じゃあ、まおうは適当に片付けておいてくれ、俺は何か食べる物を買ってくる」

まさかまおうを連れて、飯屋に行くわけにもいかないしたな。

「うん。わかった！ でも、片付けるって何すれば良いの？」

まおうは身を屈めながら首を傾げた。

「いらなさそうなものを使わない部屋に運んで、軽く埃を掃いといてくれ」

「うん。わかった」

「じゃあ、行って来るな」

俺はそう言い残して家を出た。

そして飯屋の看板を見つけると中に入り、

「肉料理をたっぷり。お持ち帰りで」と注文をした。

家へと向かう途中に子供に泣かれてしまったまおうを慰める為にまおうが好きな肉料理を大量に頼んだのだ。と言っても、肉しか食べられないのだが。

しかし、食費がかさむな……。

森やなんかで自分で動物を捕らえられれば良いんだが、実際それを職業としている猟師じゃないと難しい。

まおうのスピードがあれば動物を捕まえるのは簡単だが、まおうには食べる為に動物を捕まえるという事は出来ないし。

まあ、それは何とか考えるか。

俺が注文した料理が出来るのを待っている間店を見渡すと、店内は閑散とし、あまり客は入っていない。

日はかなり傾いてきているというのに、2、3人しか客が居ないのは問題だろう。

やはり、デスティニ王国の一大歓楽村の所為か？

まあ今はその話はいいか。もっと別な話が聞きたいんだ。

俺は店員に聞いてみる事にした。

「この村ってギルドはあるの？」

あまり小さい村ならばギルドが無い可能性もある。

この村は以前は賑わっていたと言う事なので、多分心配ないだろうが一応聞いてみた。

それに、以前はあったが村が閑散としてきたので閉鎖した。とい

う事も有り得なくも無い。

「ギルド？ ああ、あるよ」

良かった。ギルドが無いとなると仕事が出来ないからな。

もつとも俺はギルドはあるか？ と聞いているが、実際村々にギルドがあるんじゃないくて、ギルドの出張所があるんだが。

ギルドの本部は大抵、各国の首都や大きな町にある。

そして村々に出張所を構えるのだ。

村によってはギルド（の出張所）が、2つ、3つ有る所もある。

店員の答えに満足したが、今日はもう時間が遅い。

ギルドには明日行くことにして、俺は出来上がってきた料理を手にまおうが待つ家へと急いだ。

「まおう、待ったか!？」

俺が家に戻り、まおうが片付けているはずの部屋に入ると、まおうはこちらを背にして、床に這い蹲るように身を屈めていた。

「なにやってるんだ？」

するとまおうは振り返り、まるで「みくたくな」という様に笑った。

初めてまおうと会った者だったら、慌てて逃げ出すだろうが、俺はすでに慣れているし、それにもましてまおうの内面を知っている。平然と問いかけた。

「何か隠してるのか？」

するとまおうは身をくねらした。

「えー。どうしようかなー」

「良いから見せろ」

まおうがこう言う時は、本当は見せたがっているのは、もう分かっている。

まおうは「しょうがないなー」と言いながらも、嬉しそうにそれを見せてくれた。

「ネズミか……」

「ネズミって言うんだ？ 可愛いねー」

動きの速いネズミでも、まおうに掛かれれば捕まえるのはわからない。まおうは、ネズミを手の上で遊ばせながら、子供に泣かれた事など無かったかの様に笑っている。

慰める必要は無かったか？

「この家に居る間は良いけど、村を出る時は逃がすんだぞ」

「えー！」

「ダメだ！ ダメだ！」

まおうの言うとおりにしては、旅がすぐに移動動物園の様になってしまう。

ここは釘を刺しておくべきだろう。

とりあえず、メシにして、旅の疲れもあるので今日はもう寝る事にした。

まおうが捕まえたネズミは、ちょうど水槽があったのでそこに入れて、木の板で蓋をしておいた。

第5話

翌日、起きると昨日の料理の残りを朝食として食べた。
そして昨日聞いたギルドへと向かった。
もちろん、まおうは置いていく。

「ちゃんとお留守番してるんだぞ」

「うん。分かった」

まおうは、そう返事しながらもネズミが入った水槽を眺めている。

「……これ以上ネズミを捕まえるんじゃないぞ」

「えー！」

釘を刺しておいて良かった……。
言ってなかったら、水槽がネズミでいっぱいになってたかもしれない。
ない。

一匹ではまだ可愛いが、水槽いっぱいネズミなんて……考える
もの嫌だから考えるのは止めよう。

「じゃあ、行って来るな。ネズミは捕まえるなよ！」

俺はもう一度念を押してギルドへと向かった。

ちょっと時間が早いかな？　とも思ったがギルドに着くとちゃんと営業してて安心した。

中に入ると早速幹旋人に声をかけた。

「なにか依頼はありますか？」

「はい。一つ御座います」

お。やけに丁寧な幹旋人だな。

さすがに以前は賑やかな村だったらしいので、それなりの人材を置いていたという事か？

「どんな依頼なんですか？」

すると幹旋人は資料を見ることも無く答えた。

依頼内容を暗記しているのか？ やっぱり有能なんだろうか。

「魔物の駆除ですね。この村からさらに南西に行ったところにある、チェルク城という城の周辺に魔物が発生するというので、その駆除の依頼が来ています」

「この付近って、魔物発生地域外ですよ？ それなのにその城の周辺だけ魔物が発生するんですか？」

「ええ。そうなんです。去年の秋ごろに突然魔物が発生したという報告があつたんです」

何らかの理由で、魔物が唐突に沸くという事も無いではないが、滅多に有るもんじゃない。

魔物発生地域は大抵徐々に広がっていくものだ。

そして、広がってくると人間達の反撃でまた押し返す。

これを繰り返しているのだ。

では、チェルク城周辺の魔物とは、その滅多にない唐突発生型の

魔物なのだろうか？

「するとその魔物は、何らかの秘術で召喚された精霊系や悪魔系の魔物という事ですか？」

「いえ、それが妖精系のゴブリンらしいんです」

「ゴブリンが唐突に発生ですか……」

少し違和感を感じるが、ゴブリンなら対して強くは無い。
あまり数が多いと面倒だが、まあ何とかなるだろう。

「わかりました。その依頼僕にやらせて下さい」

俺は自信満々に答え、幹旋人も「分かりました」と即答するかと思ったが意外にも歯切れが悪い。

「そうですか……。ですが実はこの依頼には問題がありました」

「どんな問題なんです？」

「依頼を受けて頂くに先立って、依頼人との面接があるのです」

まあ下手な冒険者に依頼して事態が余計に悪化することもある。
その為に、依頼人が面接をする事も多々あるので、重要な依頼では特に珍しいこととも思えないが。

だが、依頼人も冒険者に関しては素人な事は多いので、面接をしなくてもその冒険者の真価を見抜けるとは限らない。

「冒険者選定依頼は受けていないんですか？」

冒険者選定依頼とは、ちゃんと依頼がこなせそうな冒険者か幹旋人に判断してもらう制度だ。

依頼者はその分多くの手数料をギルドに支払うことになるが、下手な冒険者に頼んでしまうというリスクを負わなくてすむのだ。

このオプシオンをつけないと、冒険者が受ける！　と言い張れば、幹旋人が内心どれだけ（こいつじゃ無理だろうな……）と思うのが、依頼を受けさせなければならぬ。

俺が言うのもなんだが、俺がアベル村でまおう討伐の依頼を受けられた時の様なものだ。

それを回避するなら依頼者自身が面接するしかない。

しかし、繰り返し返すが大抵の依頼者は冒険者のよしあしなんて分からないはずだ。

それでも依頼者が面接をするというなら、今回の依頼者はその「大抵」以外の冒険者のよしあしが分かる人物なんだろうか？

「その依頼者って、昔は自分が冒険者だったり、名のある軍人だったりするんですか？」

「いえ。それが依頼主はチェルク城の御城主様ご本人で、生まれも育ちもまったくの貴族でして……。しかも国王が出兵するので軍勢を率いて参陣するように命令しても、病気を理由に出陣しなかつたという人ですから、冒険者のよしあしなんて分かるはずもないと思うのですが……」

幹旋人は俺の質問の意図を察したらしく、話を先回りして答えてくれた。

「にも拘らず面接ですか……」

「はい。しかも、この依頼を受けようとして面接を受ける人は以前にも何人も居て、一人を除いてすべて面接に落ちてしまったのです」

「そんなに何人もですか？」

「ええ。ゴブリン討伐なんてむずかしい依頼ではありません。この村に立ち寄った冒険者の全員が、依頼を受けようとしたと言っても過言ではないのです」

「にも関わらず、すべて面接に落ちた？ そんなにダメそうな冒険者ばかりだったんですか？」

だが、幹旋人は目を見開きいかにも心外そうに口を開いた。

「いえいえ。とんでもない！ 中にはあの「蒼竜のカーシエス」も居たんですよ！」

「蒼竜のカーシエス！」

蒼竜のカーシエスと言えば、ほとんどの冒険者が目標と言っても過言ではないほど腕が立ち、ほとんどの女性がその求愛を受けられるとなれば、他の男と結婚式をあげていて、教会での誓いの直前でも、その男を振り切ってカーシエスの元へと駆けつけるというほどの美貌の持ち主。

それが面接に落ちたというのか……。

まったくどんな基準で選んでるんだ。

「はい。カーシエス様は「まあ。たまには簡単な依頼も気晴らしに

良いだろう」と言って面接に向かったのですが……。まさかの落選で……。カーシエス様は大変な落ち込みようで御座いました……」

蒼竜のカーシエスが落ちる面接など、誰が受かるというんだ？
ん？ いや一人を除いてと言っていたか？

「その面接に受かった一人というのは、どんな奴なんです？ 蒼竜のカーシエスを超えるとそうは居ないはずですけど」

「それが……。私が見るところカーシエス様を超えるどころか、比べるのもおこがましい冒険者でございまして……。図体はでかく、顔もいかつく一見強そうなのですが、私から見ると、ただのこけおどしにしか見えず、ゴブリン討伐を依頼しても達成できるか怪しい人でした」

「それで、実際にゴブリン討伐は失敗したと？」

今もまだ依頼を受け付けているという事は、そう言うことだろう
と思ったが、意外にも斡旋人は否定した。
理由は別の事だったのだ。

「いえ。それが依頼どおりにゴブリンが発生したという場所に行く
直前、突如腹痛をもよおされたと言い出し、結局ゴブリン討伐は行
われませんでした……」

依頼失敗以前の問題だったか……。

蒼竜のカーシエスを落とす、そんなのを合格させるとは、うーん。
依頼者の面接の基準がまったく分からないな。

「その依頼者はもしかしてボケているとかじゃないですか？」

「いえいえ。この春に家督を御子息に譲って隠居はしておりますが、まだボケるといってお年ではないはずです」

ボケている訳ではないのか……。

じゃあ、単に極端に人を見る目がないのか？

俺がそう考えていると、幹旋人は突然「あ！」と声を上げた。

「失礼しました。家督を御子息に譲った時に、城の名義も御子息に譲っているので、御依頼主は御城主様ではなく、元御城主様ですね。申し訳御座いません」

わざわざ訂正する様な重要な事でもないだろうに律儀な。

だがまあ面接を受けるだけ受けてみるか。

カーシエスまで落ちたというなら、俺が落ちても恥にはならないだろう。

「とりあえず、面接を受けさせてください」

「わかりました。御依頼主様からはいつでも良いとお言葉を頂戴しておりますので、すぐに紹介状を準備いたしますのでしばらくお待ち下さい」

俺は言われたとおりおとなしく待っていたがある事に気付いた。いかんいかん。肝心の報酬について聞いていないや。

まあゴブリン討伐の報酬なんてだいたい相場が決まっているものだが。

「サイエス様お待たせいたしました。紹介状が出来上がりましたので、これをお持ちになりチェルク城をお尋ね下さい」

俺は紹介状を受けとりながら、肝心な事について尋ねた。

「わかりました。それで、重要な事を聞き忘れてました。報酬は幾らなんですか？」

「これは失礼いたしました。報酬は132Gです。それに対し、所得税の源泉徴収20%が端数切捨てで掛かりますので、依頼成功時にサイエス様が受け取る金額は105Gとなります」

いつもながら、所得税20%は痛いな……。

国民はみな税金を払わなくてはならない。

それは冒険者も一緒だ。しかし定住しない冒険者に毎年税金を納めさせるなんて事は出来ない。

その為、ギルドを通して仕事の依頼を受ければ依頼を達成し報酬を受ける毎に、問答無用で源泉徴収される。

もちろん、ギルドを通さずに仕事を請ければ税金を取られる事もないし、簡単に脱税できそうなものだが、簡単に出来そうなことゆえ、見つかった時には厳罰に処される。

脱税は、金額によっては終身刑になるほどの重罪だ。

そして、ギルドを通さずに依頼した方も処罰される為、よほど後ろ暗い依頼で無い限り、ギルドを通さずに仕事を依頼する依頼人も居ない。

それはさておき、ゴブリン討伐で132Gの報酬とは破格だ。

気晴らしを兼ねているとは言え、蒼竜のカーシエスほどの冒険者が依頼を受け様としたのも頷ける。

こうして、俺は紹介状を手早速依頼者がいるというチェルク城

へと向かったのだった。

第5話（後書き）

作品によってゴブリンは精霊だったり時には幽霊だったりもするそうですが、ここでは妖精で。

あと、ハリーポッターでは瞬間移動の魔法なども使っていますが、この世界のゴブリンは魔法は使えないという事でお願います。

第6話

俺はギルドの幹旋人に持たされた地図を片手にチェルク城にたどり着いた。

チェルク城は、石造りで堀が高く規模も大きい。

石造りの城としては中期以降の建物らしく、防衛機能としての建物と居住区としての建物が別で建てられていて、居住性もよさそうだ。

うむ。なかなか立派な城じゃないか。

では、早速入る事にしよう。

「すみませーん。ギルドに紹介されて依頼の件で来ました！」

俺が城門の前で叫ぶと、門番が「少しお待ちを」というので待っている、執事らしい初老の男性が現れた。

「ようこそ、おいで下さいました。こちらへどうぞ」

俺は素直に先に歩く執事についていった。

しかしこういう城とかで雇われている執事って、どうしてどこも初老から老人にかけての男性なんだろう。

若い頃は雑用係をさせられていて、初老辺りでやっと執事に昇格されるのか？

まあ、どうでも良いか。

俺は執事の後ろを大人しくついていったが、使用人と思われる男

やメイドが、ときおり俺を見ては、ひそひそと喋っている。

ときおり「魔王を……」という言葉がもれ聞こえて来るので、俺とまおうが村に入った時の騒動を見ていたのかもしれない。

しばらく歩くと、大きな扉の前にたどり着き、執事は軽く扉を叩いた。

「ギャストン様、例の依頼を受けたいという冒険者の方をお連れいたしました」

扉の向こうから「うむ。入れ」という言葉が聞こえて、執事が扉を開けて脇に下がったので、俺は「失礼します」と中に入った。

ギャストン様とやらは、まあ平凡な外見だった。

あえて特徴を挙げるとすれば、特徴が無いのが特徴という感じだ。初老の執事よりは少し若そうだが、白髪交じりの黒髪に、精悍でも美形でもない顔。

背も高くも無く低くも無い。体格もまあ中肉中背だ。

その「ザ・平凡」は俺を見た瞬間、明らかにその表情を曇らせた。「何かお飲み物をご用意しろ」と執事に申し付けた言葉もなにやら力ない。

うーん。これは望み薄かな？

しかし、ろくに話もせず遭ったばかりでこんなにも落胆されるとは、なにが問題っていうんだ？

「この城の城主のギャストン・カスタニエです」

城主はそう言いながら右手を差し出すので俺も

「冒険者のサイエスと申します」

と右手を差し出し、握手を交わした。

だが城主は握手を交わした瞬間手を離し、あまり熱意が感じられない。

城主は時間がもったいないと言った風に、俺にソファに座るように促し、自分もソファに座ると早速本題に入ってきた。

「それで、今までにはどのような依頼を受けてきたのですかな？」

俺は、今までにこなして来た依頼内容を正直に喋った。

ギルドの依頼はすべて「サイエス」という名前で受けているのだ、ギルドに「サイエスの今までの経歴は？」と問い合わせられれば、もしここで嘘をついても、すぐに経歴詐称がばれてしまう。

もちろん偽名で依頼を受けることも出来るが、そうすると実績が積みあがらない事になるので、あまり得策ではない。

ちなみに、もし「サイエス」という名前の他の冒険者が居た場合、記録上は「サイエスー2」といった具合に番号が振られていくが、幸いにして「サイエス」という冒険者は俺しか居ない。

もし同じ名前の奴がいて、では、一番初めの冒険者は「サイエスー1」になるのかと言えば、そこはやっぱり「サイエス」だ。

今まで「サイエス」で登録していたのを、途中で「サイエスー1」に書類を全部変えるのも大変だからだ。

記録上とは言え、自分の名前の後ろに番号が振られるのはあまり気持ちの良いものじゃない。

しかも、経歴を言うときに一々「ギルドでの登録名は、サイエスー2です」なんて名乗らなくてはならなくなる。

冒険者達はギルド登録時に、自分の本名が他の冒険者に登録されていると知ると、仕方がないと名前を変更して登録する奴もいると言う。

ちなみに「マイケル」という名前の冒険者が一番多く、現在「マイケルー286」まで存在しているそうだ。

そして二番目に多いのは「ジョン」で、現在「ジョンー235」が存在する。

ここまで来るとお互い、むしろ数が多いのを誇っており、マイケル連合やらジョン共同体やらを作って、勢力拡大を目指している。

時には「君、マイケルにならないかい？」と本名がマイケルではない初心者冒険者を誘い、マイケル連合に入ればどれだけ仲間からの協力が得られるかを熱心に語り、マイケルの数を増やしているらしい。

数年前には、34人のマイケルによる冒険者のパーティーが、ドラゴン討伐に成功したという話もあったのだ。

ドラゴンと言えば、下手な魔王よりも遥かに強いといわれる魔物だ。

もちろん、最上級の魔王には一步譲るが、なかなか倒せるものじゃない。

それを34人のマイケル達は助け合い。そして6名のマイケルを犠牲にしながらも倒す事に成功したのだ。

城主は俺の経歴を聞いて「うーん」と難しい表情で唸った。

だが、経歴に問題があるというより、先ほどからの城主の態度から見れば、はじめから断るつもりだったのを、経歴に問題があるのかの様に言って断ろうとしている。

という風に感じられた。

「お待たせいたしました」

ちょうどそのとき執事が飲み物を持ってきてくれた。

その飲み物は透き通った赤色をしていて、どうやらぶどう酒の水割りらしい。

そして執事は、飲み物を俺と城主の前に置いた後、なにやら城主に耳打ちをした。

「なんだと！」

城主は執事が耳打ちした内容に、体を執事に向けて驚いた。

そして次に俺に向き直った。

その表情は、先ほどまでとはうって変わり、目は見開き、口は大きく開いて笑みを浮かべ、まさにこの人こそは！ と顔全体で表していた。

「何かありましたか？」

俺はあまりの城主の変わり様に、不思議に思い問いかけた。

「いえ。あなた様は恐ろしげな「魔王」をお連れになっているとか……」

なるほど、執事はその事を城主に耳打ちしたのか。

しかし、はじめに執事と会ったときは執事もそのことは知らなさそうだったんだが……。

まあ飲み物を用意するときに、使用人かメイドから聞いたのかも知れないな。

「ええ。そうです。ある秘術を使い。魔王を従わせる事に成功しま

した」

本当は、まおうを他の魔王の元へ連れて行くことになっているだけなんだが。

ちなみに「ある秘術とはどの様な？」と聞いてくる奴もいるが、そこは「それは秘中の秘」なのでと言わない事にしている。

しつこく食い下がられても、精々「ある秘術により、ある動物に魔王の力を封じ込めた」と言うだけだ。

「おお。それは素晴らしい！ 従わせたという事は、当然依頼時にも魔王を連れて行くという事でしょうか？」

「ええ。依頼によってはそうです」

生き物を討伐するといった類の依頼は、まおうが見たがらないので連れて行かないが、そうでない依頼なら連れて行く事もあるので嘘ではないだろう。

だが城主は俺の考えとは、逆の事を考えたようだった。

「なるほど。魔物を倒すといった依頼以外なら、魔王を連れて行く必要も無いものもあるでしょうからな。では、今度の依頼には魔王を連れて行くんでしょうな？」

うーん。

本当だったら今回の依頼には、まおうは連れて行かないつもりだったが、どうやら城主はまおうを連れて行くことを期待しているみたいだな……。

やっぱり、冒険者に関してこの城主はずぶの素人なんだろうか。ゴブリン討伐なんて、まおうの力を借りなくても簡単なんだが…

…。

まあ依頼主がそう望んでいるなら、希望通りに答えておこう。
まおうは連れて行くだけ連れて行って、ゴ布林発生地区の手前で待たせておけば良いだろう。

「もちろん、まおうは連れて行きますよ」

「すばらしい！ これで依頼は達成された様なものです！」

城主はそう言うのと、手を叩いて執事を呼び寄せ、前祝にと酒を持つてくる様に言いつけた。

よほど嬉しいのだろう。

しかも、こちらから頼みもしないのに、報酬の増額まで言い出したのだ。

もちろん、条件付であったが、その条件もたやすいものだった。

「この依頼はどうしても、冬前に。最悪でも年内に完了させて欲しいのです。もし達成できるならば、さらに100Gを上乗せしようではありませんか」

おいおい。まだ夏だぞ。

ゴ布林討伐にそんなに時間が掛かるわけがない。

とはいえ、わざわざこんな美味しい話を蹴る必要も無い。

ありがたく受けておくことにしよう。

だが聞いておかなくてはならない事がある。

「それは、取っ払いでしょうか？」

「もちろん取っ払いですとも」

城主はにこやかに答えた。

依頼料の上乗せ分も当然ギルドに申告しなくてはならないのだが、当然上乗せ分も20%源泉徴収される。

100Gなら20Gを引かれてしまうわけだが「取っ払い」とは、源泉徴収された後の金を俺は手に入れられるという事だ。

つまり実際は、城主は125Gを負担し、俺は100Gを丸々手にするのだ。

美味しい。美味すぎる。

「分かりました。必ず冬前にはやり遂げましょう！」

俺と城主は改めて握手を交わした。

第6話（後書き）

「取っ払い」には色々な意味がある様ですが、まあ作中ではああ言う意味の言葉という事で。

第7話

ゴブリン討伐の依頼を受けた翌日、まおうを連れて指定された場所へと向かった。

「この辺りか」

そこは奥深い森で確かにゴブリンが出るには、おあつらえの場所といえる。

だが、ゴブリンには特有の悪臭とあるのだが、その悪臭がしない。ゴブリンの悪臭は強く、かなり離れていても分かるくらいなんだが……。

もっと奥に居るのかな？

森の奥へと行く事にしたが、ゴブリンと戦って倒すところを、まおうには見せない方が良さだろう。

「じゃあ、一仕事してくるから、ここで待ってろ」

「うん。分かった」

俺の言葉にまおうは素直に従い、その場に座り込んだ。

「……一応言っておくが、動物は捕まえるなよ」

「そっそんな事考えてないよ!」

あやしい……。

まあ釘を刺しておいたから大丈夫だろう。

こうして森の奥深くに足を踏み入れた俺だったが……。

「やっぱり、ゴブリンの悪臭がしないな……」

俺は改めて魔物発生分布地図を広げた。

確かに、ここを中心に魔物発生地域Lv1（退治が比較的容易な魔物が発生）が設定されている。

魔物発生地域は実施の目撃情報よりかなり広範囲にわたって設定される為、地図上ではチェルク城も魔物発生地域内に入っている。

にも関わらず、その目撃されたというゴブリンの姿がまったく見当たらない。

一度発生したゴ布林が自然と居なくなるなんていうのは考えにくいんだが……。

まさかゴ布林討伐の依頼の面接を落とされた冒険者が、倒して言った訳でもあるまいし。

とりあえず、森の中をくまなく歩く事にしたのだが、しかし散々歩き回っても、やっぱりゴブリンの姿どころか、ゴブリンの悪臭すらない。

これじゃ、ゴ布林討伐の依頼を達成するとかしないとか以前の問題だ。

「仕方がない。今日はもう帰るとするか……」

日が暮れるにはまだ早かったが、これ以上森を彷徨っても仕方がない。

やむを得ず、まおうが待つ森の外へと向かった。

「あ！ おっ終わったの？」

まおうは森から出てくる俺の姿を見つけると、慌てたように何かを体の後ろに隠した。

「……ちゃんと逃がせよ」

ため息混じりに言うと、まおうはしぶしぶ背に隠していたものを取り出した。

またうさぎか……。

「ふっふわふわだよ！」

まおうは「見て！」とでも言う様に、俺の目の前にうさぎを突き出した。

「だから何？」

「飼っても良いでしょ！」

「……ダメだ」

「び」

「び？」

「びえ〜ん！ びえ〜ん！ 飼おうよ〜！ びえ〜ん！」

うさぎを胸に抱えながら、地面を転がりまわって駄々をこねる体

長3メートルのまおう。

うーん。怖いんだか。ほほえましいんだか。恐ろしいんだか。

「旅には連れて行けないだろ！」

「びえーん！　だってだって！」

仕方がない。これは言いたくなかったが……。

「そのうさぎにだって、お父さんとお母さんが居るだろ！　離れ離れにさせる気か！」

「……」

さっきまで泣いて駄々をこねていたまおうが、ぴたりと泣き止み、しぶしぶといった感じで、抱えていたうさぎを地面に下ろした。

「ごめんね……」

まおうはうさぎを放すと、うさぎにそう言った。

うさぎはまおうの手から地面におろされても、特に急いで逃げ出すような事は無く、しばらくまおうの傍に居たが、そのうち森の奥へと姿を消した。

うさぎもまおうがいい奴という事が分かるんだな……。

少し言い過ぎたかな……。

「まおう……。この村に居る間、この森に遊びに来るくらいは良いだろう。明日も来ような」

「本当！」

「ああ。本当だ」

「わーい！」

まおうはそう叫ぶと、俺に向かって突進してきた。

俺は「うわ！」と、まおうの突進を、間一髪でかわした。

危なかった……。今のが直撃していたら死んでいたかもしれない……。

嬉しくて俺に抱きつこうとした様だが……。

「どうしたの？」

まおうはそんな事には気付かず、どうして「避けるの」という風に首を傾げた。

「……いや、なんでもない」

そして俺はまた突進されてはたまらないと、自分からまおうに近づいた。

するとまおうは俺を抱きしめてきた。だが……。

ぐう……。結構苦しいな。

「分かった。分かった。もう良いから」

肺を圧迫され、息が苦しくなってきた俺はそう言ってまおうから離れた。

まったくやる事は子供で、力が魔物って言うのもなんぎなもんだな。

そして、まおうは森から離れる時、森に向かって「ばいばーい」と手を振り、俺とまおうはボロ家へと戻った。

まおうと共にボロ家に戻った俺だったが、まおうを家においてまた出かけた。

まおうを連れては、村を歩き回れない。

村で歩き回る理由は、メシを買う為と、ゴブリン発生について、ギルドで少し聞きたい事があったからだ。

メシを先に買うと冷めてしまうので、先にギルドへと向かった。

「すみません」と、ギルドの扉をくぐると、幹旋人も

「ようこそ、いらっしやいませ」

と俺を出迎えた。

「ゴブリン討伐の御依頼をお受けになったサイエス様ですね。本日はどのような御用件でしょうか。ゴブリン討伐の御依頼を達成なさいましたか？」

幹旋人は俺に椅子を勧めながらそう言ったが、残念ながら達成どころかゴブリンの姿すら見つけられなかったのだ。

薦められた椅子に座ると本題に入ることにした。

「いえ。そう言う訳ではないですが、少し聞きたい事があってきました」

「はい。なんなりとお聞き下さい。私に答えられることならば、出来るだけお答えいたします。サイエス様はあの難しい面接を通った方ですから、出来るだけの事はさせて頂くつもりです」

ふむふむ。相変わらず対応が良い幹旋人だ。

「実は、ゴ布林討伐の依頼を受けたのは良いのですが、肝心のゴブリンの姿が見えないんです」

「ゴブリンの姿が見えない……」

今まで対応が良かった幹旋人の表情もさすがに曇る。

ゴ布林は特有の悪臭を放つ。それを見つけれられないとなるとよほどの無能な冒険者という事になってしまう。

「一応言っておきますが、ゴ布林が悪臭を出すのは、もちろん僕も知っています。そしてゴ布林が発生したという森をくまなく歩きました、ゴブリンの姿どころか、その悪臭すらなかったんです」

「あ。いえ。もちろんそれは分かっております」

幹旋人は慌てたように言ったが、俺も幹旋人を責めるつもりは無い。

繰り返すが、ゴ布林を見つけれないなど、よほどの無能者でない限り有り得ないのだ。

幹旋人が俺の能力を疑うのも無理はない。

「ですので、ゴ布林を目撃したという詳しい場所をお聞きしたいんです。魔物発生有無の判断は、目撃情報のギルドへの申告によってなされるんですよね？」

「はい。そうです。もちろん目撃情報が一件だけでは見間違えの可能性も有ります。目撃情報の具体性。そして件数を考慮に入れて判断されます」

「つまり、ゴ布林が発生していると十分信用できる目撃情報があ

ったという事ですよね……」

「はい」

じゃあ、間違いなくゴブリンはどこかには居るはずなのか……。

「具体的な目撃情報の場所はどこなのですか？」

「はい。チェルク城の近くにある森で目撃されております」

やっぱり、あの森で間違いないはずなのか。

しかし、実際居なかったしな……。

とはいえ、目撃者がそろいもそろって見間違えたと言うのも考えられないし。

でも、一応当たったほうが良いのかな？

「あの……。ゴブリンを目撃したと言う人は誰なんです？」

「そうですね。しばらくお待ち下さい」

幹旋人はそう言うと言席を立ったが、しばらくするとファイルを手に戻ってきた。

そしてファイルを開きながら口を開く。

「チェルク城にお勤めの警備の兵士の方……。それとやはりチェルク城にお勤めの御者の方。次もやはりチェルク城にお勤めの……」

「全員チェルク城に勤めている人なんですか？」

「ええ。そうです。なにせあの森はチェルク城に近いですから」

なるほど。確かに当たり前な話ではあるか……。

「分かりました。メモを取らして頂いて良いですか？ とりあえず当たってみます。ゴブリンを目撃した時の話をもっと詳しく聞ければ、なにか分かるかも知れませんし」

俺はそう言って、目撃者の名前をメモさせて貰った。

そして、ギルドから出るとメシを買って、まおうが待つ家へと帰った。

しかし、まおうは待ちくたびれたのか、ネズミを入れてある水槽の傍で眠ってしまっていた。

まおうを起こそうかと思って傍に近寄り、まおうの肩を揺らそうと手を伸ばしたが……。

「おかあさん……」

まおうの寝言に俺の手は止まった。

だからうさぎを逃がすときに「うさぎにもお父さんとお母さんが居る」なんて言いたくなかったんだ……。

とはいっても、ああでも言わないと諦めそうにもなかったし。やっぱりなんだかんだ言っても、まだ子供なんだよな……。

仕方がないので買ってきたメシは明日の朝食にまわす事にして、まおうを起こさず、そのまま、まおうの傍で眠りについた。

第7話（後書き）

もし続きを読んでもくださるのならば、お気に入りに登録して頂ければ嬉しいです。作者の励みになります。

やはり、続きを待ってくれている人が居たり、ポイントが高くなってくると、続きを書くにも意欲がわきます。

第8話

翌朝俺とまおうは、朝飯を食べる終わるとチェルク城へ向かっていた。

「森には行かないの？」

チェルク城へと向かうと言った時、まおうはそう俺に聞いてきた。昨日、「明日も森に来よう」と言った事を、言っているのだろう。

「もちろん森には行くが、その前にチェルク城で聞きたい事があるんだ」

「そうなんだ。それってどれくらいで終わるの？」

まおうははやく森へ行って、うさぎと遊びたいらしい。

「うさぎと遊びたいなら、一人で先に森に行くか？ でも、もし俺以外の冒険者に会ったらすぐに逃げるんだぞ。もしかしたらお前を倒そうとしてくるかもしれないし、お前を倒せるほど強いかも知れないんだからな。おまえの足なら逃げるのは簡単だろう」

「ええ！？ 他の冒険者って僕を倒そうとするの？ 僕は怖くないよって言ってもダメかな？」

「ああ。難しいだろうな。いくら怖くないと言っても、嘘をついていると思われるかも知れないし」

「むーん。僕は嘘をついたりしないのにー。でも、じゃあ、僕が住んでいたお城に来たのがサイエスでよかったね。他の冒険者なら僕

倒されてたのかな？」

「ま……。俺より強くて、まおうを倒せるくらいだったらそうかな」

「そっかー。よかった！」

まおうは嬉しそうにしているが、実際、俺もまおうを最初の一撃で倒せていたら倒してただろうな……。

俺の一撃がまおうの足を傷つける事しか出来なくて、それでもまおうが泣き叫んだから、俺もまおうの話を聞く気になったんだし。

まあ、まおうを倒せなくて良かったよ。

結局まおうは、他の冒険者と一人出会うのは怖いからと、チエルク城まで着いて来る事になった。

「すみませーん。御依頼を受けたサイエスです！」

城門の前でそう叫ぶと、門番が門を開けてくれたが、俺とまおうが門をくぐると、門番はまおうの姿を見て、腰をぬかしていた。

まあ、そうだろう。

城の中にある屋敷の前まで来ると、例の初老の執事が俺達を出迎えた。

「これはこれ……は、サイエス様、ようこそお越し下さいました」

執事は、まおうの姿を見ると一瞬言葉に詰まったが、それでも何とか平静を保って言葉を続けた。

なかなか立派な執事だ。

「今日は、こちらにお勤めの兵士の方や使用人に少しお聞きしたい事があって来たんです」

「兵士や使用人でございますか？ それはまたどの様な事で御座いましょう」

「実は……。御依頼を行う為ゴブリンが現れるという森に向かったのですが、一向にゴブリンの姿が見えず……。もちろん、ゴブリンの探し方など私も心得ているんですが、それでも見つからないのです」

我ながら言い訳がましいが、ゴブリンを見つけられないなど冒険者として恥だ。

無能な冒険者と思われるのはたまったものじゃない。

だが、執事は言い訳がましく口を開いた俺に、にこやかに笑いかけた。

「いえいえ。とんでも御座いけません。とにかく主人にお会い下さい」

そう言って、執事は俺を城主（正確には息子に城を譲っているのが元城主だが）のギャストン氏の元へと案内した。

さすがに城主の館だけあって、扉もまおうがなんなくぐれるくらいには広いし、天井も高いので、まおうは腰をかがめる事無く廊下を歩いている。

城の兵士や使用人達も、まおうを見てギョッ！ とした表情はするが、取りあえずは逃げ出すこともなかった。

まあ俺がまおうを連れているのは前もって分かっている訳だから、今更まおうを見て逃げ出す事もないか。

「ギャストン様。サイエス様とそのお連れの魔王様を御案内致しました」

執事は、ギャストン氏の部屋の前まで来ると、室内にいるギャストン氏にそう声をかけ扉を開けてくれた。

俺とまおうが部屋に入ると、ギャストン氏は呆然とまおうを見上げていたが、しばらくすると我に返って口を開いた。

「おお。これは失礼致しました。大変ご立派な魔王に、思わず見れてしまいました」

立派な魔王って言うのもへんな言葉だなと思ったが、まあここはスルーしておこう。

一応褒めてくれていたみたいだし。

「実は今日は、少しこの城で働いている方達にお聞きたい事があってきました」

俺の言葉にギャストン氏は、執事に飲み物を持ってくるように合図をし、さらに俺にソファに座るように手で進めながら口を開いた。
「ほう。それはまたどの様な事ですか？」

俺は薦められるままソファに座ったが、まおうはさすがに座れないので、申し訳ないが立ったままだ。

まあそこらへんはまおうも分かってくれている様で大人しくしてくれている。

「申し上げ難いのですが……。昨日ゴブリンが発生するという森に行ったのですが、肝心のゴブリンの姿をまったく見つけられなくて

……。もちろん通常ゴブリンを見つけられないなどという事はありません。ですが実際見つけられないのです」

そして俺が「それでなのですが」と、ゴブリンの目撃者からの話を聞きたいと言葉を続けようとする、ギヤストン氏が俺の言葉を遮った。

「いえいえ。それはサイエス様の所為ではありませんまい。それどころかもしかするとゴブリンどもは逃げ出したのではないですか？」

「逃げ出す？」

ゴブリンは知能があまり高くない為、相手の技量を戦わずに見抜くなんて事は出来ない。

戦った上で敵わないと判断すればゴブリンも逃げ出すが、前もって相手と自分の強さを洞察して、戦う前に敵わなさそうだから逃げ出すなんて聞いた事が無い。

そのゴブリンが、姿を見せず悪臭の痕跡すら残さず逃げさっただけって？

「いえ。そう言って頂けるのは嬉しいのですが、知能の低いゴブリンが危機を感じて逃げるといふ話は、あまり聞いた事ありません」

だがギヤストン氏は、笑いながら首を振った。

ちょうど執事が持ってきた、ぶどう酒の水割りに一口つけてから口を開く。

「もちろん、通常はそうでしょう。しかしあなたにはその恐ろしげ

……。いえいえ、立派な魔王がいらっしゃる。魔王の姿を遠目にでも見れば、いくら低脳のコブリンと言えども逃げ出しても不思議はありますまい」

いや。まおうは森の手前で待たせて居たんだが……。

そう考え込んでいると、まおうも俺と同じ事を考えたのか「あれ？　僕は……」と口を開いた。

俺は慌ててその言葉を遮った。

「あ！　すみません。まおうにも何か飲み物を持ってきてあげてもらえますか？」

「これは失礼いたしました。同じものでよろしいでしょうか？」

「いえ。お手数ですが、なにかアルコール以外のものをお願いします」

まおうに酒を飲ませたことは無いが、万一酔っ払って暴れられれでもしたら大変だ。

極薄いぶどう酒の水割りでもここは避けるべきだろう。

まおうは俺と執事とのやり取りに、首を傾げていたが、俺がまおうを一瞥し首を振ると察したらしく口を閉じた。

ギヤストン氏にはまおうを連れて行くと言っていたんだから、本当の事を言う訳にはいかないだろう。

だが、そうするとなぜコブリンの姿が見えない？

まあそれでも本当の事を言えない以上、ここは話をあわせるしかないか。

「そう言っていたけると助かります。しかし、一応念の為、しばらく調査したいのです。それでゴブリンを目撃したと言う人の話を聞きたいのですが……」

だがギヤストン氏は俺の言葉に再度首を振る。

「その必要はありますまい。サイエス様も仰ったではありませんか。ゴブリンを見つけれない事などない。ならばゴブリンは居ないのです。ゴブリンは逃げ去ったと考えて良いでしょう」

ギヤストン氏は無有を言わせぬ様に言い切った。そしてさらに言葉が続ける。

「もちろん、ゴブリンが居なくなったのはサイエス様のおかげです。当然約束通りの報酬は支払わせて頂きます」

報酬が貰えるのは良いのだが、俺は何か釈然としないものを感じた。

実際俺は何もやってないんだが……。

だがギヤストン氏は構わず話を先に進める。

ギヤストン氏が執事に合図を送ると執事が一旦下がり、そしてお盆に金貨が入っていると思われる皮袋と、一枚の紙片を載せて戻ってきた。

そして俺の前にまず皮袋を置いた。

「お確かめ下さい。基本報酬の税引き後の金額である105Gと追加報酬分の100G。合わせて205Gで御座います」

まだ釈然としないものを感じたままだったが、とにかく金貨の枚数を数える事にした。

そして間違いなく205Gあるのを確認すると、執事が次に差し出した「受け取り」にサインをする。

これで、俺は205G間違いなく受け取ったと「おれ自身が証明した事になる。」

そして依頼主は、俺がサインした受け取りと、所得税とギルドへの依頼幹旋手数料のお金とを持ってギルドに行き依頼は完了となる。

たとえその後、もし205G無かったと俺がいくら叫ぼうが「前は受け取りにサインしたじゃないか」と言われ、たとえ裁判をしても絶対に勝てない。

依頼人の前で金を数えるのは下品だとも思われるが、ここら辺をきっちりしておかないと、いい加減な奴と見くびられると「冒険者のしおり」にも書かれている。

金を数えず受け取るのは、よほど名が知られ「俺に対して報酬を誤魔化すなんて事をすればどうなるか分かってるんだろうな？」と言えるだけの名声と実力を兼ね備えてからだ。

それだけの力がない奴が金を数えずにサインするのは、身の程知らずか、それともただの馬鹿か。どちらにしろ良いもんじゃない。

その後、ギャストン氏は「今回はまことにすばやい達成で、大変嬉しく思います」と礼を言って、さらに俺の手を強く握り、本当に嬉しそうだった。

ここまで喜んでくれるのは嬉しいのだが……。

そして執事が持ってきてくれたまおうの飲み物を、まおうが飲み終わると俺達は城を後にした。

そしてまおうとの約束通り森へ行き、まおうがうさぎと遊んでいる間、俺は木陰で寝そべりながらずっと考えていた。

やはり、どう考えてもおかしい。

確かにゴブリンの姿は見えないし、俺も報酬を貰えた。何の問題も無いように思えるが、しかし実は大有りだ。

そのゴブリンが居なくなった、いや、逃げ出した理由と思われるゴブリンがまおうの姿を見た、と言う事は、実際には起こっていないのだから。

第8話（後書き）

まおうがこっちの世界で動きが速くなっているのは、元の世界よりこちらの世界の方が重力が軽いからという設定なのですが、よくよく考えるとその場合、まおうの世界よりこっちの世界の方が「空気が薄い」という事になるんですね？

重力が小さい。気体にも当然重さはあるので、重力が軽いと気圧が下がる。1立方メートル辺りの酸素量が減る。

すると、まおうは長時間激しい動きをすると酸欠になる？

今後活かされるかどうか分かりませんが、一応裏設定ですね。

第9話

日も暮れてきたので、俺とまおうは森を後にした。

「ばいばーい」

まおうがうさぎに手を振るので、俺も合わせてうさぎに手を振ってやった。

うさぎはずいぶんまおうに懐いている様だ。

野生動物が簡単に懐いたりするのか？　とも思うが、まあ実際に懐いている。

もしかしたら異世界からきたまおうには、何か動物を引き付ける特有の匂いというかフェロモンというか、そう言うものがあるのかも知れない。

だが実際のところは分からないので、うさぎにもまおうがいい奴だと分かるんだ。そう思っておく事にする。

「よかったな」と俺がうさぎと遊べた事を言うともまおうも、

「うん。よかった！」と返事した。

夕日で葉っぱが赤く染まる小道を、俺とまおうは俺達の住処であるボロ家へと向かった。

ボロ家に着くとまおうを残し、俺はまた村へと向かう。

「寝ないでちゃんと待ってるんだぞ」

「うん。わかったよ」

まおうはそう言いながら、ネズミを入れてある水槽へと向かった。

まおうに寝るなど言うくらいなら、メシを買ってすぐに帰ってきてやれば良さそうなものだが、せっかく大金が入ったのだ。

今日は豪勢にしようと、いつもとは別の店に行くつもりだ。

なにせ205Gと言えば、いくらまおうが大食いでも数ヶ月、いや節約すれば1年分の食費になるだろうという大金だ。

今日くらいはばつといってもいいだろう。

村の中心部へと向かいながら一番立派そうな店を探し、見つけるとその店内に入った。

「さあ！　どんどん飲め！　今日も俺のおごりだ！」

店内に入るなり、景気の良さそうな男の声が聞こえた。

今日もって事は、連日奢ってやって飲んでるのか？　随分羽振りの良い話だな。

まあ俺には関係ないか。

店員にメニューを聞いて、それなりの値段の料理を大量に注文した。

一番高い料理つといきたいところではあるが、なにせまおうはよく食べる。

一番高い料理をまおうが腹いっぱいになるまでと言うのは、さすがにちよつと痛い。

だが、それでも結構な値段になるので、店員は上客だと喜んで厨房へとオーダーを通しに行った。

料理が出来るのを待っていると、さっきの気前の良い男が俺に話しかけてきた。

かなり酔っ払っているらしく、足元がふらついている。

「お。あんちゃん。どうだ一杯。奢るぜ？」

「いえ。連れが待ってるんで、お気持ちだけで」

そう言って断ったが、その男はさらに絡んできた。

「ん？ あんちゃん、よく見ればギャストン様の依頼を受けた冒険者様じゃないか？　じゃあ、あんただってたんまり貰ったんだろ？　ばーというじゃねえか」

「え？　どこかで会いましたか？」

「なに言ってやがんだ。ギャストン様の屋敷の入り口に立ってただろうが」

ああ。チェルク城で雇われている兵士の一人か。
はつきり言って、兵士の一人一人の顔まで一々覚えてない。

「家でまおうが待ってるんですよ。早くメシを持っていかないと、まおう暴れるかもしれないんで」

「え。……ああ、そうか」

そう脅すと男は、酔いが醒めたかの様に大人しくなって、自分の席へと戻っていった。

まおうをネタに脅すのは、まおうが怖がられるので良くないかも知れないが、酔っ払い相手ならまあ良いだろう。

しかし、一兵士がこんなに羽振りが良いなんて、俺への報酬もそうだがギャストン氏は気前が良いんだな。

そしてさらにしばらくすると、店員が俺の注文した料理を持ってきた。

俺は店員から料理を受け取ると何気に店員に話しかけた。

「チェルク城のギャストン氏は随分気前が良いみたいです。そこに勤めている兵士が、会ったばかりの俺にまで奢ってくれると言っていましたよ」

俺がさっきの兵士へと目を向けて言うのと、しかし店員は眉をしかめた。

「いえそれが……。以前は給料が低いと不満ばかり言っていました。羽振りが良くなったのは数ヶ月前から急にです」

「以前は給料が低いと言っていた？」

「ええ。そうなんです」

「なにか、チェルク城に大金が入る事があったんですか？」

「そうですね。来年の話になりますが、実はチェルク城はユニバース帝国によるこの村の再開発を受けて、国から買い取られる事になっているんです」

「国から買い取り？」

「ええ。そうです。そうなれば城の評価額にプラスして立ち退き料

として、かなりの補償が受けられます」

「それで、雇われている人達もそれなりの恩恵にあずかってると？」

「そうなのかも知れません。しかし、今まで給料が低いと言われていたのに、連日宴会を行えるほどの退職金を出すとも思えないのですが……」

「退職？　ここを立ち退いたとしても、城主のギャストン氏は別のところに居を構えるんでしょ？　あの兵士はついて行かないんですか？」

「ええ。この村に年老いた両親が居るとかでこの村に残るはずですよ。ですので改めて仕事を探さないといけないし、あんなに豪遊している場合ではないと思うのですが。まあこちらも商売ですので、節約した方が良くと忠告するのもしかた」

店員はそう言うのと、少し苦笑しながら肩をすくめた。

俺は店員から受け取った料理を手にもおうが待つボロ家へと向かいながら、さっきの話を改めて考えた。

国から立ち退きを要求されていて城を買い取られると言うのなら、ギャストン氏が依頼を冬までに、最悪年内にと注文をつけた理由は分かった。

チェルク城の評価額をあげる為だ。

物件の評価額は最寄の町や村の規模、そしてそこまでの距離。そして一番重要なのが、その物件の敷地が「魔物発生分布地図」

で「魔物発生地域」に指定されているか、指定されていないか。それで金額が全然変わってくる。

魔物発生地域のL Vが上がる毎にその物件の価値が下がり、L V 10（退治が不可能な魔物が発生）ともなると、二束三文だ。

このチェルク城は魔物発生地域L V 1だったが、それでも魔物発生地域外の魔物がまったく発生しないのと比べると、かなりの差だ。

誰だって魔物が発生するところになんて住みたくは無い。

元からの住民は先祖代々の土地だったりするからがんばってそれでも住もうとするが、わざわざ魔物が出るところに他から住み移ろうとする者など滅多に居ない。

魔物発生分布地図は毎年1月1日時点の情報をもって作成さる。

つまり1月1日までに魔物を駆除できれば、4月1日の公布時には、チェルク城は晴れて魔物発生地域外として地図に載り、評価額もそれに見合った金額になる。

はつきり言って俺に払った報酬なんて、その金額差に比べれば雀の涙だろう。

だが、それに関して文句を言うつもりは無い。

実際、ゴブリン討伐の報酬としては相場よりはかなり高額だった。

しかし、さっきの店に居た兵士は、連日あれだけ宴会を続けているというなら、俺と同じくらいの金を貰っているんじゃないのか？

ただの一兵士に大金を渡す必要がなぜある？

俺と同じくらいの金が貰えたと言うなら、今回の件で俺と同じく

くらい重要な役割を担ったという事か？

俺の役割は、ゴブリンを駆除する事だった。

じゃあ、あの兵士はゴブリンについてどんな役割がある？

ゴブリン発生現象を消す事と同等の……。

俺はしまつてあつた一枚のメモを取り出し、目を通した。

そして急いでさっきの店へと取って返す。

「バジャルドさん！」

俺は店に入るなり叫んだ。

「おお。さっきの冒険者様じゃねえか。どうしたい？」

さっきの羽振りの良い男が俺に近寄ってきた。

「依頼が終わったので村を出ようと思うのですが、せっかくお会いしたのでから挨拶をしておこうかと」

俺はそう言って、右手を差し出した。

「おお。そうかそうか」

男も右手を差し出し俺と握手をした。

俺は「じゃあ、これで」とその店を出た。

男は、たったこれだけの為に戻ってきたのか？　ときよんとし
ていたが、俺はそんな事にかまっては入られなかった。

バジャルド。

それはギルドの幹旋人から聞いた、ゴブリンの目撃者という城の
護衛の兵士の名前だった。

第10話

ボロ家へと戻って買って来た料理をまおうと食べた後、眠るまおうの傍に寝そべりながら今回の依頼について考えていた。

ゴブリンが発生したと言う。にも関わらずゴブリンの姿は無い。ギヤストン氏は、ゴブリンはまおうの姿を見て逃げたに違いないというが、実際まおうはゴブリンがいるという森には入っていない。そして、ゴブリンを見たという兵士には、ギヤストン氏から大金が渡されていたと考えられる……。

ゴブリンなんてはじめから居なかったんじゃないか？

それをギヤストン氏は知っていた。いや、そもそもギヤストン氏がゴブリンが居るとでっち上げた。

バジャルドがギヤストン氏から大金を貰ったのは、その片棒を担いだからだ。

そして、実際にゴブリンを倒さずに駆除を成功させたかの様に見える為、条件のあう冒険者がなかなか現れず、依頼の面接があんなに難しかったんだ。

蒼竜のカーシエスほどの冒険者が、なぜ面接に落ちたのかも分かった。

カーシエスが美形だからだ。

ゴブリンは知能が低い。

カーシエスがどれほどの腕なのかなんて分からないし、その名声に恐れをなすなんて事も無い。

ギヤストン氏は見た目の怖さで冒険者を選んでいったんだ。

だからギルドの幹旋人からみればこけおどしにしか見えない、見た目が恐ろしいだけの冒険者が面接に通った。

そして俺には、見た目だけならばこれ以上ないくらい恐ろしい、まおうが居た。

見た目の恐ろしさでゴブリンは姿を見せる事無く逃げ出した。
ギヤストン氏はこのシナリオを完成させたかったのだ。

しかしなぜだ？

そもそもどうして、ゴブリンが発生したなどという狂言をうつ必要がある？

はじめからゴブリンなど発生したといわなければすむ話じゃないか。

ゴブリンが発生したという事によって、ギヤストン氏にどんな利益がある？

魔物が発生すればチェルク城の評価額は下がる。
自分の資産が減って何の得があるっていうんだ？

誰だって自分の城は価値のある物だと思いたい。
それをチェルク城の城主であるギヤストン氏が、どうしてその価値をわざわざ下げる？

いや。ちがう！

ギヤストン氏はチェルク城の城主じゃない！ チェルク城の城主はその息子だ！

ギヤストン氏は城の名義を今年の春に息子に譲っている。

そしてゴブリンが発生したと言うのは、去年の秋ごろ……。

そうか！

すべて分かったぞ……。

見逃しても良いかもしれないが……。

しかし、ある意味俺も片棒を担がされた事になっている。

もしこのことが露見して、俺も加担していたんだろ！ という事になれば色々と問題がある。

露見したときにギャストン氏が、自暴自棄になってある事無いことを言って、誰彼かまわず道連れにしようとしないうとも限らないからな。

俺は明日、ギャストン氏と対決すべく眠りについた。

夜が明けるとまおうと朝食を食べ、そしてまずギルドへと向かう。そしてまおうには申し訳ないが、表で待っていてもらい中に入った。

ギルドの建物の扉は、まおうが通るには少し小さかったのだ。

「これはこれはサイエス様、御依頼達成おめでとう御座います。依頼主のギャストン様からお話をお伺いし、税金、サイエス様の経歴の更新などすべて済んでおります」

幹旋人は、俺がギルドの建物に入るなりにこやかにそう話しかけてきた。

ずっと誰もこなせないでいた面倒な依頼を俺が解決した事で、機嫌が良いのだろう。

だが、俺が今から話す事で、その機嫌がどうなる事やら。

「実はその依頼の事で不審な点があるのです」

「不審な点……ですか？ 確かに今回の依頼は、面接での冒険者の合格基準が不可解とは私も思いましたが……」

「はい。その合格基準の不可解さにも関わってくる話なんです」

「それはどの様な……」

俺がその不正について話すと、幹旋人は目を見開いて驚いた。

「そんな……まさか！ 確かにそれは可能です。いえ、やろうと思えば簡単とも言えます。ですがそれだけに大問題です！ 言うなれば「魔物発生分布地図」の改ざんともいえる事なのですから……。魔物発生分布地図が信用できないとなると、すべての旅人は不利益をこうむります！」

なるほど、俺はそこまでは考えてなかったが、確かにそうだ。

魔物が居るところを居ないと改ざんする事は難しいが、魔物が居ないのに居ると改ざんするのは簡単だ。

そしてそうなれば旅人は護衛の冒険者を雇わなくてはならなくなる。

確かに旅人にとっては大問題か。

「とにかく、一緒にチェルク城へ行ってくれませんか？ ゴブリン発生情報はこのギルドに持ち込まれ、そしてその情報を元に魔物

発生分布地図が作成されました。貴方も騙された一人。そして片棒を担がされた一人でもあります」

俺のこの言葉に、幹旋人の表情が険しくなる。

「……分かりました。行きましょう」

幹旋人は、上着を羽織ると出口へと足を進ませたが、不意にその足を止めた。

「ギルド本部へ手紙を出しておきましょう。私はこれからチェルク城のギャストン氏の元へ、依頼について不審な点があるから会いに行くと。私に何かあって帰ってこなければ、ギャストン氏は調べられるでしょう」

さすがにこの幹旋人は優秀だ。

俺とまおう、そして幹旋人はチェルク城へと向かった。

道すがら幹旋人に改めて名前を聞くと、アルトウールと言うらしい。

そして門番へと声をかけしばらくすると執事がやって来た。

「これはこれはサイエス様、今日はどのような御用件で」

執事は俺にそう声をかけたが、俺はここはギルドの幹旋人に話を譲った方が良くと判断し、アルトウールに向かって「どうぞ」という風に手で促した。

「実は、今回の御依頼について、ギャストン様にお聞きしたい事が

あり参りました」

執事は渋い顔をしたが、ギルドの幹旋人にそう言われては断ることも出来ず、俺達を中に通した。

もし俺とまおうだけで来ていたら「もう依頼はすんだのだから、貴方とは関係ない」とでも言われて追い返されていたかもしれない。まおうの力で、力ずくで門を通っては、こちらが犯罪者になってしまうし。

やっぱり、アルトウールについてきて貰って正解だった。

「それで、依頼に何か問題がありましたかな？」

ギヤストン氏は、俺達を部屋に招き入れ、執事から依頼について話があつてきたと耳打ちされるとそう切り出した。

「今回の御依頼は、ゴブリン達はサイエス様がお連れになっている魔王の姿を見て逃げ出した……。なので依頼は達成。こういう事でございましたね？」

ギヤストン氏の問いかけに対して、アルトウールが答えた。

ここはまだ、アルトウールに任せた方が良さだろう。

「ああ、何か問題があるかね？　ゴブリンが発生していたはずの森をくまなく探して見るがいい。ゴブリンなどどこにも居ないではないか。逃げたと考えるのが自然であろう？」

ギヤストン氏は余裕の表情で切り替えしたが、その言葉にアルトウールは俺をちらりと見た。

俺の出番だな。

俺は、肩をすくめて少しおどけた口調で言った。

「すみません。ギャストンさん。実は、その森にまおうは連れて行っていないかったんです。ですので、ゴブリンがまおうの姿を見て逃げ出すなんてありません」

「なんだと！ 魔王を連れて行くと言ったではないか！」

ギャストン氏は、色をなして怒鳴った。

それはそうだろう。せっかく面接を繰り返し、やっとこの上なく条件にぴったりのと思って探し当てた冒険者が、自分の計画通りに動いていなかったのだから。

俺は、怒鳴るギャストン氏に向かって悪びれる事無く口を開いた。「その件については謝ります。ですが、ゴブリンがまおうに恐れをなして逃げたのでなければ、どうして居ないのでしょうか？」

「っそ、そんな事わしの知ったことか！ 実際居ないのだから、ゴブリンは駆除されたで良いであろうが！」

ギャストン氏は怒鳴り続けているが、俺達にはどこ吹く風だ。

俺は冒険者の端くれだし、アルトウールも荒くれ者の冒険者の相手をしてきたのだ。この程度の恫喝でびびる様な事も無い。

むしろ、一番ごついまおうが、ギャストン氏の怒鳴り声に体をビクッ！ っとさせていた。

「ゴブリンは居なくなっただけ……。のではなく、はじめから居なかったのでは無いですか？」

「何を言うか！ そんな事をしてわしに何の得がある！ 馬鹿も休み休みに言え！」

「はい。普通で考えれば、自分の持ち物である城の評価額が下がる様な事はしないでしょう。ですが、この城。今は誰の物なのですか？」

俺は少し首をかしげ、「ん？」という風にギャストン氏に問いかけた。

「ああ、今はこの城は息子の物だが！　それがどうしたと言うのだ！」

人間、痛いところを突かれると大声を上げて怒鳴ると言うのが本当だな。

俺は本題に入った。

「ギャストンさん、あなた……贈与税を脱税しましたね？」

俺の指摘にギャストン氏の顔色が変わった。

贈与税。

それは、人に財産をあげると掛かるという不思議な税金の事だ。その税率は、財産の持ち主と贈与相手との関係、物件なら何年保有していたかなど、複雑な要素が絡み合い、一言で説明するのは難しい。

だが、その物件の評価額が低くなれば、税額が低くなる事に間違いは無い。

「去年の秋にゴブリンが発生したと申請し、今年の魔物発生分布地図で魔物発生地域に認定され評価額が下がると御子息に城を譲り贈与税を低く申告した。そして、今また国が城を買い上げるとなると、ゴブリンが居なくなったと魔物発生地域外として評価額を上げ、立

ち退き料を吊り上げる。あなたはそう目論んだんだ！」

俺はそう言って、ギャストン氏に指を突きつけた。
決まった！

俺の言葉にギャストン氏はその場に崩れ落ちた。
そして床を手で殴りながらまた怒鳴った。

「なぜだ！　なぜ息子に城を譲るのに、税金を払わなければならん
！」

いや、確かに俺もそれには同感だが、決まりだし……。

なんか、悪いことをした気がしてきたな……。

だが俺がそう思っているとアルトゥールが口を開いた。

「ですが、あなたのした事は他の人に多大な迷惑を掛けたのです。
魔物が発生すると思って、遠回りに旅した人も大勢いたでしょうし、
護衛の冒険者を雇わなくてはならなかった人も大勢いたでしょう」

そう。それだ！　やっぱり悪い事なのだ。

俺は、満足げに頷いた。

そしてまおうは、難しい話に飽きてきたのか、小さくあくびをした。
た。

そして、床に崩れ落ちていたギャストン氏はさらに崩れ、その場
に倒れ込み嗚咽をかみ締めながら絨毯を爪で掻き爪づいていた。

自業自得とは言え、まあ脱税は重罪だからな。牢獄に入る事にな
るのか……。

俺がそう気の毒そうに思っていると、アルトウールがギヤストン氏の傍に跪いて声をかけた。

「……ギヤストン様。ゴブリン発生 of 報告は何かの間違いだった。そう申請しましょう……。そうすれば評価額の再計算がなされて贈与税の差額が追徴課税されますが、脱税には当たりません」

「本当か！」

ギヤストン氏はガバッと起き上がると、アルトウールにそう言った。

「はい。ただし、村にも迷惑を掛けたのですから、村にも損害に見合った金額の寄付をして下さい。村に旅人が来なかった主な原因はデスティニ王国の件もありますが、今回の魔物発生 of 事も少なからず関係有るでしょう。今回はそれで収めましょう」

アルトウールの言葉に、俺は、うんうん。と頷いた。

最後の良いところを持っていかれた感じではあるが、実際アルトウールの言う解決方法が一番だろう。

ギヤストン氏も起き上がり、アルトウールの手を取り「ありがとう……」と頭を下げている。

こうして事件を解決した俺達は、ギヤストン氏の部屋を後にすべく扉へと向かうと、執事が扉をあけ俺達に深々と頭を下げた。

扉をくぐりさらに進んで、城の門も出た俺達は、振り返り改めてチェルク城を見上げた。

「やれやれ。金持ちにも金持ちなりの苦労があるもんですね」

俺がそう言いながら首をすくめると、アルトウールは苦笑した。

「味わいたくない苦勞なのか、味わってみたい苦勞なのか、判断に困りますけどね」

「ええ。まったく同感です」

そして、チェルク城を背にして俺達は村へと向かう。

「そう言えば、俺のゴ布林討伐の成功報酬はどうなるんですか？
実際ゴ布林討伐の依頼は、達成不可能という事になりますけど。
成功報酬は返さないといけないんですか？」

村へと帰る道すがら、俺が投げかけた疑問にアルトウールは笑って首を振った。

「依頼を受けて契約する時に、ほとんどの冒険者様はその契約書の裏面まで読みませんが、裏面にこう但し書きが付いているのです。
『依頼に対してその達成が不可能な場合、その不可能である事由について依頼人に責が有る事象については、その依頼が達成されなくとも、冒険者は成功報酬を受け取る権利がある』と」

つまり、依頼が達成できないのは、そもそも依頼が無茶だったんだから、金は黙って受け取っておけ。という事か。

まあこれで何もかも丸く収まったかな。

アルトウールとは村に入ったところで別れて、俺とまおうはボロ家へと向かった。

そして荷造りをしてボロ家を出る。

家を出る時、忘れずにネズミは放しておいた。

「さあ、次に行く村には魔王が居るらしいからな。もしかしたらお前の仲間かも知れないぞ」

「本当！」

「ああ。本当だ。そしたらもう一人じゃないからな！」

俺はまおうを元気付けるつもりで大きな声で言ったが、まおうは不思議そうに首を傾げた。

「僕は今でも一人じゃないよ？」

「……そうだな」

俺は力いっぱいまおうの背を叩いた。俺の手の方が痛かったが、まおうにはこれくらい力いっぱい叩かないといけない。

そして俺とまおうは、次の村を目指してベイト村を後にしたのだ。
った。

第10話（後書き）

次回からは他の村の魔王に会いに行く話になります。

第11話

「まおう、ここが魔王が居るって言われているエクリス村だ」

俺とまおうはベイテ村で大量のホシ肉を買い込み数日をかけてこのエクリス村へとたどり着いた。

ベイテ村で大金を手に入れるまでは、旅をしながら俺が動物を狩ってそれを料理して食べていたんだが、まおうは無類の動物好きだ。

だが、それでも食べねば生きて行けない。

まおうは俺が狩りをし取った獲物を調理している間、ずっと目を瞑り耳を塞いでしゃがみ込んでいた。

そして俺が「飯の用意が出来た」と声をかけると無言で飲み込む様に食べていたのだった。

殺したくないのに食べねばならない。残酷な矛盾だ。

だから金が入った俺はまおうの負担が少しでも和らぐように、ホシ肉を買い込み旅の途中で狩りをしなくて良い様にしたのだ。

殺して食っているのは、自分で殺しても、自分の仲間が殺しても、他の誰かが殺しても同じじゃないか。

ただの現実逃避の上に自己欺瞞だろうと言われるかもしれない。

確かに、そうだ。

でも、人は現実だけを見て生きてはいけない。

生きていくには、時には自分自身を誤魔化す事も必要だ。

まだ子供のまおうにつきつけるには残酷な現実だろう。

まあとにかく、まおうを悲しませずにすむ方法があるなら、それに越した事はない。

「どうするの？　また僕がお手玉するの？」

ベイテ村に入るときは、村人がまおうを怖がって臨戦態勢に入ったので、まおうが俺のいう事を聞くと村人に分からせる為に、まおうにお手玉をしてもらったのだ。

「そうだな。たぶんやってもらおう事になるだろうな」

「うん。分かった！」

だが俺達がエクリス村に近づくと、村の様子がどうもおかしい。のぼりの様な物が沢山掲げられている。

しかもそののぼりに何か文字が書かれているのだが、村に近づくにつれその文字が読み取れる様になると、なんとそののぼりにはこう書かれていたのだ。

『ようこそ！　サイエス様！』

『魔王大歓迎！』

……なんだこれは？

「どうしたの？」

のぼりに書かれた文句に俺が我を忘れて呆然としてみると、まおうが不思議に思い声をかけてきた。

ああ、そうか。まおうはこっちの文字が読めないんだったな。

「どうやらお手玉はなくて良いらしい」

「……そうなんだ」

ん？　なんか残念そうだな？

「どうしたお手玉したかったのか？」

「だって、せっかく一生懸命練習したのに！」

「ああ。そうか……」

まあまおうの気持ちも分からないでもないか。
本当に一生懸命練習してたしな。

「うーん。とにかく村に行ってみよう」

「うん。わかった」

俺とまおうが村に近づき、村の手前まで来ると中年の男が話しかけてきた。

「冒険者のサイエス様とそのお連れの魔王様ですね？」

「ええ、そうですけど」

「私は、このエクリスの村長ジェイラスと申します」
男はそう言うのと右手を差し出してきた。

村長にしては若いな。それだけやり手っていう事かな？ まあ友好的に迎えてくれているみたいだし、俺達から差し出された手を拒む理由はないか、と俺も右手を差し出し握手を交わす。

「始めまして、サイエスです」そしてまおうへと視線を移し「これが……説明は不要かと思いますがまおうです」

まおうはペコリと頭を下げた。

村長のジェイラス氏は、まおうが頭を下げた事に驚いたようだった。

「これは……魔王に挨拶をして頂けるとは思っても見ませんでしたな」

ジェイラス氏はそう言って破顔した。

「それで……。歓迎して頂いているのは良いのですが、どういう訳です？」

困惑気味に問いかける俺に、ジェイラス氏は笑いながら答えた。

「いえいえ。ベイテ村のギルドから魔王を従えている素晴らしい冒険者がこちらに向かって来ていると連絡があったものですから、それは是非お出迎えしなければと思ったしだいです」

アルトウールか……。

確かに前もって、まおうを連れている冒険者がそちらの村に向かったと連絡してくれていれば、怖がられなくてすむのでありがたい。やっぱりいい仕事するな！。

とはいえ、いくらなんでも大歓迎過ぎる気がするぞ？

「あの……。もしかして僕達に何か依頼したい事があるのですか？」
するとジェイラス氏は、薄く微笑んだ。

「さすが魔王を従えている方です。察しがいい。仰るとおりです」
下手に誤魔化さず直球できたか。

「まあ誤魔化された挙句回りくどい事をされるより、話がてっとり早くて良い。」

「それはどんな依頼なんですか？」

「それについては、この様なところで立ち話もなので、まずは村にお入り下さい。みな歓迎しております」

こうしてジェイラス氏を先頭に、俺とまおうはすんなりとエクリス村へと入る事が出来たのだった。

村に入ると、ジェイラス氏に案内されて道を進む俺とまおうを、村人達が歓迎する様に手を振ってくる。

うーん。きっとこの村人達の歓迎ぶりは、ジェイラス氏という依頼に関係があるんだろうな……。

俺の後ろを歩くまおうへと振り返ると、珍しく子供が逃げ出さないのが嬉しいのか、自分に対して手をふってくる子供に、まおうも手をふり返している。

しばらく歩くと、なかなか立派な一軒家へとたどり着いた。
とはいえ、まあ村長の家としては標準的な感じかな。

俺がそう胸中で感想を述べていると、ジェイラス氏が俺達へと向き直り、「どうぞ」とでも言う様に片手を差し出した。

「こちらが、サイエス様と魔王様がエクリス村へご滞在中に御使用して頂く家となります」

俺達の家かよ！

いくらなんでも歓迎し過ぎだろう。

あまりの事に立ち尽くしている俺に、ジェイラス氏が口を開いた。

「滞在中に必要と思われるものはすべて用意させて頂いております。使用人やメイドなども御必要でしたら仰ってください。派遣いたします」

「あ、ありがとうございます」

俺にはこう返事するのが精一杯だった。

「すごい。家だね！」

まおうは、俺達への歓迎振りを素直に喜んでいる。

その後ジェイラス氏は「御依頼の件はまた明日にでも。今日は旅の疲れを癒して下さい」と言い残し立ち去ったのだった。

「ああ。すごい家だな……」

「だよね！」

家への出入り口の扉どころか、家の中の各部屋の扉まで、まおうが楽々通れるくらいの大きさになっている。

その不自然に大きな扉は、明らかにまおうの為のものだ。

ベイテ村からの連絡で、魔王を連れた冒険者がいると聞いてから、急いで改築したっていうのか？

時間的にもかなり無理したはずだ。

それほど歓迎してくれていると思うと嬉しいと言うべきなのだろうが、さすがにここまで来ると、ジェイラス氏が言っていた依頼と言うのが気に掛かるな……。

明日のジェイラス氏との依頼についての話は、かなり気を引き締めて掛からないといけない様だった。

第12話

翌朝、なんと家には御丁寧に食べるものまで蓄えられていたので、俺とまおうはありがたく朝食として頂き、食べ終えたころジェイラス氏からの使いがやってきた。

「サイエス様、まおう様、村長のジェイラスが昼前にこちらへお伺いしたいと申しておるのですがよろしいでしょうか？」

なんだ？ 俺達を呼びに来たのかと思ったら、わざわざこっちに着て良いかを聞きに來たっていうのか？

本当に随分丁寧な対応だな。

「ええ。もちろんいいですよ。ジェイラス氏にはよろしくお伝え下さい」

俺がそう返答すると、ジェイラス氏からの使いは、「かしこまりました。では、その様にお伝えします」と丁寧にお辞儀をし立ち去った。

「僕達歓迎されてるのかなー？」

ジェイラス氏がかなり俺達に対して気を使っているらしいという事をまおうも察したらしい。

「ああ。そうみたいだな。だが……」
まったくの善意でこれだけ歓迎してくれるはずがない。
歓迎振りに見合った要求があるはずだ。

「だが。なんなの？」

「あ。いや、なんでもない。それよりもこの家は気に入ったか？」
あんまりまおうに心配させても仕方がないだろう。俺は話題を変えた。

「うーん。家が綺麗で扉が広いのは良いけど、ネズミが居ないのが残念かなー」

「そっか」

「うん」

確かに俺が出かけるときはまおうは留守番だったから、ネズミでも居ないと独りでは寂しいんだな……。

とはいえ、ジェイラス氏にネズミを要求するわけにもいかないか。

そしてジェイラス氏からの使いが言うとおりに、昼前にジェイラス氏がやってきた。

「お疲れのところ申し訳ありません」

「いえ。ようこそジェイラスさん。お待ちしております」

俺はジェイラス氏を促して家の中に誘った。

とはいっても、この家自体ジェイラス氏から提供されたものなので、そのジェイラス氏にお入り下さいと言うのもなにやらへんな感じだ。

そしてリビングにたどり着いた俺達は、違和感を感じながらもさ

らにジェイラス氏へ座るように薦めた。

「失礼します」

ジェイラス氏が座ったのを確認すると俺も椅子に腰を下ろした。
そしてまおうも腰を下ろす。なんとまおうが座れる椅子まで用意
されていたのだ。

「それで僕達に頼みたいというのはどんな依頼なんですか？」

「はい。この村の近くにある洞窟に、魔王が棲んでいるのは御存知
でしょうか？」

「ええ。知っています」

なにせその魔王とまおうを会わせる為にこの村に来たのだ。
だが、ジェイラス氏のこの言い様だと……。

「実は、その魔王を退治して頂きたいのです」

だよな……。

「その魔王はどんな魔王なのですか？」

「強い……です。隠してもしようがない事ですので正直に言います
が、今まで何人もの冒険者に退治を依頼しましたが帰ってきた者は
居ません」

それで、まおうを連れてくる俺ならばその魔王を退治できるので
は？ と期待しているって訳か。

「実際、その魔王から村はどんな被害を受けているんですか？」

「かなりの数の家畜が襲われました。畜産が主な産業のこの村にとつては死活問題なのです」

なるほど、それじゃ確かにその魔王を退治したいと思うのは当然か。

とはいえ、もしまおうと同じ世界から来た仲間だとしたら、退治してしまう訳にもいかないんだが……。

それにまおうの仲間だったとしたら、大量の肉を食うのは当たり前だしな。

だが、どこにでも良い奴もいれば悪い奴もいる。

まおうと同じ世界から来ていたとしても、まおうの様に良い奴とも限らない。

ジェイラス氏にもっと色々聞くべきか。

「その魔王は人を襲ったりはしないんですか？」

ジェイラス氏は俺の質問に、意外そうな表情を見せた。

「そういえば……、派遣した冒険者はみな帰って来なかったですが、村人が襲われたという被害は無いですね」

「なるほど……」

自分を退治しようとする相手を迎え撃つのは、正当防衛と言える。勿論俺もまおうと会う前だったら、それでも冒険者を殺したひどい魔物だと思ったかも知れないが、俺はまおうと会って魔物と呼ばれる者達にも、ちゃんと心があると分かった。

やはり、一度その魔王には会ってみるしかないか。

しかしそうになると魔王を倒すと言う依頼を受けても良いものかどうか……。

すると俺が考え込んで喋らないのをジェイラス氏は不審に思った様で、探るような視線で問いかけてきた。

「どうかしましたか？」

「あ、いえ、それほどの魔王に僕達が勝てるものかどうかと考えていました」

本当は、別の事を考えていたのだが、取りあえず誤魔化す為だ。

「はい。確かに難しいかも知れませんが。しかしあなたは魔王を従える秘術をお持ちとか。最悪、倒さずともこの村から魔王を連れて行ってもらえれば十分なのです」

そうか、その魔王がまおうの仲間だったとしたら一旦一緒にこの村を離れて貰えば良いっていう事だな。

「分かりましたその依頼受けましょう」

だが、俺の言葉にまおうが「ええ！」驚きの声を上げた。

自分の仲間かも知れない相手を倒すと言う依頼を受けたのにびっくりしたのだろう。

俺はちらりとまおうを一瞥すると、改めてジェイラス氏に視線を戻した。

「多分、その魔王は倒すのではなく、連れて行くことになると思いますよ」

俺の言葉にまおうの顔はほころんだ。と言ってもジェイラス氏は多分分かっていないだろう。

硬い皮膚で覆われたまおうの顔の表情を読み取るのは難しいのだ。俺だって最近やっと分かるようになったのだから。

しかしどうやらこの分では、今回の依頼には裏はなさそうだな。あまりにも至れり尽くせりの歓迎振りに警戒したのだが、それは単にそれだけ困難な依頼で、どうしても俺達に受けて欲しかった為の様だ。

だがそうなると勿論……。

「それで肝心な事を聞き忘れておりましたが、報酬の方はどうなっています？」

「勿論、報酬については十分な額を用意させて頂いております。350Gで如何ですか？」

おお、前回のゴブリン討伐の報酬も高額だったが今回はそれを越えるぞ。

もつとも、ゴブリン討伐と魔王退治では元々の相場が違うので、相場との倍率で言えば前回の方が破格だったが、今回の額も相場よりは遥かに高い。

今回もかなり美味しい依頼になりそうだな。

とは言え……。

「それは勿論、ギルドを通すんですね？」

「はい。それは勿論です。もしかしてギルドを通さない方がよろし

いので……」

「いえいえ。とんでもない。むしろギルドを通して貰わないと困るので確認したんです」

疑わしげに言うジェイラス氏に俺は慌てて否定した。

ギルドを通すと当然所得税の20%源泉徴収されるのだが、通さないと脱税を疑われてしまうし、ギルドを通さずに税金を納めるのは自分で税務署に行って申告しないと行けないので面倒だ。

しかも、ギルドを通さなかった事がギルドに知られれば、今後ギルドから仕事を回して貰い難くなる。

「それを聞いて安心しました。この村では幸いに今までその様な事は無かったのですが、ギルドを通さないで仕事を受けた挙句、依頼達成の準備の為に称して前金を要求し、そのまま逃げる冒険者もいると聞きましたので……、いえ勿論サイエス様がその様な事をすると言っている訳では有りません」

ギルドを通さずに依頼を頼んだとなると、依頼者の方もギルドに良い顔をされない。ギルドに依頼斡旋の手数料が入らないからだ。

その為、たとえ前金を持ち逃げされても訴える事が出来ず泣き寝入りする事も多いと聞いている。

ジェイラス氏の心配ももつともだろう。

ここは一つジェイラス氏を安心させてあげよう。

「ええ。分かっています。それにです。僕が前金を持ち逃げしたとして、逃げおおせられると思いますか？ まおうが一緒なのに」

俺の言葉にジェイラス氏は苦笑した。

「なるほど。サイエス様はこの世でただ一人魔王に従えるお方。名を変え服装を変えても見誤る事はない」

「そういう事です。自分でいうのもなんですが、僕はこの世でもっとも詐欺が出来ない男の一人ですから」

「はっはは。確かにそうですね」

「はい」

俺とジェイラス氏は、互いに顔を見合わせて笑い、そして共に立ち上がると握手を交わしたのだった。

第13話

翌日早速俺とまおうは、魔王が居るといふ洞窟へと向かった。

その洞窟は村から一時間ほど歩いた場所にある。

結構離れた場所にあるという印象だが実際エクリス村に住んでいる村人に見れば、歩いて一時間の距離に魔王が棲んでいるっていうのは大変な恐怖なんだろうな……。それに実際家畜の被害も多いらしい。

俺とまおうはしばらく黙って道を進んでいたが、不意にまおうが心配そうに聞いてきた。

「今から会いに行く魔王って悪い人なの？」

「いや、それは会ってみないと分からないな」

「でも、村の人は困ってたみたいだよ？」

「家畜が襲われている事を言ってるのか？」

「ううん。そっちもあるんだけど……冒険者がやられちゃっている方……」

しまった。まおうは気まずそうにしてるな……。

村人から食べ物をとっていたのはまおうも一緒だからな。悪気は無かったんだが、痛いところを突いてしまったか。

とにかくフォローしておこう。

「まあ、家畜を襲うのも生きるのには仕方が無いし、冒険者の事だって正当防衛って考える事も出来るしな」

「うん。そうだね！」

どうやらまおうの機嫌も直ったようだし、俺達は先を急いだ。そしてしばらく歩くと目的の洞窟に辿り着く。

その洞窟は大きな岩山の横っ腹に穿れており、典型的な鍾乳洞らしい。

さすがに魔王が棲んでいるだけあって、入り口はかなり広い。まおうが屈まずに楽々入れるくらいの高さがあった。

「暗いね……」

「そうだな」

まおうが言うとおり洞窟はかなり長くて、奥には日の光がまったく届かず、濃い闇が支配している。

俺は持ってきた松明に火をつけると、まおうとつれて洞窟に足を踏み入れた。

洞窟の中は尖った石柱が天井や地面からニョキニョキとあちこちから生えている。

そして俺が持つ松明の光に驚いたのか、コウモリが飛び立つ。

「なんか怖いね……」

まおうはそう言って、身を縮こまらせた。さすがにまおうもコウモリを可愛いとは思わないようだな。

しばらく歩くと、前方に微かに明かりが見える。どうやらあそこに魔王が居るらしいな。

「よし！ もうすぐだ！」

「うん！」

俺達は歩みを速めてその場所に近づいた。だがその手前で一度立ち止まる。

「どうしたの？」

「しっ！」

俺はまおうに黙るように言って、松明の火も消した。そして小声でまおうに話しかける。

「一応中の様子を窺がうんだ」

「うん、分かった」

俺の言葉にまおうも小声で返事し、俺とまおうは改めて静かにその明かりの元へと近づく。

その明かりは広い「部屋」の入り口から漏れてきていた。

もちろん、本来洞窟に部屋などないが、どうやら元々あった洞窟の広い横穴の入り口部分に岩を積み上げて、わざわざ入り口を狭くしている様だ。

とはいえ、俺は楽々通れるし、まおうも少し腰を屈めれば通れるくらいの広さはある。

俺とまおうはその部屋の入り口にさらに近づいた。

そして部屋の中を覗き込むと……。果たして魔王がそこに居た。

その魔王はまおうより少し大きく、魔王と同じく硬い鎧の様なゴツゴツとした皮膚を持っていた。

そして……。

「なあ、まおう。お前のいた世界って、人によってあんなに体型が違うものなのか？」

俺の問いかけにまおうは「ううん」と首を振った。

身体が大きい割りに胴体が細く手足も長いまおうは、言うなれば俺達人間がそのまま大きくなった様な姿なのだが、部屋の中にいる魔王はかなりずんぐりとした体型で、足の長さなどまおうの半分位しかなさそうだ。

せっかく来たのだが、どうやらまおうの仲間じゃなかったか……。

俺はため息を付いたが、まおうもがっくりとうな垂れている。

さーて。どうするかな……。

俺は身体向きを変えてその場に座り込んだ。

まおうの仲間じゃなかったから、じゃあ討伐しようって気にもならないし、だいたいまおうの仲間に違いなんて思い込んでたからあまり考えてなかったが、戦ったとして俺が魔王に勝てるのか？

うーん。まおうも戦いに向いている性格じゃないしな。

「どうするの？」

「俺もそれを考えてたんだが……」

だがそこへ部屋の中から「ダツレダ！」と割れた声が聞こえた。

しまった！　さすがに部屋の入り口でグダグダしてたのはうかつ過ぎたか。

仕方が無い。俺は覚悟を決めて姿を表す事にした。とは言っても戦う気は無い。

「俺は旅の冒険者だ！　お前はもしかして別の世界から来たって言うんじゃないのか？」

「ナツゼ、ソレヲ」

おお、まおうの仲間じゃなくても、やっぱりこことは別の世界か

ら来たんだ。

「俺はまおうを連れているんだ。それでお前達が別の世界から来たって聞いた。少し話を聞かせてくれ」

「マッオウダト？」

「ああ、魔王だ」

魔王が中に入れと言うので、俺とまおうは部屋の入り口をくぐった。部屋の中には明かりもあるので松明の火は消した。

だが部屋に入り姿を見せたまおうに、魔王は落胆してうな垂れた。

「オツマエ……オツレノナカマジヤ、ナツイノカ……」

「うん……ごめんね」

まおうは申し訳なさそうにしているが、まおうだって落胆してるんだろうな……。

しかし、それはさておき、まおうに比べてこの魔王はどうしてこんなに言葉が片言なんだ？

「お前は どうして普通に喋れるんだっけ？」

「僕は、言語翻訳の魔法を自分に掛けたんだよ」

「あんたは？」

「オツレハ、ソッソナマツホウナンテ、シッラン。オツレハ、ジツカンヲカッケテオツボエタダ」

なるほど……別の世界から来たといっても、全員が魔法を使えるわけじゃないのか。

「その魔法ってこの魔王にも掛けてやれるのか？」

「うん。大丈夫だよ」

おお、それは都合がいい。

「じゃあ、その魔法掛けてやってくれ」

「うん。分かった」

まおうはなにやらぶつぶつと呟き、魔王に掌をかざした。

「これで大丈夫と思うよ。自分の世界の言葉の心算で喋ってみて」

「本当か？ おお、本当だ！ 便利なものだな。やっぱり言葉が通じないと色々と不便だったからな」

魔王は、すらすらと言葉が出る事が嬉しいらしい。

よしよし、これで話しやすくなった。さすがに聞き取りにくかったからな。

「それでどうしてこの世界に来たんだ？」

「いや、それがさっぱりだ。突然、深い霧に囲まれたかと思うところの世界に居た」

俺はその言葉にうーんと考え込んだ。

「どうしたのだ？」

「いや、まおうの時と一緒になんだよ。元居た世界は違ってても、こっちの世界に連れて来られた理由は同じなのかも知れないな……」

「じゃあ、やっぱり俺がこの世界に連れて来られたのは、こっちの世界に何か原因があるっていうのか！」

突然の魔王の剣幕に、俺は慌てて説明した。

「いやいや、そうとは限らないが、共通の理由があるのかなって」

魔王は俺の言葉に口を噤んだが、やはり納得出来かねる様に唸っている。まあ、突然、仲間の居ない世界に1人で連れて来られたんじゃない、腹立たしくもあるか。

俺は、魔王がこの世界に来てからの話を聞くことにした。

第14話

魔王は、元々はここからかなり離れた全然別の場所の、山奥に連れて来られたらしい。

そしてまおうと同じ様にあまりの状況に呆然としていたが、これもまおうと同じ様に空腹を覚えた。

だが、この魔王はまおうとは違い、幸いにもこっちの世界の植物や果物も食べられたのでそれを食べて空腹をしのいだが、すぐに腹がすく。

どうやら魔王の世界とこの世界とでは食べ物の栄養素や消化具合が違うらしく、どんどん食べないと身体が持たないらしかった。

魔王は1人連れて来られた世界で不安を感じながらも生きる為に食べ続けていたが、何分魔王の食べる量は半端なく、しばらくすると周辺で取れる果物や植物を食べつくしてしまったのだ。

魔王が食べ物を求めて山を降りるとそこには大量の果物や野菜が実を付けていた。魔王は喜び勇んでそれらを貪り食った。

魔王には生きる為の当然の行為だったが、それは山村の村民が育てていた作物だったのだ。こうして魔王は「作物を荒らす魔物」として冒険者が派遣される事になった。

そして、田畑の持ち主の村民達は魔王が来ると恐れて逃げていってしまったので、魔王が初めてこっちの世界の人間に会ったのは、自分を征伐に来た冒険者のパーティーだったのだ。

こっちの世界の人間は、まおうや魔王の事をゴツゴツとした硬い皮膚を持つ巨大な魔物と思っているが、魔王にしてみればこっちの世界の人間こそが「ぶよぶよとした気持ちの悪い肌を持つ化物」だった。

そしてその化物達は有無を言わず魔王に襲い掛かってきた。

勿論、この時の魔王はまったくこっちの世界の言葉は話せず意思の疎通なんて不可能だったのだが……。

化物に襲われた魔王は恐怖して逃げまどった。だが化物達の攻撃から逃げ回っていても時おりその化物からの攻撃を受ける事もある。そして気付いたのだ。

この化物達は弱い。と。彼らの攻撃は魔王に傷一つ作る事が出来なかったのだ。

魔王は自分を恐怖させた身の程知らずの化物達に反撃する事にした。そしてまもなくその化物達の息の根はすべて止まったのだった。

冒険者達を殺しても、魔王には何の罪悪感も無かった。

そう、俺達冒険者が森の中で襲ってきた、スライムの群れを倒すのに何の罪悪感も感じないように……。

だがそれから魔王の逃亡の日々が始まった。

冒険者にもピンからキリが居る。

魔王の事を、田畑を荒らす程度の魔物、と思って派遣された冒険者などとは比べ物にならないほどの腕を持った冒険者が派遣されて

きた。

なにせ魔王は「冒険者のパーティーを惨殺した凶悪な魔物」なのだから、その凶悪な魔物を討伐するには一流の冒険者達が必要なのだ。

魔王は次に来た冒険者達の戦士が繰り出す剣は軽々とはじいたが、魔法使いには苦戦した。

魔法使いが繰り出す火炎に、魔王も口から炎を吐いて応戦したが、その魔法使いはさらに氷雪や電撃などを魔王に浴びせてきたのだ。

魔王は氷雪に身を切られ、電撃に皮膚を焦がされながら逃げまどった。

魔王は高い崖の上まで逃げると、そこから身を躍らせた。さすがに冒険者達はそれ以上魔王を追うことが出来ずに何とか逃げ切る事が出来た。

だが、いくら硬い皮膚を持つ魔王とはいえ、崖から飛び降りては体中傷だらけで文字通り満身創痍となり、地を這う様にしてさらに逃げた。

そしてそれから冒険者から逃げ続け、一箇所留まらず移動しながら生きる為に食料を貪り食っていたのだが、果物や植物よりも動物を食べる方が身体が持つ事に気付いた。

こうして魔王は田畑を襲う事よりも、牧場を襲う事が多くなったのだった。

口から炎を吐くとはいえ、まおうの様に動きが早くない魔王には、野生動物を捕まえるのは難しく、柵の中に居る家畜しか捕らえることが出来なかったのだ。

そして逃げながらも少しずつ人間の言葉なども覚えてこの村に辿り着いたという。

これが俺が聞いた魔王の話だった。

俺には言葉が無かった。

俺の正直な感想を言うと、魔王って何か悪い事をしているのか？という所だ。

確かに冒険者を……人殺しをしているんだが、それにしたって正当防衛じゃないかと思うし……。

だが……とはいえ、魔王が冒険者を殺したのは正当防衛なんだから許してあげて、これからは仲良くしましょうって言うのも通用しないんだろうな……。

ん？　しかし今までは冒険者から逃げ回っていたと言ってたよな？

「どうして、この村には長い間滞在しているんだ？」

「ここは時おり俺を殺しに来る冒険者とかいう奴らを迎え撃つのにちょうどいいんだ」

「どんな風に？」

だが俺の言葉に魔王は口を噤んだ。

「どうしたんだ？」

「お前は冒険者なんだろうが？」

そうか冒険者の俺にそれを説明すると、俺の口からそれが漏れて自分が不利になるかとも思ってるのか……。

「いやいや、俺はそれを人に話したりしないよ」

だが魔王は目を細めて俺を睨むのみで答えようとはしない。まあ俺も話の流れで聞いてみた程度の気持ちだし、無理に聞くことも無いだろう。

「それでこれからどうする？」

「どうするとは、どういう意味だ？」

「俺は、まおうを連れて他の魔王に会いに行ってみようかと思っている。もしかしたらまおうの仲間かも知れないしな」

「なるほどな。だが俺は遠慮しておく」

「どうして？」

「一緒に行こうよ！」

まおうも言ったが、魔王は首を振った。

「動くのにはもう疲れた……。ここに居れば食うには困らん。俺はここに留まる事にする」

「疲れたって……。こっちの世界に来てどれくらいになるんだ？」

「この世界の時間で言えば……。7、8年と言ったところだろうな……。ここに来てからはまだ1年も経っていない。やっと見つけた居心地のいい場所なんだ」

じゃあ、ここに来るまで6、7年も、ずっと1人で逃げ回っていたのか。それじゃここを動きたく無い気持ちも分からないでもないが……。

だがいくらここが居心地が良いからってずっと居たらさすがにどんどん冒険者が来て危険だし、それに冒険者の方だって命を落すんだし……。

「いや、いくら居心地が良くても不要に戦う事も無いだろ。やっぱり俺達と一緒に行こう！」

「だからいいって言ってんだろ！」

「でも、ここに居れば村人達に迷惑も掛かるし、食べるものなら俺が何とかするから」

前回の報酬もあるし、魔王をここから連れて行けば今回の報酬も入る。まおうと魔王を連れていてもしばらくは食費に困らないはずだ。

だが俺の提案に魔王が吼えた。

「迷惑が掛かるだ！ 俺の知った事か！ 突然こんなところに1人放り出されて、清く正しくなんて生きていけるものか！ 俺は俺の生きる為に必要な事をやっているだけだろ！ なにが悪いって言うんだ！」

「……魔王」

「結局お前も、俺を追い立てた冒険者と一緒だ！ 俺をここから追い出しに来たか！」

その咆哮に、魔王の巨体がさらに大きく感じられた。

「いっいや、違うんだ……」

俺は弁解しようとしたが、それは諦めざるを得なかった。魔王の目は怒りに燃え、とても話が通じる様には思えなかったのだ。

第15話

魔王は俺に顔を向けると、大きく口を開けた。

俺の背筋に冷たいものが走る。

俺が急いで横っ飛びに身を投げ出すと、一瞬前まで俺が居た場所に、魔王の口から吐き出された炎が通り過ぎる。

やっぱり、口から炎を吐いたか。本気で俺を殺す気か……。

「ちよっちよっと待て！　俺はお前とやる気は無い！」

「俺の居場所を奪う奴はみんな敵なんだよ！」

魔王はそう言うともたもや炎を吐く。だがそれは俺に向かってではなく、炎は部屋の入り口へと伸びた。

そして……。

「入り口が！」

まおうが叫んだ通り、魔王の炎で部屋の入り口が崩れ去り部屋から出れなくなってしまったのだ。

そうか！　これが冒険者を迎え撃ちやすいという理由か。

いくらこの部屋が広いといっても戦うには狭い。特に魔王が苦手な魔法使いにとっては敵と間合いが取れない。

魔法使いの弱点は詠唱に時間がかかる事だ。この狭さなら魔法使いの詠唱が終る前に魔王が攻撃できる。

勿論一流の魔法使いともなれば身も軽く、敵から逃げながら詠唱を行なって魔法を放つ者も居るが、その身軽さもこの部屋の狭さでは十分に発揮できないだろう。

そして魔王は一発や二発の魔法ではやられないが、人間の方はそうは行かない。魔王の炎か手足の攻撃が一撃でも当たれば重症を負ってそれで終わりだ。

あまりにも魔王が有利な戦場に俺達は閉じ込められてしまったのだ。

だが、こちらにもまおうが居る。まおうは魔王にそう引けをとらない筈だ！ 俺はまおうへ視線を送った。

「びえーん。びえーん。怖いよー！」

よし！ 俺1人で何とかがんばろう！

魔王は動きが鈍いみたいだから何とか近づけるかも知れない。後は俺のソードキルが魔王に効くかどうか……。後

しかし、まおうにはほとんど効かなかったしな……。

またもや魔王の口から炎が放たれた。俺はそれを間一髪かわして、魔王の懷に飛び込むべく隙を探す。

だが魔王の口から吐かれる炎は途切れる事無く、身をかかわした俺を追いかける。

ちっ！ 出し続けられるのかよ。

魔王は部屋の中心に立って回転しながら炎を出し続ける。当然部屋の内周ぎりぎりを走っている俺よりは回転が速い。

炎に追いつかれそうになった俺は、とっさに炎の下をくぐる様に地面に身を投げ出した。炎は俺の頭上を通り過ぎ、髪の毛を数本ぢりぢりと焼く。

だが地面に横たわる俺に瞬時に次の動きは出来ない。それに比べ魔王はちよつと首を捻るだけで炎の向きを変えられるのだ。

魔王の炎が向きを変え、俺に近づく。

殺られる！ だが俺がそう思った瞬間、魔王の炎が掻き消えた。

「まおう！」

まおうの手から出された火炎は、魔王の口から吐かれる炎をその口元まで押し返したのだ。

だが、まおうが手から放つ火炎は単発だ。一時は魔王の炎をかき消したが、すぐにまた魔王の炎が俺を襲う。

しかし俺がやばくなるとまおうの火炎がまた俺を救う。

「同じ異世界に連れられてきた者同士、お前は助けてやろうと思っていたが、そいつを助けると言うならお前も殺すぞ！」

「サイエスは殺させない！」

まおう……。

「では、お前も死ね！」

魔王の炎がまおうを襲う。しかし、まおうの動きは早く、魔王が部屋を中心に回転しながら炎を吐き続けてもそれよりも早い。

しかし優しいまおうに、やっぱり攻撃は出来ないか……。

まおうがそのスピードを活かして魔王の後ろに回りこんで攻撃すれば勝てそうではあるんだが、さすがにそこまでまおうにやらせられない。

これはもう殺し合いだ……。どんなに見た目がゴツクても中身は子供でしかないまおうにやらせる訳には行かない。

しかし、とはいえどうやったらあの魔王を倒せるって言うんだ。ソードキルでも致命傷を与えられないかも知れない。

今はまおうも逃げ回っているが、永遠にかわせ続けられるものでもないだろう。ちょっとした気の緩みが命取りになる。

そして俺も一撃で魔王を倒さなくては殺られる……。剣が届く距離まで近づいて仕留め損なえば、あの魔王の口から吐かれる炎か魔王の手足の攻撃を避ける事は出来ないだろう。

もっとも、そもそもその一撃を与える距離まで近づくのが難しいんだが。

だが、悠長に考え込んでいた俺に、魔王が振り向く。そして口を大きく広げた。

ちっ！ まおうを倒すのは難しいから、先にこっちを片付けに来たか。

俺は間一髪で魔王の炎をかわすと炎を岩肌につつき明かりとして点けられていた松明の一つを吹き飛ばした。そして地面に落ちた衝撃でその松明が消える。

地面に落ちたくらいで消える松明って言うのも、もう切れ掛かっていたのか出来が悪かったんだかって感じだが、それはともかく部屋の四分の一ほどが薄暗くなる。

俺は炎から全力で逃げながらその光景を視界にとらえ、ある作戦を思いついた。

そして全力で逃げながらまおうの元に走りよる。

「まおう！ すまん、ちょっと背負ってくれ！」

「え？ あ う、うん」

俺はとまどっているまおうに構わず、その背に駆け上がった。

俺を背負ったまおうはさすがにスピードが落ち、魔王が吐き出す炎に追いつかれそうになったが、そのたびにまおうも手から火炎を放って魔王の炎をはじいて切り抜ける。

そして俺は、その間にまおうの背からまおうに作戦を耳打ちした。

「うん。分かった」

まおうは俺の作戦通り、岩肌すれすれのところを走って魔王の炎をかわす。俺はまおうの背から手を伸ばし、岩肌に取り付けられていた松明をとって次々と消していった。

そしてすべての松明の火が消えるとあたりは闇に包まれた。

「馬鹿め！ だからどうしたと言うのだ！」

魔王はそう言うと、また口から火炎を吐き出す。

その方向は俺達からは外れていて明後日の方向だったのだが……、魔王は構わず口から吐き出す炎を明かりに俺達を探し当てる。

まおうは俺達に向かってくる炎を手から放つ火炎で迎え撃つ。

まおうの火炎により口元まで押し戻された魔王の炎は、いったん吐き出されるのを中断されるが、まおうはその炎が消えきらない内に、魔王との距離を詰めた。

炎がかき消される前の一瞬の間にその明かりの元、魔王の目の前まで近づいたまおうに、魔王は尽かさず大きな鉤爪のついた手で攻撃するが、まおうは左に飛んでかわし、また距離を置いた。

そして辺りは完全な闇に支配される。

まおうの背から飛び降りていた俺は、荒くなりそうな呼吸を必至

で整え、蚊の呼吸の様に静かに息を吐いて吸う。自分の心臓の音がやけに大きく聞こえ、太鼓を打ち鳴らすかの様に辺りに鳴り響く感覚を覚えた俺は、背に大量の汗を流した。

まおうまだか……。

実際は俺が感じている10分の1も時間は経っていないのだろうが、俺には苛立つほど長く感じられた。

「こっちだ！」

まおうの声が響いた。その声に反応して動く魔王の音と気配を感じる。

俺はその音と共に立ち上がった。俺が立ち上がる音を紛らわせる為に。

暗闇の中微かな明かりが灯された。

魔王が炎を出そうとしているのだ。

その明かりに口を大きく開ける魔王の姿と……そして魔王の目前に立つ俺の姿が浮かび上がる。俺は尽かさずソードキルを繰り返した。魔王の大きく開かれた口目掛けて。

「ぐがっ！」

俺のソードキルは魔王の口の中から後頭部を貫く。

魔王は口に炎を溜め、ソードキルを咥えたままのた打ち回った。

「がはっ！ が……」

しかしソードキルが刺さったままのたうち回った為、傷口が広が

る。魔王はソードキルを引き抜くと投げ捨てたが、その代わりソードキルが抜けた傷口から大量の血が流れ出す。

魔王は遂に力尽きたのか仰向けに倒れたが、まだ微かに残る息と共に、その口からは頼りなさげに炎が吐き出されていた。

「な……ぜだ。なぜ、いきなり訳の分らないところに連れて来られ……こんな所で……1人で死なねば……ならん」

魔王……。

まおうも恐る恐る近づいてきて跪くと、心配そうに魔王を覗き込んだ。

だがまおうは開きかけた口を噤む。

俺達ふたりが魔王を殺したのだ、かける言葉など無い。

魔王にもまおうが来た事が分かったのか、また魔王は口を開いた。大量の血と共に。

「お……まえは、どうして……、この世界の奴なんかを助ける……」

「サイエスは、僕の友達なんだ……」

「友達か……、い……いな……」

魔王の口から漏れていた炎が消え、辺りは闇に包まれた。

そしてまおうの絶叫が四方の岩肌を叩いた。

「うわー！ 僕が、僕が殺したんだ！」

俺は暗闇の中光が消える直前のまおうが立っていた位置の記憶を頼りに、まおうに近づきその頭を抱きしめた。

「違う。お前は、殺したんじゃない！」

「だって、サイエスがやったのかも知れないけど、僕も手伝ったんだ！　僕が！」

俺はさらに強くまおうを抱きしめた。

「ありがとう」

「え？」

「お前が手伝ってくれなかったら俺は死んでいた……。お前のやった事は殺したんじゃない。俺の命を助けてくれたんだ」

詭弁なのかもしれない。だが実際、俺の命が危なくなかったのなら、まおうは魔王と戦おうとはしなかったはずだ。

「でも、だって……」

「ありがとう。お前のおかげで俺は生きているんだ」

俺はまおうを抱きしめたまま、まおうが泣き止むまで、ありがとうと言いつけた。

「あの凶悪な魔王を退治するとは、さすがですな」

ジェイラス氏は、俺達があてがわれた家にやってきて、リビングに直面して座ると、にこやかに俺達に礼を言い俺の手を強く握った。ジェイラス氏の言葉にぴくりと反応したまおうを俺は視線で我慢する様に抑えた。

とはいえ俺の

「いえ、仕事ですから」

という言葉も、無愛想だったのは自覚している。

村の家畜を襲い何人者冒険者を返り討ちにした魔王は、確かに「凶悪」だったのだろうが、俺とまおうは、素直に領けなかったのだ。

「これが約束の報酬です。お確かめ下さい」

俺は黙ってジェイラス氏が差し出した金貨の入った皮袋を受取ると、まおうからの「貰うの？」という避難の色を湛えた視線を感じながら、350Gから20%源泉徴収された280Gがちゃんとあるのかを確認する。

実際まおうの食事には金が掛かる。金を貰わない訳には行かないのだ。良い悪いじゃなくて、そうやって人は生きて行くしかない。だがそれを今、まおうに言う心算はなかった。

ちゃんと280Gある事を確認し、受け取りにサインをする。これですべて終了だ。

俺からサインされた受け取りを渡されたジェイラス氏は、さらに

にこやかな笑みを浮かべた。

「サイエス様と魔王様には、村人みんなが感謝しております。この後盛大な宴を用意致しておりますので、是非ご参加下さい」

だが俺は首を振った。

「いえ、先を急ぎますのでこれで失礼致します」

俺の素っ気無い言葉に、ジェイラス氏は無然とした表情を作った。まさか断られるとは思っても居なかったのだろう。

「あ。いえ、しかし、せつかくですので……」

俺は、なおも食い下がるジェイラス氏に視線すら合わせず立ち上がった。

実際、ジェイラス氏や村人達に落ち度があるわけじゃなく、彼らは彼らでやるべき事をやっているだけなのだが、俺自身が魔王を倒した事に喜べていないのだから仕方が無い。

「とにかく結構ですので。まおう行くぞ」

俺がジェイラス氏への返答もおざなりに、まおうに声をかけるとまおうも

「うん」

と、勢いよく立ち上がった。

そして俺達は、呆気にとられるジェイラス氏を残し、あてがわれた家を後にしたのだった。

家の外も、村人達が喜び沸いて村中に飾り付けを行なっている。魔王が居なくなった祝いの祭りでもするんだろうか？

そして俺達の姿に気付いた村人達が口々に声をかけてくる。

「ありがとうございます！」

「これで村も平和になります」

「サイエス様万歳！」

俺はその村人達に適当に頷きながら先を急いだ。せっかくの声援に手を振って応じる訳でもない俺の態度に村人達も興をそがれたらしく、憮然と見送っている。

誰が悪い訳でもない。

村人にしてみれば自分達の生活を脅かす魔王が退治され、それを喜んで何が悪いのか？ 当然じゃないか。と言ったところだろう。確かにその通りだ間違っちゃいない。

でも俺とまおうは、素直に喜ぶ彼らを直視出来なかった。

俺とまおうはそのまま村を出た。そして村を振り返ることもせずさらに先に進む。

不意にまおうが口を開いた。

「次の魔王とは仲良くなれると良いね」

「ああ。そうだな」

俺は、まおうの大きな手をそっと握る。そして次の魔王に会いに行く為、まおうと共に歩き続けた。

第15話（後書き）

次はまた推理話です。

第16話

俺とまおうはある屋敷に居た。

そして豪華な晩餐に招待され、料理に舌鼓を打つ。

「おいしいねー」

特別に用意された大きい椅子に座り、無邪気に肉の塊をほおばるまおうに俺も頷いて目の前に出された料理を次々と口に運ぶ。

「魔王と言え、ごほっ、恐ろしい者かと思うておったが、なかなか素直ではないか」

と、咳き込みながら話すのはこの屋敷の主人のオドレイ氏。かなりの老齢で頭髪も元々の髪色と思われる黒よりも、白いものが多くなっている。しかも咳き込んでいる事からも体調も良くないらしい。寝てなくて良いのか？　と言う感じだ。

「魔王と言えども凶暴な者ばかりではありませんまい」

オドレイ氏にそう答えたのは執事のベイツ氏だ。歳は若く俺よりも4、5歳ほど上なだけにみえるがオドレイ氏からの信頼はあついらしく、俺達をこの屋敷に入れてくれたのもこのベイツ氏だ。

なぜ俺達がこの屋敷にいて飯まで食べているかというと、話は数時間前にさかのぼる。

魔王が居るといふ村へ向かい山道を急いでいた俺達を突然の大雨が襲った。

そして、山中で見つけた洞窟に難を逃れ、やれやれと思っていた

のもつかの間、雨脚はますます強くなる。

「すごい雨だねー。大丈夫かな？」

不安がるまおうに、

「この洞窟は頑丈そうだし崩れたりはしないだろうとなだめる。」

しかし俺の考えは甘かったらしく、雨はさらに強くなりまさにバケツをひっくり返したかの様。洞窟は確かに崩れなかったが、足元から浸水して来たのだ。

やむを得ず洞窟を後にし、叩きつける様な雨の中俺達は彷徨った。

そして夜になっても大雨をしのげる場所を見つけられず、俺もまおうもへとへとになったころ、大雨の中かすかな明かりを見つけたのだ。

明かりが見えるという事は、建物が、少なくとも雨に濡れない場所があるという事だ。

「よし！ あそこへ向かうぞ！」

「うん！」

こうして明かりを頼りに進む俺達の前にこの屋敷が現れ、屋敷の門を叩いたのだが、中から出てきた使用人はまおうの姿をみて悲鳴を上げた。

まあ仕方がないが何とかして屋敷に入れて貰わなくてはならない。

「いえ、まおうは全然危険じゃないですから！」

「僕は怖くないよ！」

だが使用人はなかなか信用してくれない。

もつとも魔王を連れている奴なんて、以前なら俺だってとても家に入れなかっただろうしな……。諦めるしかないか。

俺が悲嘆にくなっていると、その現れたのがベイツ氏だった。

「この方達が屋敷を襲う心算ならば、わざわざ我々に断らずとも力ずくで押し入っているでしょう。信用して大丈夫と思います」

ベイツ氏はそう言って俺達を屋敷に入れてくれたのだ。

「ベイツさんって良い人だねー」

「そうだな」

俺達は案内された部屋で喋りながら雨に濡れた身体をふいているとドアがノックされた。

扉を開けると果たして話題になっていたベイツ氏が立っていた。

「実は本日お招きしていたお客様が、この大雨で来れなくなったのです。代わりと言ってはなんですが、よろしければ我々と一緒に晚餐を如何でしょうか？」

疲労の局地で腹も減っていた俺達は飛びつく様に頷き、こうしてこの屋敷の住人達と晚餐を楽しむ事になったのだった。

「冒険者のサイエスです」と俺が名乗るとまおうも

「僕は……」と口を開きかけたので、

「こっちはまおうです」とまおうを紹介した。

まおうは非難めいた目で俺を見たが、ぴろろろ、なんて名前を名乗ってもしようがないだろう。

晚餐にはこの屋敷の主人のオドレイ氏、その奥さんのクレア夫人、長男のマティアス氏、長女のエレーナ嬢。そしてベイツ氏が同席した。

オドレイ氏とクレア夫人はかなり歳が離れているみたいだ。もしかして30歳くらい離れているんじゃないか？

夫人は黒髪を綺麗に結び上げ、瞳も黒くなかなかの美人だ。

長男のマティアス氏とエレーナ嬢とは、それぞれ20歳前くらいと10歳過ぎくらいだろうか。

2人は両親とは違い金髪碧眼だったが、顔の作りは夫人に似ていてなかなかの美男美女だ。

エレーナ嬢がもう5つ歳が上だったら良かったのに、とちょっと残念に思った。

しかもさらに残念な事に、まおうを怖がったりしないベイツ氏と比べ、夫人と2人の子供はあからさまにまおうを怖がったのだ。

彼らはまおうの一举一動にびくびくとし、黙々と料理を口に運んでいる。とても談笑しながら楽しい晚餐といえる状況じゃなかった。

はじめて会った人にまおうが怖がられるのは仕方が無いとは思う

けど、怖がらないベイツ氏と比較するとやっぱり悪い印象を持つてしまうのは仕方がない。

もつとも俺とまおうにとってはいつもの事だ。最近ではまおうもなれたもので気にせず食事を続けていた。

だがこの状況になんとオドレイ氏が怒声を発した。

「お前達！ お客人に失礼とは思わんのか！」

だが尽かさずベイツ氏がなだめる。

「旦那様。奥様達も悪気がある訳では御座いますまい。もちろんお客人に対して失礼と言え失礼なのですが……」

「うむ。お前達、お客人に謝罪しなさい」

だがオドレイ氏の言葉を夫人は拒絶した。

「どうしてあなたはベイツのいう事ばかりを鵜呑みにするのですか！」

そして夫人の言葉を皮切りに、オドレイ氏と夫人が言い争いを始めたのだ。

まおうは自分の事で家族が争っている事におろおろとうろたえている。

だが争いの発端はまおうでも、問題は夫人に言わせると、オドレイ氏が家族をないがしろにして、ベイツ氏のいう事ばかり信用する

のが問題らしい。

しかしオドレイ氏にしてみれば、ベイツ氏はもったもな事を言っているだけで、それに反発する夫人達がおかしいのだ。という事だった。

だが言い争いは平行線を遂には夫人が、

「もう結構です！」と席を立ち子供達にも

「あなた達も来なさい！」と言って夫人は部屋へと歩き始めた。

長男のマティアス氏は慚然とした表情で、長女のエレナ嬢はこちらをちらちらと見ながら夫人の後に続く。

事態に啞然とする俺達にオドレイ氏がまたごほごほと咳き込みながら口を開く。

「お客人には申し訳ない事をした。まったくあの者達はわしのいう事をちつとも聞きやせん」

「ですが奥様も悪気があった訳では……」

だが尽かさずフォローに入ったベイツ氏をオドレイ氏が制した。

「いや、お前があやつらを庇ってくれるのは嬉しいが、わしが後を託せるのはお前だけじゃ」

「旦那様。もったいないお言葉ありがとうございます」

後を託す？　ちょっと気になった俺は他人の家庭の事情とは思いますが口を挟んだ。

「後を託すとはどういう事です？」

「うむ。わしは大規模な農園を持っておつての。その運営をこのベイツに任せようと思つておるんじゃ」

「農園を？」

「お客人も察しておろうが、わしはもう長くは無い」

「うん」

おい、まおう……。いくらなんでも素直過ぎるだろ。だがオドレイ氏は怒るどころか、まおうを気に入った様で、愉快そうに笑った。

「あっはっは！ 本当に素直なお方じゃ、魔王はみんなこの様なお方なのか？」

「いえ。そう言う訳では……」

俺はどう言つて良いのか分からず口ごもったが、オドレイ氏はまた笑った。

「はっはっは まあ良い。そして先の長くないわしは、ベイツに全財産を残す様に遺言書を残す事にしたんじゃよ」

「全財産をですか？ それでは奥さんやお子さん達はどうするんです？」

「かまわん。かまわん。あやつらには良い葉じゃ」
オドレイ氏はそう言うと共に笑う。

いやいや、良い葉どころじゃないと思うんだが……。俺は立ち入った事とは思いつつも聞いてみた。

「しかしベイツさんを信頼しているのは良いとして、ご家族に財産を残さないって何かあったんですか？」

「ふん！ あやつめ財産が目当てでわしと一緒にになったんじゃ。最近になってやっとそれが分かったわ！」

おいおい、それは穏やかな話じゃないな……。だがこれ以上はさすがに赤の他人がしつこく聞くことじゃないか。

その後晚餐はしらけた雰囲気が進み、みなは黙々と料理を口に運んだ。

第17話

重苦しい雰囲気の中食事を続けていたが、場の空気を換える様にベイツ氏が提案をした。

「旦那様。サイエス様は冒険者と言う事ですから、色々とお話を伺ってみてはどうでしょうか？ 面白い話を聞かせて頂けるかも知れませんよ」

「おお。それは良い考えじゃが、お客人はどうですかな？」

「僕はもちろん構いません。僕の話で良ければ喜んで」

大雨の中部屋を提供して晚餐までご馳走になったのだ。それくらいはなんでもない。

こうして俺は晚餐の後一休みしたら俺とまおうとそしてベイツ氏との3人で、オドレイ氏の寝室を訪ねる事になった。

晚餐の場で話すことにならなかったのは、高齢のオドレイ氏はどう横になった方が良いと、ベイツ氏が提案した為だ。

確かにオドレイ氏は時折ごほごほと咳き込んでいるし、無理をしない方が良いだろう。

晚餐が終わると使用人達はすぐに屋敷から出され離れに移動する。オドレイ氏は用心深く寝る時は屋敷に使用人を居させないらしい。裏口から使用人がすべて出た後は、ベイツ氏が中から鍵をかける。

だが使用人達の朝は早い。となるとそれまでにまた裏口の鍵を開けて使用人を屋敷に入れなければならぬベイツ氏は、さらに早く

起きなくてはならない事になる。毎日大変な事だ。

一旦オドレイ氏を部屋まで送ってから使用人を屋敷から出して鍵をかけるという事だったが、オドレイ氏は自室のある2階へと上る階段の前で、

「わしの事は良いからお客人を部屋へ案内しなさい」

と言ってくれて、オドレイ氏は手すりにつかまりながらも一人で階段を上がっていった。

ベイツ氏は俺達の先に立って部屋へと向かう。食事の前に通された部屋とは別の寝室を用意してくれているらしい。だがベイツ氏はその途中口を開いた。

「すみません。先に使用人達を屋敷から出しても良いでしょうか？」

俺には勝手が分からないし、泊めてもらっている身だ

「いいですよ」と答えた。

屋敷の裏口まで来るとベイツ氏がここで待っていて欲しいと言い、俺達を残して厨房へと姿を消した。

晚餐の片付けで使用人達は厨房に集まっているらしい。

まだ終わっていないやり残しの仕事は明日に回すとの事。

仕事を翌日に残すなんて面倒だと思うが、自分が寝る時は使用人は屋敷に残さないというオドレイ氏の方針からすれば仕方がない。

ここから厨房まではかなり離れているらしく、俺達は結構待たされたがしばらくするとベイツ氏が10人ほどの使用人を引き連れてやってきた。

「お待たせいたしました」

ベイツ氏はそう言って使用人達を裏口から外にだし、そして上着のポケットを探ったのだが……。ベイツ氏は目を瞑り大きくため息を付いた。

「申し訳御座いません。どうやら裏口の鍵を忘れてしまいました」

万事抜かりのなさそうなベイツ氏にしては意外なへまをするものだ。つと言っても会ったばかりなのだが。

「いえ。構いませんよ。それで鍵はどこにあるんですか？」

「それが……。厨房にありまして。急いで取ってきますのでサイエス様達はここで待っていて頂けますか？」

「ええ。勿論良いですよ」

「では、お願いします。すぐに戻ります」

ベイツ氏はそう言うのと厨房へ向かって走り出したのだが……。やつぱり厨房は遠いらしく俺達はしばらく待たされた。

「大変お待たせいたしました」

帰ってきたベイツ氏は急いで裏口に鍵をかけ、その後俺達を来客用の寝室まで案内してくれた。

俺達の寝室は、裏口から少し引き返して角を曲がったところにあった。

ベイツ氏は俺達を部屋に案内すると、
「少しお話をしてよろしいでしょうか？」
と切り出した。

特に不都合は無いので俺も

「はい」
と頷く。

「話とは御主人様と奥様の事なのです。以前はとても仲の良い御夫婦だったのですが、最近急に……サイエス様には御不快でしたでしょう。大変申し訳ございません」

「いえ、ベイツさんの所為と言う訳では……。しかしどうして急に御夫婦仲が悪くなったんです？」

ベイツ氏は少し言いよどんだが、決心した様に口を開く。

「サイエス様は、使用人の中に金髪碧眼の男が居たのに気付きましたでしょうか？」

うーん。そう言えば居たような……。

「そして旦那様と奥様は黒髪に黒い瞳です。ですがマティアス様とエレーナ様は……」

なるほど……。オドレイ氏は、夫人とその使用人との密会を疑っているという訳か。それならばあれだけ仲が悪いのも頷ける。

実際夫人が使用人と不倫をしているかは兎も角、オドレイ氏はそう信じているんだからな。

「でも、どうして僕にわざわざこんな話を？」

かなりプライベートな話だ。まったくの赤の他人の冒険者に聞かせる話ではないと思うのだが。

「いえ。ですから旦那様と奥様との諍いで、サイエス様が御不快に感じたのかと思ひまして、その理由を話させて頂いたのです」

「なるほど」

俺が頷くと、ベイツ氏は安心したのか口元をほころばせた。そして思い出した様に言った。

「そう言えば旦那様の農園で採れる果実から作った飲み物があるのです。お持ちいたしましょう」

「そんな物があるんですか？」

「ええ。皆さんに喜んで頂いております。少しお待ち下さい。急いで持ってまいります」

ベイツ氏はそう言い残して部屋を出た。

だがベイツ氏はなかなか帰ってこない。

そうか……飲み物を取りに行ったという事は、また厨房まで行っているのか。あの厨房遠いからな……。

だがベイツ氏は思ったより意外と早く帰ってきた。走ってきたのか肩で息をしている。

「急いでくれたみたいで申し訳ありません」

「いえいえ、お客様を待たせる訳にはまいりませんから」

ベイツ氏はそう言いながらグラスに入った透明な飲み物を差し出してくれた。

果実の飲み物と言う事でオレンジやブドウの飲み物を思い浮かべていたので色が透明と言うのは少し意外だった。

一口飲むと確かに美味しい。しかも氷が入っていてすごく冷えている。

「すごく美味しいですね。でも氷なんてどうやって用意したんです？」

するとベイツ氏は得意げに破顔した。

「御主人様はお客様の為、人を使って高い山の頂にある万年氷を運ばせて屋敷の厨房に蓄えておいでなのです」

なるほど。さすが大金持ちと言ったところか。

俺とまおうはベイツ氏が持ってきてくれた飲み物で喉を湿らせた後、3人でオドレイ氏の部屋へと向かった。

廊下を歩いた後屋敷の階段を上り、オドレイ氏の寝室の前まで進む。そしてベイツ氏が軽く扉を叩く。

「旦那様。サイエス様と魔王様をお連れいたしました」

しかし寝室からは返事が無い。ベイツ氏がさっきより少し強く扉を叩いた。

「旦那様？　いらっしゃいますか？」

やはり返事は無かった。俺は小声でベイツ氏に話しかけた。

「もう寝てるんじゃないですか？　我々は引き返した方がいいんじゃない……」

だがベイツ氏は首を振った。

「せっかくサイエス様と魔王様にお越し頂いたのに無駄足を踏ませたとあっては旦那様も申し訳なくお思になるでしょう」

うーん。まあそういうものかな？　だがオドレイ氏の事をよく知るベイツ氏という事だ。そうなんだろう。

ベイツ氏は俺から特に反論が無いのを確かめると、扉をゆつくりと開けた。寝室は明かりが点いたままだ。オドレイ氏はやっぱり待ちくたびれて寝てしまったのか。

ベイツ氏は音を立てない様に寝室に入り、そして叫び声をあげた。

「サツサイエス様！　旦那様が！」

ベイツ氏の叫びに俺は急いで駆け寄る。そして息を飲んだ。

そこには背中からナイフで一突きにされ、血を流し床に倒れるオドレイ氏の姿があった。

第18話

すでに深夜となり雨はますます強くなっている。とてもではないが町まで行って役人を連れてこれる状態じゃない。

雨足が弱まってから役人を呼ぶ事を考えてオドレイ氏の遺体と寝室はそのままの状態にしてある。

真夜中ではあるが、では明日の朝にしようとのん気に言える問題ではないので、俺達はリビングへと集まっていた。

オドレイ氏の家族全員。クレア夫人と長男のマティアス氏、それに長女のエレーナ嬢だ。

そしてベイツ氏と俺にまおう。

俺達は大きなテーブルを囲んで座った。俺とまおうがベイツ氏の隣に座り、向かいにはクレア夫人を挟むように右にマティアス氏、左にエレーナ嬢だ。

オドレイ氏がなくなったにも拘らず、クレア夫人と息子のマティアス氏は悲しげな様子も見せずに不機嫌そうに黙り込んでいる。

だが娘のエレーナ嬢はハンカチで何度も涙を拭って父の死を悲しんでいる様だ。

「旦那様を殺害した犯人は、この屋敷の中に居た者と思われます」

するとクレア夫人が目を細めた。

「まさか私達が夫を殺したと思っているのではないでしょうね？
屋敷の中に犯人が居るのならそれは貴方達でしょう」

「いえ、私達ではありません。昨日たまたまこの屋敷にいらしたサイエス様に旦那様を殺害する理由ありませんし、そして私にも旦那様を害する理由が無いのは、奥様もご存知でしょう」

ベイツ氏はそう言うのと微かに口元を歪ませた。笑いの形に。

そのベイツ氏の表情にクレア夫人はさらに目を細めて睨みつける。

火が灯されている暖炉の薪が、乾いた破裂音を部屋に響かせた。

ベイツ氏は上着の内ポケットからおもむろに封筒を取り出し、さらに封筒から一枚の書面をだしてテーブルの上に広げた。

「ごらんの通りです。これがあるのにどうして私が旦那様を殺害しなければならぬのです？」

その書面には「遺言書」と書かれ、内容はまあベイツ氏に全財産を譲るというものだ。ちゃんとオドレイ氏のサインもされている。

「まさかほんの少しはやく財産が欲しいという理由で私が旦那様を殺した。とは思っていないですよね？」

夫人はわなわなと震え唇を噛んだ。

そりゃいくら有能な部下とはいえ家族を差し置いて赤の他人に全財産が相続されるとなれば穏やかじゃないよな……。

しかしベイツ氏もわざわざこの場で見せなくても良いのに。

そこに突然、思いもよらない事が起こった。

「あー！」っと、みんなが言うのが早いか、息子のマティアス氏が

遺言書を掴むと走り出した。暖炉に向かって。

「まおう止めろ！」

我に返った俺はまおうへ叫ぶ。

しかしこの事態にあっけに取られているまおうは

「え!？」

と戸惑った。

「いいから止めるんだ！」

「分かった！」

とはいえ、いくら動きの早いまおうでも初動のもたつきは取り戻せず、マティアス氏を捕まえるより早く遺言書は暖炉へと投げ込まれてしまった。

遺言書は瞬く間に燃え灰になる。

俺もベイツ氏もあまりの事に呆然とした。

「おっほほほ！ これで貴方が夫の財産を相続するという証拠は無くなったのね」

夫人は高らかに笑い声を上げた。

ベイツ氏の顔が屈辱に歪む。そして俺へと向き直った。

「サイエス様。どうか証言して下さい。財産を譲るという遺言書があったと」

だが夫人はさらに笑い、楽しげな声を発する。

「そんなどこの馬の骨とも分からない冒険者が証言したところでどうとなるものではないでしょう」

そして隣に戻って来たマティアス氏の頭を良くやったといわんばかりに撫で、また大声で笑った。

くそ！ どこの馬の骨だって？ 今に見てろ！ 役人には絶対に
お前らが犯人だと証言してやる！

と俺は憤慨したが、ベイツ氏の怒りは凄まじく、今までの理性的な人物と同じ人間とは思えないほどの形相で席を立った。

「雨がやんで役人を呼んで来るまで屋敷から出ぬように！」

そう言い放つとクレア夫人達から背を向けた。俺達もベイツ氏の後続く。

ベイツ氏はリビングから出ると自制心を取り戻したらしく、いくぶん落ち着いていた様に俺達に目を向けた。

「もう遅いですし今日はもう休みましょう。ですが先ほどの様に彼らは何をするか分かりません。お気をつけ下さい」

確かにさっきのマティアス氏の様子ならばありえるな。だが……。

「まおうが居るから大丈夫ですよ」

俺の言葉に今まで張りつめていた気持ちが緩んだのかベイツ氏の顔に笑みが浮かんだ。

「確かに貴方達に何かしようとする者はそうは居ないでしょうな」

「ええ。それよりもベイツさんの方こそ大丈夫なのですか？」

「ご心配ありがとうございます。ですが用心しますので大丈夫です」

まあベイツ氏はこの屋敷の事にも詳しいだろうから大丈夫か。

俺達とベイツ氏は挨拶を済ませるとお互いの部屋へと足を向けた。

部屋に戻った俺達はくたくたに疲れていた。

何せ大雨に打たれてこの屋敷に着いてからずっと横になっていないのだ。

「やれやれ、まったくんでもない事に巻き込まれたな」

「あのおじいさんが死んじゃうなんて……」

まおうは意気消沈してうな垂れている。

俺はかける言葉もなく「ああ」と答えることしか出来ない。

喉が渴いたのでベイツ氏が持って来てくれた飲み物がまだグラスに半分ほど残っていたのでそれを一口含んだ。

すっかり温くなっていたがやっぱり美味しい。残りを一気に飲み干した。

そしてまおうに声をかける。

「とにかく今日はもう寝よう」

「うん」

こうして長い夜はやっと終わった。外にはまだ大雨が降り続いていた。

第19話

俺達が目を覚ますと日はとくに昇り昼前になっていた。
とは言っても晴れ渡っている訳ではなく相変わらずの大雨なのだ
が。

部屋の扉の隙間から屋敷の様子を伺うと使用人達も仕事どころで
はなく、あちこちで額を寄せ合う様に集まり小声で話し合っている。

何を話しているかまでは聞こえないが、きっと今後の事だろう。
朝起きてみると自分達の主人が亡くなっていたんだから当然か。

そのこの俺の腹が「ぐうぐう」となった。

朝飯も食わずに昼まで寝ていたしな……。

だが屋敷の使用人に食べ物を用意して欲しいと頼める雰囲気でも
ないな。

なにせ屋敷の主人が亡くなったんだから。

とはいえ勝手に厨房へ行って食べ物を取って来る訳にも行かない
だろう。

「ちょっとベイツさんの所へ行ってくる」

とまおうに言い置いて部屋を後にし、ベイツ氏の部屋へと向かう。

するとその途中、

「黙れ！ 私は騙されないぞ！」
と怒鳴り声が聞こえた。

その声がするほうへと向かうとさらに罵声が聞こえた。どうやらベイツ氏の様なのだが……。

さらに近づくともベイツ氏が金髪の男を罵っていた。多分使用人の一人だろう。

「いったいどうしたんです？」

俺も魔物を相手にする冒険者の端くれだ、罵声に臆せずベイツ氏に話しかけると、ベイツ氏は声を荒げるのを止めこちらを向く。

そして有能な執事らしく一瞬のうちに態度を切り替え落ち着いた口調で俺に言った。

「これはサイエス様。おはよう御座います」

そしてまた金髪へと顔を向け、

「いいからお前は奥様の所へでも行け」と冷たく言い放った。

男は、しぶしぶといった感じで肩を落として立ち去る。

「あの人がどうしたんですか？」

「例の奥様と関係を持っているという男ですよ。にもかかわらずこちら側につきたいと言って来たんです。ですがこちらの様子を探る為でしょう」

「こちら側って？」

俺に言葉にベイツ氏は苦笑した。

「ああ。サイエス様はご存じなかったのですね。実は今この屋敷の使用人達は私と奥様のどちらがこの屋敷の主人かという事で二派に分かれているんです」

「どちらが主人かですって？」

「ええ。本来旦那様が亡くなったのなら奥様が屋敷の主人という事になるのですが、なにぶんこの屋敷で旦那様の全財産が私に譲られる事になっているのを知らない者はありません。ならばこの屋敷の主人も私なのだろうと……」

「なるほど……」

すると使用人達がそこそと話し合っていたのも、どちらに着くかと相談していたのかな？

しかしそうになると……。俺はベイツ氏に近づくと耳元で囁いた。

「オドレイ氏の遺言書がマティアスさんに燃やされてしまった事は皆さん知っているんですか？」

「いえ、それはまだ言っていないですね。ですが使用人のみんなにも旦那様が私に全財産を残すと言っていたと証言して貰う心算です」

証言か……。

しかし裁判になったとしたら遺言書という「物」が無いのは致命的と思うが……。

俺の心配をよそにベイツ氏はあまり不安に思っていないさそうだ。遺言書が有ったけど不満に思った息子が燃やしてしまったんだ！

という主張が認められるはずと考えているという事か。

そこへまた「ぐうぐう」と俺の腹が鳴り、ベイツ氏が笑みを浮かべた。

「昼食を用意させましょう。こちらについた使用人には料理人も居ますから」

「それは良いですね。しかし使用人達はどう分かれているんです？」
するとベイツ氏は使用人達について説明してくれた。

クレア夫人側の使用人は、一番古株のギャバン、エレーナ嬢お付のレティシア、そして金髪の庭師カルドナだ。

ギャバンは夫人を慕っているというより、自分より後から来たベイツ氏がオドレイ氏に可愛がられていたのが気に入らないらしい。レティシアはエレーナ嬢と仲が良く。カルドナはさっき見た通りだ。

ベイツ氏側の使用人は、ベイツ氏よりも前から屋敷に居たがギャバンと違い不貞腐れずベイツ氏の事を認めているカウフマンとフラド、侍女のロニヤとノーラにアトニエル、そしてなんとマティアス氏お付のオードランもこちら側という。

そして俺とまおうも、現状ベイツ氏側という事なんだろう。しかし……

「マティアスさんのお付の人がどうしてこちら側なんですか？」

ベイツ氏はため息を付いた。

「マティアス様はなにぶんあの様なお方なので……」

遺言書を突然燃やしてしまう様な乱暴者では、お付の人とも上手く行ってなかったという事か……。

「しかしそれにしても夫人よりベイツさんにつく使用人の方が多いのは、こう言ってはなんですが意外ですね」

俺は率直な疑問をベイツ氏にぶつけた。多少問題があっても旦那様の奥様に従うのが普通と思ったからだ。

「実は奥様達は最近では屋敷に住んでいなかったのです」

「そうなんですか？」

「ええ。旦那様と奥様が不仲になってまもなく、奥様はここから少し離れた別宅に移っていたのです」

なるほど……。普段屋敷に居ない奥様より身近に居たベイツ氏の方に親しみを感じたというわけか。

納得して頷く俺にベイツ氏は笑いかけた。

「そんな事より、早く食堂に行きましょうみんなそこで食べています。お客様であるサイエス様には申し訳ありませんが、この様な時ですので使用人用の食堂でみんな簡単な物を食べているのです」

「いえいえ。氣遣って頂かなくても大丈夫です。僕の方こそこんな時にお世話になってしまって申し訳ありません」

「それではお互い様という事で」

ベイツ氏はそう言って笑い、その後一旦まおうを呼びに行ってから3人で食堂に向かった。

食堂は例の遠い厨房の横にあり、入り口もそう広くは無く巨体のまおうが入るのには苦勞した。

ベイツ氏についた使用人は集まっていたが、夫人についた使用人達が居ない。

「彼らはどうしたんです？」

「それが……。この様な時なので普段と同じ食事は用意できないと言うと奥様のご立腹なされまして、お子様達と自分についた使用人達を引き連れ自室へと戻ってしまったのです」

自分の夫が亡くなったというのに何をやってるんだか。

しかしこの様子だと、やっぱりオドレイ氏を殺害したのは夫人達という事なのか？

談笑しながらっていう雰囲気でもないので俺とまおうは出された食事を黙々と食べた。

正直雨さえ止めば屋敷を出て先を急ぎたかったが、雨はまだまだ止みそうに気配は無い。

食事の後はやる事も無いので部屋に戻って横になる。

完全なタダ飯食らいだが、実際この状況で俺が力になれる事などまったく無い。

だがまおうは屋敷の中を探検すると言って部屋を出て行った。
まあまおうはまだ子供だから、じっとしているのもつまらないんだろう。

「迷惑を掛けるなよ」

と部屋をでるまおうの背に声をかけ、まおうが部屋から姿を消すとまた横になった。

第20話

夕方になり起き出すと、部屋に戻っていたまおうとまた食堂で食事した。

そしてまた横になる。

食っちゃ寝ばかりでずうずうしいかな？　とは思う俺に出来ることなどないし、結局は「何もしない」のが一番迷惑にならない。

だが寝ていた俺は、ミシリという音で目を覚ました。昼間から寝てばかりいたので眠りが浅かったんだろう。

薄目を開けるとまおうが部屋から出て行こうとするところだった。

トイレか？　とも思ったがなにやらこそそと挙動不審だ。

ほっておいても良かったんだが、寝てばかりの俺は完全に目が覚めてしまっていたので、まおうの後をつける事にした。

まおうのプライバシーの事も考えたが、何せまおうはまだ子供だしここは人様の屋敷だ。何か問題を起してしまつては大変だ。

子供らしく広い屋敷を夜中に探検したくなつたのかも知れないが、それで何か壊したりしたら大変だし。

まおうは屋敷内をどんどん進み、ある場所へと入り込んだ。

厨房か……。食事が質素だったから足りなくて夜中につまみ食いに来たのか？

しかしこれは捨てては置けない。

屋敷に世話になっておきながら、そこから食べ物を盗むなんて大問題だ。

窃盗なんてギルドにばれたりしたら、仕事を回して貰えなくなる可能性すらある。

俺は食料庫からごそごそと食べ物をあさるまおうの背後に立った。厨房はみんなの寝室とは離れているし、使用人達は離れへと戻っているはずだ。俺は遠慮なく大声で怒鳴った。

「こらまおう！ 何をやってるんだ！」

「うわっ！」

俺の声にまおうは驚いて両手に抱えていた食べ物を取り落として振り向いた。

「なんだサイエスカ。どうしたの？」

「どうしたの。じゃない！ お前こそこんな夜中に何をやってるんだ」

「別に……」

「別にじゃないだろ！ 勝手に食べ物を食べるなんて泥棒だぞ！」

「違うんだよサイエス」

「何が違うって言うんだ！」

「実は……」

まおうはそう言って話し始めた。

昼食の後屋敷内を探検していたまおうは、屋敷の2階のさらに上にある屋根裏部屋へと入り込んだ。

よくまおうの巨体でそんな所に入れたなと思うが、屋根裏部屋には大きな家具なんかもしまつてある様で、入り口は大きく天井も高かったらしい。

そしてそこでまおうは泣いているエレーナ嬢を見つけた。

「どうしたの？」

まおうはなるべくやさしげに声をかけたが、エレーナ嬢は恐怖のあまり声も出ない。

まあ入り口にまおうが立っていて、逃げ道の無い場所でまおうに向かい合えば大抵の人間は身の危険を感じだろう。

「大丈夫だよ。僕は怖くないよ！」

とまおうは言い、持ち歩いてたお手玉を取り出して、得意なお手玉を披露した。

だがいくら天井が高くてもお手玉するには低い。

お手玉が天井に当たり上手く出来ずに何度も取り落とした。

だが、取り落としたお手玉を慌てて拾うまおうの姿にエレーナ嬢は笑い出し、そしてエレーナ嬢はまおうが怖い者ではないと安心したらしい。

まおうが改めてどうしたのかと聞くと、エレーナ嬢はまた表情を

曇らせ理由を話してくれた。

クレア夫人達は食事が質素だと不満を言い席を立てて部屋に戻ったものの、実際食べなければ腹が減る。

それでも夫人は耐えていたが、長男のマティアス氏が我慢できずに不満を漏らした。

「何でも良いから食べれば良かったんだ！」

だが息子の言葉に夫人は

「貴方にはプライドが無いのですか！」

と言い捨てた。

こうして母と兄が言い争い自身も空腹に耐えかねるという状況にエレナ嬢は部屋から逃げ出し、誰も来ないであろう屋根裏部屋で一人泣いていたのだという。

「じゃあ、僕が何か食べ物を持ってきてあげるね！」

まおうはそう請け負ったがみんなが起きている時は食べ物を持っていく事が出来ない。その為こんな夜中に厨房をあさる事になったのだ。

もっとも、夕食の時に夫人達が折れてみんなと食事をすれば解決したのだが、夕食時にやっぱり夫人達は食堂に現れず、我慢して食べれば良いと主張したマティアス氏にしたところで自分が頭を下げるのは嫌だったらしい。

要するにこの傲慢なお坊ちゃまは、他の人間が頭を下げて貰って来た物を我慢して食べてあげる心算だったのだ。

こうして結局夫人達は夕食も食べる事が出来なかった。

そしてまおうは食べ物を持って屋根裏部屋でエレーナ嬢と落ち合う事になっているという事だった。

そう言う事なら仕方が無いか。

万一ばれたとしても、エレーナ嬢へ食べ物を持って行っていた、という事なら泥棒扱いもされないだろう。

「よし分かった。俺も一緒に行こう」

「本当！」

「ああ」

こうして俺とまおうは屋根裏部屋へと向かった。

屋根裏部屋へと続く階段を上ると、エレーナ嬢はすでに来ている様で小さな明かりが見える。

そしてまおうが顔を出すと

「ぴろろろろ！」

と駆け寄ってきた。

ぴろろろろって名乗ったのかよ……。って言うか、素直にぴろろろろなんて呼ぶこのお嬢さんも素直な性格をしているみたいだ。

「食べ物を持ってきたよ！」

と言うまおうにエレーナ嬢は抱きついた。

10歳を過ぎたばかりの育ち盛りの子供に空腹はきつかった様で、よっぽど嬉しかったのだろう。

そしてまおうと一緒に食べ物を抱えて夫人達が待つ部屋へと戻ろうとしたのだが俺は押しとどめた。

どうして？ と首を傾げる2人に俺は説明した。

「もしまた夫人が食べるのを拒否したら、食べられなくなっちゃおうぞ？ とりあえずお嬢さんはここで食べてから行った方が良いんじゃないか？」

エレナ嬢は自分だけ食べるなんて躊躇していたが、子供が空腹に勝てるわけもなく、遠慮がちに食べ始めた。

そしてエレナ嬢が食べ終わると改めて夫人達の部屋へと向かう。

はじめはやっぱり夫人は食べ物を受け取るのを断ったが、俺が「子供に食べ物の心配なんてさせるものじゃありません」

と言うと、俯いて「そうですね……」と小さく言い、受け取った。

空腹を満たしたマティアス氏とエレナ嬢が眠りにつくと、夫人は俺に椅子を勧め少し待っている様に言って部屋を出た。

しばらく待っていると飲み物を手に戻ってくる。

差し出された物を俺が一口飲むとベイツ氏が持ってきてくれたのと同じ物だ。あの時と同じ様に氷が入っていて冷えていた。

俺に話がある様なので聞いていたが、要するにベイツ氏への愚痴だった。ベイツ氏がすべて悪くその所為でオドレイ氏とも関係が悪くなったと言うのだ。

しかも話が長い。それでも内容があれば良いのだが、話はベイツ氏が悪いという事を表現を変えて繰り返すばかり。

夫人の話が一段落ついた時には俺は疲れきっていた。昼間あんなに眠ったにもかかわらずこの後は良く眠れそうだ。

「では、もう遅いので」

と夫人の話が再開しない内にと、席を立った。

そしてすっかり氷も溶けてしまっている飲み物の残りを口を含む。氷が溶けてすっかり水っぽくなった飲み物は不味く、飲んだ事を後悔させた。

第21話

朝、目が覚めるといまだに雨は降っていた。

まったくいつまで続くんだ？

さすがに多少雨足は弱まっているが、それでも屋根敷を出て先に進むのは無理だろう。

食堂へ向かうと、果たしてクレア夫人達が食事を取っている。

夫人は俺と目があうと一瞬目を逸らした後、また視線を俺に戻して軽く会釈した。

俺も会釈をり返す。

ベイツ氏についた使用人達は冷ややかな視線を夫人とマティアス氏、そしてエレーナ嬢に投げかけていた。

一旦は断っておきながら、よく食べに来れるものだ。つと言ったところだろう。

食事の後俺は部屋へと向かったが、まおうは屋根裏部屋でエレーナ嬢と遊ぶらしいので部屋の前で分かれた。

しかしやる事も無いので部屋に居ても暇すぎる。

何をして遊んでいるのかな？ と俺も屋根裏部屋へと顔を出す事にした。

屋根裏部屋へと上る階段から部屋の中を覗くと、エレーナ嬢がまおうになにやら紙切れを見せている。

「何をやってるんだ？」

と聞いてみると、エレーナ嬢のお父さんのオドレイ氏との手紙ら

しい。

オドレイ氏と夫人とマティアス氏とは仲が悪かったらしいが、エレーナ嬢とは手紙のやり取りをしていたのだ。

もつともその手紙とくれば宛名こそ「我が娘エレーナへ」とあるが、内容は夫人と息子への不満ばかり、とても心温まるとは言いがたい。

それに対しエレーナ嬢はなだめる内容の手紙をオドレイ氏に送り、必死に家族の仲を取り持つ様にがんばっていたという。

オドレイ氏もそんなエレーナ嬢だけは可愛かったらしく、それゆえ手紙のやり取りも続いていたんだろう。

その後エレーナ嬢とまおうと俺とでしばらく遊んだが、やっぱり遊ぶことに対する体力は子供には敵わない。

まだ遊ぶという二人を置いて、俺は屋根裏部屋を後にした。

部屋へ戻る途中、偶然ベイツ氏と顔を合わせ、今回の事件について改めて話をした。

「オドレイ氏を殺害したところでやったのは夫人ではなく、マティアス氏でしょうね。それでも夫人も捕まるんですか？」

「おそらく向こうは全員で口裏を合わせてきます。そうなれば共犯という事になります。良くて犯人隠避です」

「なるほど。しかしどうして家族なのそんなに憎しみ合ってしまったんでしょうね」

「以前にもお話しましたが、旦那様は奥様の不義を疑い、2人のお

子様についても自分の子供ではないと疑っておりました。その為ご家族に冷たい態度を取り、それがご家族にも伝わったのでしょう」

ベイツ氏はそう言って大きくため息をついた。

「そうですか……」

と俺もため息をつく。

その後ベイツ氏と別れて部屋に着いた俺は、ベッドに身体を投げ出した。

とは家、特にやる事も無い。

俺は寝転がりながら今までの事を反芻し思い出していた。

単に雨宿りの心算で立ち寄った屋敷でえらい事に巻き込まれたもんだ。

屋敷の主人の殺人事件に巻き込まれるなんて。

誰がオドレイ氏を殺したんだろう？ やっぱり夫人かその息子のマティyas氏が怪しいか。

エレナ嬢は論外だし。

そしてベイツ氏は動機が無い。

まさかオドレイ氏すら忘れているほど昔に、ベイツ氏からの恨みを買っていた。とか、捨てられた愛人との間の実の息子で、自分達母子を捨てたオドレイ氏を恨んでいたんだ！

なんていう都合の良い話でもないだろうし。

やっぱり遺産相続を巡っての確執でマティyas氏がやったのかな……。

マティアス氏は頭に血が上ると何をしでかすか分からないところがありそうだし、それにオドレイ氏は後ろから刺されていた。後ろから刺されるのは顔見知りの犯行って言うしな。

オドレイ氏の遺言で全財産がベイツ氏にわたり、自分達は無一文で放り出されるとなると父親とはいえ憎くなるのかもしれない。普通の家庭ならともかく、財産のある大金持ちだからな……。

もともとオドレイ氏は夫人との間の子供を自分の子供と考えていなかったらしいし、夫人と子供達を無一文で放り出すのに呵責は無かったんだろうけど。

しかしそれでもエレナ嬢は可哀想だな……。

あんなに一生懸命家族の仲を取り持とうとしていたのに。

だがふとある事に気付いた。

俺はベッドから飛び起きると部屋を出て通りかかった使用人にオドレイ氏の書斎の場所を聞きだし、そこへと向かう。

この手の屋敷に書斎はつき物だし、大農場を経営していたというオドレイ氏ならば必ず「あの手の本」が有る筈だ。

書斎に着くと「あの手の本」を苦勞して探し出した。

その分厚い本を手にした俺は、ここからさらに目当ての内容を探し出す苦勞を思いため息を付いた。

しかしその心配は無用だった。

あるページにオドレイ氏が付けたと思われる折り目があり、そこを開くと果たして俺が探している内容のページだったのだ。

やっぱりオドレイ氏もこの事をちゃんと調べていたんだ……。

その内容をよく読むと俺の疑問は氷解した。

犯人もこの内容を知っていたなら十分殺人の動機になるはずだ。だがどうやってオドレイ氏を殺した？

本を元通りに戻し書斎にある椅子に座った俺は、改めて今回の事を始めからたどり状況を整理する。

便箋とペンを拝借し、時系列に状況を並べて考える。

この作業は深夜まで続き、部屋に戻ると俺がオドレイ氏の書斎に居た事を知らないまおうが心配そうに待ち構えていた。

「サイエス！ ご飯も食わずにこんなに遅くまで何やってたの！」

「すまん。ちょっとオドレイ氏の書斎で調べ物をしていたんだ」

「調べ物？」

「ああ。それより夫人やベイツ氏はもう寝たのか？」

「うん。寝たよ。もう何時だと思ってるの？」

まおうは怒った様に言った。

「すまん。じゃあ、俺達も寝るか」

こうして俺とまおうはベッドに横になったが、俺は明日の対決を思い、なかなか寝付けなかった。

第22話

朝になり目覚めると、雨はすっかりと止んで晴れ間が覗いている。部屋から出るとベイツ氏が挨拶をしてきた。

「サイエス様。おはよう御座います。やっと雨も止んだのでさっそく使用人の一人に役人を呼びに行かせました。アリーブイについては約束どおりにお願いします」

ベイツ氏はそう言って笑いかけた。

俺もベイツ氏に笑い返すとベイツ氏はさらに口を開く。

「それで旦那様の顧問弁護士にも連絡したのですが、どうやら公正証書遺言書があったらしいのです」

「公正証書遺言書？」

「ええ。自分で書いて保管する遺言書ではなく、証人の立会いで作成されるもので、役場に保管されるので自分で書く遺言書より安全らしいです。旦那様は万一の事を考えて用意していたらしいですね」

「なるほど……」

その手の物が有るかとも思っていたが、やはり有ったか。

「それでその遺言書の内容はやっぱりベイツさんに全財産を譲るという内容なんですか？」

「ええ。それは勿論です」

うむ。そうだろうな。

「夫人とお子さん達はどこに居るんですか？」

「今は食事も済んで自室に戻っていると思いますよ」

「すみません。ちょっとお話があるのでベイツさんも一緒に来て頂けませんか？」

「それは構いませんが、どんなお話なんです？」

「それは夫人達の部屋に行ってから話したいのですが、よろしいですか？」

「ええ。構いませんよ」

こうして俺は一旦部屋に戻りまおうと呼んで、ベイツ氏と共に夫人達の部屋へと向かい、その部屋の扉を叩く。

「サイエスです。少しお話があるのですがよろしいですか？」

「どうぞ」

一昨日の事もあり、夫人はあっさりと部屋に入れてくれたが、ベイツ氏も一緒なのを知ると表情を硬くした。

「それで何の用なの？」
という口調も冷たい。

「実はオドレイ氏を殺害した犯人が分かりました」

「本当ですか？」

「ええ。多分間違いないです。犯人はオドレイ氏の財産を目当てに殺害したんです」

「財産目当て？」

「ええ。そうです。財産目当てでオドレイ氏を殺害したと思われるす」

俺の言葉に夫人は取り乱し叫んだ。

「私ではありません！ それに子供達だってそんな事はいたしません！」

オドレイ氏の遺言ではベイツ氏に全財産がわたる事になっている。財産目的と言われれば自分達が疑われると考えるのは当然だろう。

それに比べベイツ氏は、余裕の態度で口を開く。

「なるほど。それでどの様な証拠を掴んだんです？」

「残念ながら証拠は無いんです。いふなれば状況証拠のみという奴でして。ですが間違いないと思いますよ」

「ほう……。では、どんな状況証拠なんです？」

「いえ。その前に誰が犯人かを先に言わせて下さい。この中に居ますから」

ベイツ氏は怪訝そうな顔をした。

この中に居るのなら言うまでもなく、マティアス氏だろう。と思

っている様だ。

夫人も不安そうに俺を見つめ、マティアス氏は不満げな視線を俺に投げかけ、エレナ嬢は俺と兄のマティアス氏に交互に視線を送った。

エレナ嬢も財産目当てというならば、兄が遺言書を焼いてしまった事もあり、認めたくは無いが兄が犯人なのかと疑っているのかもしれない。

まおうも不安そうだ。

「貴方が犯人だ！」

俺はその人物に向かって指を突きつけた。

みんなの視線も指差された人物へと集まる。
ベイツ氏の元へと。

第23話

「つふ、ふふふふっ」

俺に指差されたベイツ氏は笑い出し、ついには

「あははははは」

と大声で笑った。

そしてひとしきり笑い終わると軽蔑した口調で口を開いた。

「貴方は今まで何を聞いていたのです？ 私は旦那様から全財産を譲ると遺言されているのですよ？ その私が財産目当てで旦那様を殺害ですって？ まさか僅かばかり早く財産を手に入れる為に殺害したと言うんじゃないでしょうね？ あまりにも馬鹿馬鹿しい。貴方はもう少し頭のよい人かと思っていたのに残念です」

夫人達も自分達が犯人扱いされなかった事には安心した様だが、やはり財産目当てでベイツ氏がオドレイ氏を殺害したという事は理解できないのか、俺を怪訝そうに見つめている。

だが俺は構わず話を続ける。

「まずどうやってオドレイ氏を殺害したのかです」

ベイツ氏は自分の発言を無視した俺に鋭い視線を浴びせてきたが、俺は平然と話を続けた。

「オドレイ氏が殺されているのを見つける少し前、ベイツさんは私に飲み物を持ってきてくれました。大変冷えていて厨房から持ってきたと思われるものです」

「それが何か？」

「そしてオドレイ氏が殺害されみんなが集まり話した後、自室へと戻った私は、飲み残していたその飲み物を飲みましたが……どうだったと思います？」

「さあ、分かりませんな」

俺の問いかけにベイツ氏は、そう無愛想に答えた。

「温くなっていました、大変美味しかったですよ」

ベイツ氏は「っふ」っと鼻で笑った。それがどうしたのだ？ という風に。

「次に同じものをクレア夫人から頂きました。これも大変美味しかったです。しかし夫人からの長いお話の後、残りを飲んだらどうだったと思います？」

「美味しかったんじゃないんですか？」

ベイツ氏はうんざりした様に言った。

「いいえ。残念ながら不味かったですよ。氷が溶けて薄くなってしまったので」

俺がそう言って改めてベイツ氏に視線を合わせると、ベイツ氏も鋭い視線を俺に返す。

「で？ それがどうしたのですか？」

「貴方には分かっているんでしょう？」

とはいえ、夫人達とまおうには何の事か分からず俺とベイツ氏を

交互に見比べている。

「貴方はあの時、厨房まで飲み物を取りに行っていたんじゃない。その前に鍵を忘れたと言って厨房に戻った時に飲み物を持ってきていてすぐ近くに隠して置いたんだ。そして飲み物を取って来ると言い部屋を出た貴方は、オドレイ氏を殺害し返り血などの始末をしてから、近くに置いてあった飲み物を持って俺の部屋に戻ってきたんだ」

「何を言ってるんです？ 私が厨房に鍵を取りに行ってから貴方の部屋に向かい、飲み物を取りに行くまでにそれなりの時間があったのですよ？ そんな事をすればすっかり温くなっているはずでしょう」

「飲み物に氷を入れた物だったら確かにその間に氷が溶けきって温くなっていたでしょう。しかし飲み物ごと完全に凍らした物を置いておけば、飲み物を取りに行った時にちょうど飲み頃になっている。貴方はそう時間を計算していたんじゃないんですか？」

「何を根拠に言ってるんですか？」

「夫人が持って来てくれた飲み物は氷が溶けると水っぽくなって不味かった。しかし貴方が持って来てくれた飲み物は氷が溶けても美味しかった。それは氷自体が飲み物を凍らした物だったからじゃないんですか？ 貴方は飲み物ごと完全に凍らした物を用意していたんだ」

だが俺の言葉にベイツ氏は軽蔑した様に反論する。

「たとえそうだとしても、旦那様を殺害した証拠にはならんでしょう？」

「しかし貴方のアリバイは無くなる」

「貴方は肝心な事を忘れてはいませんか？ 何度言わせるんです？ 私は旦那様から全財産を譲り受けるんですよ？ 私の動機は？」

俺はベイツ氏を無視してエレーナ嬢に身体を向け歩み寄った。

エレーナ嬢は不安げに事態を見守っている。

「大丈夫。お父さんを殺したのはお母さんやお兄さんじゃない。でもそれを証明するには君が持っているお父さんからの手紙が必要なんだ。持ってきてくれるかい？」

「本当？」

「ああ。本当だ。だから頼む」

「はい！」

エレーナ嬢は急いで自分の個室へと向かうと例の手紙を持ってきて俺に差し出した。

「じゃあ、少し借りるね」

俺はそう言って受ける取ると、ベイツ氏に近寄った。

「この手紙を読んでいただけますか？」

ベイツ氏は無然と無言で手紙を受け取るとざっと流し読む。

「これがどうしたというのです？ この手紙からは旦那様と奥様達の仲が悪いという事しか分かりませんか？」

「宛名はなんと書いてあります？」

「エレーナお嬢様宛ですね」

「そうじゃありません。正確にはなんと書いています？」

「我が娘エレーナへ。ですね。それが何か？」

「そうです。我が娘エレーナへ。です」

俺はエレーナ嬢へと視線を送りにっこりと笑った。そして話を続ける。

「貴方は夫人が不倫をしていてオドレイ氏が2人の子供を自分の子ではないと思っている。と私に説明していた。ですが、そう思っていたのなら手紙に「我が娘」と書くでしょうか？ 確かに貴方が吹き込んだ所為で夫婦仲は悪くなっていた。しかしオドレイ氏は少なくともエレーナ嬢を自分の子供ではないと思っではいなかった。違いますか？」

俺の言葉にベイツ氏はため息を付いて答える。

「それで？ もしそうだとしても、だからどうしたというのです？ それと私が旦那様を殺害したという事がどう関係あるんです？」

「あの晩餐の時、オドレイ氏は貴方に全財産を贈ると遺言した、と言っていました。しかしエレーナ嬢を路頭に迷わす事はありません。この矛盾をどう解決するのか？ オドレイ氏の書斎に行って調べさせて頂きました。何か抜け道が有るんじゃないかと思ひましてね。そしたらやっぱりその事が書いてある法律の本が有りましたよ。しかもオドレイ氏もそこを熟読したのか、そのページに折り目が付い

ていました。貴方もご存知なんでしょ？ 遺留分についてですよ」

俺の言葉にベイツ氏の表情が険しくなる。

だが夫人達は何の事か分からない様だ。もっとも分からないからこそオドレイ氏から全財産を譲り受けるというベイツ氏をあそこまで敵視していたんだろうが。

俺は夫人達に向き直って説明した。

「遺留分とは、たとえ遺言書にどう書かれていても遺族が最低限受け取る事が出来る権利がある財産の事です。そうでないと、今まで夫に尽くしてきた奥さんやお子さんが無一文で放り出される事がありえるので、それを防ぐ為の法律です」

「本当ですか!？」

俺の言葉に夫人は驚きの声を上げた。

「はい。オドレイ氏は全財産をベイツ氏へ贈る事について貴方達には「いい薬」と言っていました。ですがそれはまったく財産を残さないと貴方達に思わせて不安にさせる。それだけの事だったのです。オドレイ氏自身遺留分の事は分かっていて、貴方達にも遺産を残す心算だったんですよ。貴方達3人は全財産の半分は相続できるはずですよ」

夫人は喜びの表情を作ったが、そこにベイツ氏の怒声が響いた。

「それがどうした！ それと私が旦那様を殺す事に何の関係がある！

「正確に言えば貴方がオドレイ氏を殺す事に意味は無い。重要なのはオドレイ氏を殺害したのは夫人達だと思わせる事だ。なぜなら遺産目的で殺害した場合、相続権を失うからだ」

遺産目的で殺害しても相続できるなら、極端な話何年か刑務所に入る覚悟で殺害しても遺産を貰える事になる。それを禁じる法律だ。

「オドレイ氏殺害の容疑が夫人達にかかれば夫人達の相続権、遺留分は無くなる。そうなれば晴れてオドレイ氏の全財産を手に入れる事が出来る。貴方はそう考えたんだ！」

指を突きつける俺に、ベイツ氏は顔を歪ませ突き刺す様な視線で睨む。

「オドレイ氏は貴方を信頼していた。そして貴方に財産の半分を譲り事業を任せる心算だった。にもかかわらず貴方は残り半分を手に入れようと、自分を信頼してくれたオドレイ氏を殺害したんだ！」

「私は遺留分などというものは知らん！ 旦那様が半分しか私に残さないこともない！ 私は全財産を譲り受ける事になると思っていた！ 私には殺人の動機が無い！」

「それは嘘だ！ オドレイ氏は貴方に事業を任せる心算だった。それならば譲る財産が半分という事を貴方に言っていない訳がない。事業を引き継ぐのに重要な事なんだからな！」

「……証拠はどこにある」

「証拠は無い。だが、俺はやってくる役人に今言ったことをすべて話すぞ！ お前にアリバイが無い事も、オドレイ氏がエレナ嬢達を自分の子供を思っていなかったという嘘を言っただけを味方につけようとした事も、自分が全財産を譲り受けられないと知りながら、周囲には自分が全財産を受け継ぐことになっていると言っただけ、夫人達を挑発した事もだ！」

もしかしたらマティアス氏に遺言書を燃やさせた事すらベイツ氏の計画だったのかも知れない。

あのような事をすれば役人達に対する夫人側の心象は悪くなる。

ベイツ氏はおそらく公正証書遺言書の存在を知っていて、オドレイ氏の直筆遺言書を夫人達の前でわざと見せびらかしたんだ。

もしマティアス氏が燃やしたら儲けもの。燃やさなくてもベイツ氏には何の被害も無いのだから。

「役人は夫人達を貴方のどちらをオドレイ氏殺害の犯人と考えるかな？」

俺はベイツ氏へ冷然と言い放った。

そこへ突然扉が開き、ベイツ氏側に付いた元マティアス氏お付のオードランが飛び込んできた。そしてベイツ氏におもねる様に叫ぶ。

「ベイツ様！ 役人が来ました！ 早くそいつらを旦那様を殺した犯人として突き出しましょう！」

あまりの間の悪さに俺はオードランに冷たい視線を投げかけた。

まおうはあっけに取られ、

クレア夫人もオードランに冷ややかな目を向ける。

マティアス氏はオードランを睨み。

エレーナ嬢は困り顔を見せた。

そしてベイツ氏は……。

「まおう！ 捕まえろ！」

窓から逃げようというのか、窓に向かって走るベイツ氏に気付いた俺はまおうに叫んだ。

ガシャンっというガラスが割れる音なりベイツ氏は窓の外に身を躍らせる！

しかしすばやく動いたまおうが、割れた窓から手を伸ばしベイツ氏の襟首を捕まえ、部屋の中に引きずり込む。

まおうによって床に投げ出されたベイツ氏を見下ろし俺は口を開く。

「観念したらどうです？ まおうからは逃げられませんよ」

「くそ！」

「オドレイ氏の全財産の半分でも相当な額のはずだ。貴方はそれだけで満足すべきだった……。貴方はそのもう半分の為にオドレイ氏と家族との絆を壊しオドレイ氏を殺害した。絶対に逃がしはしない」
ベイツ氏は声も無くうな垂れている。

「どうしたんです！」

そこへ窓が割れる音を聞きつけたらしい数人の役人が部屋に雪崩込んだ。

役人達はまおうの姿に硬直したが、俺が事情を話すと納得し、そしてベイツ氏に縄をかけた。

「私じゃない！ 奥様がその男を雇って旦那様を殺害したんだ！」
ベイツ氏は最後まで喚いていたが役人は構わず引きずる様に連行した。

ベイツ氏が俺達を屋敷に入れてくれたのは、自分のアリバイに使う心算だったんだろう。

はじめに招待したという雨でこれなくなった客人にその役目をさせる心算だったのを、俺に代役させたのだ。

夫人達は普段は別宅に住んでいる。今回のチャンスを逃せば次に条件が揃うのはいつになるかベイツ氏もあせったに違いない。

なにせオドレイ氏の体調は良くなく、もしオドレイ氏を殺害する前に自然死されては元も子も無いからだ。

その後クレア夫人からお礼にと金貨が入った皮袋を手渡された。これからも旅は続く、遠慮無しに受け取ったが気分はこの屋敷から早く立ち去りたかった。

クレア夫人も俺達を引き止める様子はない。

だがエレーナ嬢だけは名残惜しそうにし、まおうとなにやら話している。

「お兄ちゃん。ありがとう！」

屋敷の門をくぐる時エレーナ嬢が笑って手を振ってくれたので俺も手を振り替えし、次の村へと道を急ぐ。

しばらく歩いた後まおうに聞いてみた。

「エレーナ嬢と何を話していたんだ？」

するとまおうが嬉しそうに口を開く。

「また来てね。だって。僕達友達なんだよ」

「そっか。良かったな」

まあ悪い事ばかりでも無かったか。

空はそれまでの大雨が嘘の様に晴れ渡っていた。

第24話

俺は今椅子に座り数枚の経歴書を机に並べながらどの娘を採用しようかと悩んでいた。

やっぱり今後何かと冒険を続けていくなら魔法使いを仲間に加えたほうが良いと考えたのだ。

しかも買い手市場であり、まさに選り取り見取りという状態だった。

こういう事になったのには事情がある。

次の魔王が居る村へと向かっていた俺とまおうだったが、その途中にあるバルトレという栄えた町に立ち寄った。

「大勢の人だね」

「そういえば、まおうはこんなに沢山の人が居るのを見た事ないんだっただか？」

「うん！」

まあまおうは、この世界に来てすぐにアベル村の古城に住みだし、その後俺と村々を旅してただけだしな。

当たり前といえば当たり前か。

しかしこれも当たり前と言えば当たり前だが、俺達とすれ違う人々はまおうをジロジロと見て、中には慌てて逃げ出す人までいる。

実は町に入る時、町の門を守る兵士と一悶着合ったのだが、そこにギルドの人がやってきて俺がまおうを従えている冒険者なのだと兵士達に説明してくれたのだ。

ギルドには俺の経歴が通達されていて、当然この町のギルドにも連絡があったのだ。

ありがたい話だが、ギルドに登録し仕事をして報酬を貰う時に手数料を払っているのもこういう時の為だ。

町に入った俺は改めてギルドへと向かったのだが、まおうは目立つ目立つ。町の人々の注目を集める事になってしまったのだった。

ギルドに着くとそこは大きな町のギルドだけあって、多くの先客が居た。

だがその冒険者達はまおうの出現に驚いたばかりか、なんといきなりまおうに攻撃を仕掛けてきたのだ。

もっともその冒険者達の戦士が繰り出した剣はまおうの硬い皮膚に歯が立たずポッキリと折れてしまい、魔法使いが放ったライトアロー《光の矢》は、まおうの持ち前のスピードの前にあっさりと避けられてしまった。

そしてまおうがその高速をいかしてそいつらの後ろに回ると、突然目の前からまおうが消え、そして後ろに現れた事に驚き、そいつらは驚き飛び退いて尻餅を着くという醜態を晒した。

さらに、とても叶わないと思った奴らは、慌てて立ち上がると尻尾を巻いて逃げ出してしまったのだ。

「まおう手加減してやれよ」

「えー。してるよー」

俺とまおうは、逃げていく奴らの背を見送りながら笑っていたが、どうやら今の冒険者達はなんとこら辺ではかなり名の通った奴らだったらしい。

それをあっさりとあしらったまおうを従えている（様に見える）俺は一躍この町での最有力冒険者となったのだ。

そして、自分と組んでくれ！ という冒険者達が殺到したのだ。

冒険者は当然強い奴と組みたがるがさらに名が売れている事も重要だ。

名が売れば売れるほど仕事も取り易くなる。

そうなれば仕事を選べる様になって来て、得意な仕事ばかりを選んで受ける事も出来るようになり、当然得意な仕事ならばそつなくこなせる。

そしてそつなく仕事をこなして行けばさらに名も売れるって物で、これが流れに乗るというやつなのだが、そうなるまでが大変なのだ。

名が売れるまではどんな仕事でも受けないとやっていけないし、不得意な仕事で命を落とす奴や、一気に名声を得ようと手に負えない依頼を受けて命を落とす者もいる。

そしてこの町で名の知れた冒険者達を軽くあしらった俺とまおうは、一瞬で町中に力を示しさらにその冒険者達を上回る名を得た事

になる。

勿論こんな事は滅多にあるもんじゃない。町中で冒険者同士の対決など認められておらず本来なら乱闘という事で役人に捕まりかねない。

今回は向こうがまおうの事を敵と勘違いし行き成り攻撃を仕掛けてきた事、こっちが相手は無傷であしらいそして襲われたと被害届を出さなかった事で特に乱闘に関しては不問になされたのだ。って言ってもどっちにしる俺達に非はないのだが。

まあこの様にして名の売れた俺達と冒険者達が組みたがるのも無理はない。

というわけで魔法使いを仲間にした方が良いかも？ と考えていた俺は渡りに船とギルドの一室を借りて面接会場とし、どの冒険者と組むかを検討しているのだ。

もっとも俺も、たまたままおうと出合ってさらに偶然美味しい仕事にありついてた御蔭で今のところ金はたんまり持っているが、そうでなかったら受けられる依頼はすべて受けて必死にこなしている段階なんだろうな……。

そういう意味では、本来だったら実は今応募してきている冒険者達より俺の方がよっぽど駆け出しも良いところか。まおうには感謝しないとな。

応募者は数十人に達し全員と面接する訳には行かず、俺は提出された経歴書を元にふるいにかけた。

経歴書にある経歴と職種、そして得意な攻撃方法などを参考に選別する。

今回俺が仲間にしたのは魔法使いなので、それ以外の職種の奴はばっさりと外す。

そして魔法使いだけに絞った経歴書の束からまた得意魔法の欄を見て、どの程度のレベルかを判断し、腕が立ちそうな奴らだけに絞った。

依頼によっては冒険者同士で戦う事もある。

それを考えれば得意魔法を公開するのは危険な為、得意魔法欄を空白にする奴も多いが、そうなると当然採用され難くなる。

今回どうしても俺と組みたいという奴が多かったらしく、大抵の者が得意魔法欄を埋めてきた。

こうして俺は面接する人数をやっと数名にまで絞る事が出来たのだが、するとまおうが口を出してきた。

「でも、どうして女の人ばかりなの？」

「何を人聞きの悪い事を言ってるんだ。ちゃんと能力的に優れた人を選んでるだろ？」

まおうは男の魔法使い経歴書を俺の前に差し出した。

「でも、この人も同じくらいと思うよ」

「まおう。その人が優れているというならともかく、どうして同じ

くらいなのに男を選ばなくちゃいけないんだ？」

「そういうもののなの？」

「そういうもんだ。何せ長い間旅をするんだからな。一緒に居て楽しい人の方が良いだろう？」

「うん。でも僕は男の人でも女の人でも、優しい人ならどっちでも良いよ」

「俺は女の人の方が楽しいんだよ。それに経歴書じゃ性格まで分からないだろう？ 性格が分からないなら他のところで選ぶしかないじゃないか」

「うーん」

まおうは納得しかねる様子だが、まあこころへんは考え方の違いだ。

それにまおうだって男の人でも構わないって言ってるんであって、女の人嫌と言っている訳じゃないんだから、まあ良いだろう。

こうして、俺は経歴書から選んだ数人の女魔法使いを面接する事になったのだ。

第25話

まずはクリスティナさん。経歴書によれば冒険者歴4年の25歳。俺より2つ上か……。

「失礼します」

クリスティナさんは控えめなノックの後、部屋に入ってきた。

真っ直ぐな黒髪に伏せ目がちな細い切れ長の目の品のある顔。

長い手足に全体的にすらっとした肢体を魔法使い特有の紺の丈の長いローブで包んでいる。

いかにも清楚っていう印象だ。冒険者にもこんな女性がいるんだな……。

俺とまおうが並んで座る机を挟んだ椅子を彼女に勧めると、早速面接を開始した。

彼女の経歴書を手に口を開く。

「それでは、ここに書かれている経歴をもう少し詳しく説明して頂けますか？」

「はい。まずこの町の魔道塾にて魔法を習い2年で課程を修了。その後ギルドに冒険者として登録。初めの依頼は……」

彼女は淀みなく自分の経歴を説明していく。

うんうん。いい感じだな。もう少し詳しく話を聞いてみるか。

俺は机の上に広げた彼女の経歴書のある行を指差した。

「今の話だと、この冒険の時はかなりの人数の冒険者達との共同だった様ですが、この時の貴方の役目は？」

すると彼女は経歴書を覗き込む様に身を乗り出し、甘い香りが俺のところまで漂ってきた。その香りに俺が一瞬ぼーとしていると彼女は「この時は……」と説明を始め、俺はその声で我に返った。

「下級モンスターが洞窟に住み着いていたので討伐して欲しいという依頼でした。私達は洞窟の入り口から順にモンスターを退治していきました。洞窟は一本道でモンスターに後ろにまわられる心配はありませんでしたので、戦士の方々は全員前衛につき、私はずっと後衛として魔法による援護と傷付いた戦士の方の治癒を行っておりました」

「なるほど……」

俺がそう呟くと、今まで経歴書を覗き込んでいたクリスティナさんは顔を上げた。すると俺の顔にかなり近いところに彼女の顔が来る事になり、間近に美しい顔が有る事にドキリとした。

「それと、食事の用意も私がしておりました」

「食事？」

「はい。戦士の方々はあまりそういう事は得意ではいらっしやらなかったで……。食事の用意はいつも私がしておりました」

彼女は俺を見つめてにっこりと笑った。

それは……。

自分を連れて行くなら食事の用意は自分がすると。
自分の手料理を食べてくれと。

そう言ってるんですね！ クリスティナさん！

清楚な外見なのになんて積極的なんだ。

当たりか？ 一人目で当たりを引いたのか？

よし！ クリスティナさんで決めてしまおう！

俺がそう決意して口を開きかけると、肩に激痛が走った。

どうやらまおうが肘で軽く叩いたらしいが、まおうの「軽く」は
半端ない。

いくらゆっくりでも鉄の様に硬い肘をぶつけられては痛すぎる。

俺が痛みで口が開けないでいると、まおうが先に口を開いた。

「じゃあ、他の人ともお話をするのでまた連絡しますね」

まおうの言葉にクリスティナさんはきよとした表情になった
が、そんな顔もあどけなさがでて愛らしい。

どうやらまおうはあくまで俺に従っているものと考えていて、口
を出してくるとは思っていなかった様だ。

「じゃあ……。また連絡しますので」

俺は肩の痛みに耐えながらそう言うと、クリスティナさんは気遣
わしげな表情で俺を見ながら退室した。

クリスティナさんが居なくなると俺は肩をさすりながらまおうを

睨んだ。

「まったく、クリスティナさんで良いじゃないか。何か不満でもあったのか？」

「駄目だよ。ちゃんとみんなの話を聞いてからじゃないと！」

残っているのは能力的には同じ位なんだから、後は相性だけが問題なんだ。クリスティナさんでばっちりなんだから他の人の面接をしても仕方がないだろ……。

とは言うものの他の人も呼んでしまっているのも事実なので渋々面接を続けた。

だがやっぱりクリスティナさんほど、これは！　と思う人が現れないまま残りの人数は少なくなっていく。

俺は、だから言っただろ？　と視線でまおうに問いかけたが、まおうも、だって全員と面接しないといけないんだもん！　と平然としている。

なんてやっているうちに最後の1人となった。

最後はサフィスさん。冒険者歴1年8ヶ月の22歳。

俺より1つ下だが、この年でクリスティナさんや他の人達と能力的に引けを取らないって言うのはなかなか凄いかも知れないな。

だが経歴書は一応ギルドでチェックされてまったくの嘘ではないと報告を受けているが、それでも嘘とばれない範囲内で経歴に下駄を履かせている可能性もある。

例えば凄い実績のある冒険者のパーティーに参加していて共に戦

ったと経歴書に書いていても、実際はただの雑用係とか。

「失礼します」

少し強めのノックの後、俺が「どうぞ」と言うとサフィスさんは部屋に入ってきた。

丸みを帯びた頬に巻いた金髪に大きな蒼い目。

白いブラウスと赤いチェックの膝丈のスカートの上に、変則的な腰まで程度の茶色い短いローブを肩にかけている。

最近の魔法使いの中では、動きやすいという理由でこういう格好が流行っているらしい。

ちなみにクリステイナさんの丈の長いローブは、正統派とか伝統的とか言われる昔ながらのデザインだ。

すらりとしたクリステイナさんとは違い胸の辺りは大きく膨らみ、容姿は何から何までクリステイナさんとは正反対という感じだ。

とは言っても、美人のクリステイナさんとは違いサフィスさんが不細工と言う訳じゃなく、可愛い系と言った感じだった。

しかし部屋に入った瞬間からなにやら目が潤んでいる。

熱でもあるのか？　と思ったがどうやらそうでも無さそうで、どうもかなり興奮しているっぽい。

まあとにかく面接を始めよう。

「それでは、経歴を説明して下さい」

サフィスさんは経歴を説明してくれているが、残念ながらクラリス

ティナさんの様に淀みなくとは言い難い。

経歴書に嘘を書いていてちゃんと説明できていないという訳でも無さそうだが、かなり緊張している所為なのか、焦って喋りところどころ噛んでしまっているのだ。

うーん。好み的には初々しくて良いと言えば良いんだけど、一緒に冒険をするとなると頼りないかな……。俺がクリスティナさんを押すのも、何も好みだからってだけじゃないのだ。

やっぱりクリスティナさんで決まりだよな……。

「そうですか。それではありがとうございます。御座いました。結果はまた連絡します」

俺はこれ以上面接を続けても時間の無駄だと切り上げたが、すると彼女にもそれが伝わったのか悲しそうな目で俺を見つめてきた。

うっ！ そんな目で見られると罪悪感が……。

「ありがとうございます……」

彼女は頭を下げたが、顔を上げるとその目には微かに涙が滲んでいて、がっくりとうな垂れたまま廊下へと続く扉へと向かった。

そんなに俺と組みたかったのか……。とは言え頼り無さそうなんだよな……。

サフィスさんが部屋を出た後俺は改めてまおうと相談した。

「どうだった？」

「うーん。ちょっと可哀想だったね……」

「まあな。でも、だからと言って可哀想だからって理由で組む訳にも行かないだろう」

「そうだね……」

「じゃあ、クリスティナさんで決まりで良いな？」

「うん」

じゃあ、明日ギルドを介して連絡して貰うか……。

俺がそう考えていると扉を叩く音が聞こえた。

「サイエス様。お時間です。後延長なさいますか？」

おっと、借りていた部屋の利用時間が過ぎたか。

「いえ。出ます出ます」

延長料金を取られては堪らないと、俺とまおうは慌てて部屋を後にした。

ギルドを出た俺達は宿を探し、するとさすがに大きな町だけある。探せばあるものでまおうの巨体でも屈めば何とか部屋に入れる宿屋があったので、そこに泊まる事にした。

第26話

俺とまおうは宿屋の1階に部屋を借りた。いくら大きな宿屋でも2階にまおうをあげては床がぬけそうだったのだ。

そしてまおうの為に大量の肉料理を注文し宿屋の食堂で食べていると、2人組みの客が離れた席に座ってこっちを盗み見ていた。

旅をする人間といえば冒険者か商人って相場が決まっているが、まあこいつらは身なりからして俺と同じ冒険者だな。

なにせまおうが居るから、盗み見られるのなんていつもの事で気にもしていないけど、どうやらこいつらは昼間に騒ぎを知っているらしい。

「さすがあいつ等を倒しただけはある。あの牙を見ろよ」

「ああ、人の頭なんか果物を齧る様なもんだろう」

とえらく物騒な話をしているのが聞こえてくる。よっぽどまおうを怖いものと思っているらしい。

だけどもまあ仕方が無いと聞き流してたんだけど、奴らのまおうへの話は尽きない。そして遂に、当のまおうが堪忍袋が切れたのか突然立ち上がった。

「僕そんなに怖くないもん！　ちよつとやって来る！」

「待て！　まおう！　お前がいったら余計に怖がらせるだろ！」

だけどもまおうは俺の制止を振り切って冒険者達の元へと向かう。

まあ、まおうを制止できる人間なんてほとんど居ないんだけど。

まおうがずんずんと冒険者達に近寄っていくと、やつらもやっと自分達の話が俺達のところまで聞こえていたのに気付いたのか、恐怖でガタガタと震えだした。今まさに自分達が言っていた様に、まおうの牙に頭を齧られると思っているんだろう。

だがまおうはそれに構わず、さらに奴らに近づきながら腰に巻いたかばんに手をやる。

まさか！

「止めるんだ！ まおう！」

だが俺の声に構わず、まおう必殺の……お手玉が炸裂した！

「僕は怖くないよー！」

それからしばらく後、俺とまおうは、まおうの噂話をしていた冒険者達と一緒に酒を飲んでいた。もつともまおうは果実の絞り汁だ。^{ジュース}

「いやー。まさかこんなに愛嬌のある魔王がいるとは思ってもいなかったねー」

男達のうちの1人がまおうの左横に座り、不自然な体勢でまおうと無理やり肩を組み酒を飲みながらそう言った。

「確かにまおうは見た目は怖いですがからね」

「えー。僕、そんなに怖いかなー？」

するとまおうの言葉に、まおうの右横に座る男が口を挟んだ。

「結構なもんだよ。わし食われると思ったもん」

「そんな事ないよー！」

まおうが椅子に座りながら足をドタバタと踏締め、ぶんぶんと腕を振り回すと決して小さくは無い宿屋がぐらぐらと揺れた。

「ちょっと待て、まおう！ 宿が壊れるぞ！」

俺が叫ぶとまおうはやっと暴れるのを止めた。危なかった……。もう少しで宿を破壊して犯罪者になるか、多額の修理費を請求されるところだった。

俺達が、まあこういう風に食事を楽しんでいると、窓の外からこちらを覗いている人影が見えた。その人影は俺が視線を向けると慌てて窓から頭を隠したけど、俺にはその人影に見覚えがある。あれは確か……。

「ちょっと待っててくれ」

俺はそう言い残すと宿屋を飛び出して外に出た。するとやっぱり思った通りの人が窓から中を窺っている。

「サフィスさん！」

声をかけると彼女は慌てて逃げ出したが、俺は追いつがって彼女の手を掴んだ。

「逃げる事は無いじゃないですか」

「話してください！ ただ最後に一目見たかっただけなんです」

「最後に？」

すると今まで俺の手から逃げようと暴れていた彼女は、大人しくなって俯いた。

「私が採用されないのなんて、自分でも分かっています。だから……」

最後の方はほとんど涙声になっていた。そこまで俺の事を思ってくれているのか……。彼女の思いに胸が熱くなり、つい彼女の肩を抱こうと手を伸ばした。

そしてその手が彼女の肩に触れようとした瞬間……。

ドムッ！ と彼女の肘鉄が俺の鳩尾ミツオチに突き刺さった。

「止めて下さい！ 私そんな心算で来たんじゃないかもしれません！」

俺はあまりの威力に膝をついて喘いだ。くっ！ 戦士系冒険者として鍛えている俺に膝を付かせるなんて、手加減なしのマジ肘鉄か……。

だけど、清楚な感じだけど意外と大胆だったクリスティナさんも

良いけど、一目見たかったと言いながら、それでも身持ちが硬いサフィスさんもこれはこれで結構……。

よし！

「どうです？ 窓から見てたんなら知ってると思いますけど、今ちようどまおうと食事中なんです。一緒にどうですか？」

もちろんサフィスさんをやっぱり採用しようなんて考えている訳じゃないけど、まあ最後に食事を一緒にするくらい良いだろう。それに2人きりじゃなくてまおうも居るから、身持ちの硬いサフィスさんも断らないと思う。

「まおうさんと？」

「ええ。見た目はあただけど怖い奴じゃありません。まあそれも窓から見てたんなら知ってると思いますけど」

するとサフィスさんは少し頬を赤くしながら俯いた。

「じゃあ……よろしくお願いします」

こうして俺とサフィスさんが連れ立って宿に戻ると、まおうはまたお手玉を取り出し披露していた。って言うか、人数が増えてないか？

10人近くに膨れ上がった観客の前でお手玉を披露していたまおうは、戻った俺に目を向けてサフィスさんも一緒なのに気付いて首を傾げた。

「あれ？ サフィスさんどうしたの？」

「ああ、窓から偶然見かけたから、ちょっと食事に誘ってみたんだ」

「よろしく願います」

サフィスさんがペコリと頭を下げると、まおうは「そうなんだ」と頷いて、

「じゃあ、ちょっと見ててね！」とまたお手玉を披露した。

サフィスさんは「凄い！ 凄い！」と手を叩いて喜んでいる。その笑顔はとても嬉しそうで、見ているこっちまで楽しくなりそうだった。

彼女と一緒に旅をすれば楽しそうだな……。いやいや、そんな動機で旅の仲間を選ぶ訳には行かない。なにせ命にかかわる事なのだ。

俺がそんな事を考えているうちに、楽しい宴はさらに続き、まおうと彼女、さらに他の宿の客達は輪になって踊り、俺も参加した。サフィスさんは本当に嬉しそうに笑い。まおうも彼女が気に入った様だった。

だけど楽しい時は過ぎるのが早い。夜も更けると他の客達は1人、また1人とその輪からはずれその数を減らしていった。

「今日は本当に楽しかったです。ありがとうございました」

サフィスさんは宿屋の前で、見送る俺達にそう言って丁寧にお辞儀をした。

「いえ。こちらこそ楽しかったです」

「僕も楽しかったよ！」

するとサフィスさんは俯いてしまった。

あれ？　　と思っているとサフィスさんは顔を上げたけれど、その目には微かに光るものがあった。

「私……。今日の事は忘れません」

彼女はそう言って背を向けると駆け出して立ち去ってしまったのだった。

いくらなんでも会ったばかりなのにと俺は啞然としていたけど、まおうが不意に口を開いた。

「そんなに一緒に来たかったのかな……」

「……そうみたいだな」

「サイエス。僕……」

「ああ、分かってる」

俺が笑みをまおうに向けると、まおうは俺にしか分からないだろ
う満面の笑みを浮かべた。

そして翌日、ギルドを介して採用者に連絡して貰った。不採用の人も同じくギルドから連絡をして貰う。過去に、直接断りの返事を

伝えて立ち去ろうとした時、逆上した不採用者に襲われたって事件が発生した事があってそれを防ぐ為だ。

そして俺達がギルドの一室で採用者を待っていると、ギルドから連絡を貰ったその採用者が現れた。

「サフィスさん！」

まおうが叫ぶ様にその名を呼ぶと、サフィスさんは涙ぐんで頷いた。

「私……駄目だと思ってたのでとても嬉しいです」

うんうん。こんなに喜んで貰えると俺も嬉しい。

クリスティナさんは積極的だったけど、俺に好意を持っているかと言えば未知数だったし、それに比べてサフィスさんはわざわざ最後に一目会いたいと来るくらい……。

いやいや、クリスティナさんも良かったけど、まおうが喋った時にちよっと戸惑っていたし、サフィスさんはまおうと仲良く出来そうだな。

うん。俺は私情を挟んでないぞ。

サフィスさんは感極まったのか両手を広げ俺達の方へ駆けてきた。

よし！ここは新しい仲間として下心無しに抱合おうじゃないか。と両手を広げ彼女が飛び込んでくるのを待った。

そしてサフィスさんはそのまま……

「まおう！」とまおうに抱きついた。

え？

「私、爬虫類が大好きで、まおうさんを一目見た時この人だ！　っ
て思ったんです！」

とサフィスさんは、3メートルを超える二足歩行のトカゲの様な
姿のまおうに抱きつきながら嬉しそうに笑った。

なんだと！

俺は目眩めまいがしそうになったけど耐えた。

ふっ……。大丈夫だ。俺は下心があってサフィスさんを選んだ訳
じゃない。サフィスさんがまおうと仲良く出来そうならそれで良い
じゃないか。耐えろ。耐えるんだ俺！

俺は平静を保ちながら2人に向かって微笑んだ。

「いやー。まおうと仲良く出来そうな人で良かったよ。中々そうい
う人が居なくてね」

俺が声をかけると、サフィスさんはまおうに抱きついたまま俺に
顔を向けてきた。

「そうなんですか？　よかったー。絶対あの私より先に面接を受け
た長い黒髪の人が採用されると思ってたんです。あの人とても落ち
着いてたし」

「まあ、あの人も良かったんだけど、まおうと仲良く出来るかと言

えば微妙だね」

大丈夫。俺は冷静だ。偉いぞ俺！

「そうなんですか？」

「ええ」

するとサフィスさんに抱きつかれたまま、まおうが口を開いた。

「でも、2人とも採用しても良かったのかも知れないね」

ふっ……まおう。

「それを早く言えー！ー！！」

第27話

町を出た俺達は、まおうの仲間の魔王を探す為、次の村へと向かっていった。

「じゃあ、まおうって迷子なの？」

「迷子じゃないよ！　いきなり連れて来られたんだ！」

街道を歩く俺の頭上でサフィスとまおうの会話が聞こえる。そう言えば仲間を募集する時、旅の目的がまおうの仲間を探す事っていうのを説明しなければいけないのを忘れていた俺だったけど、まおう大好きなサフィスは特に反対せずに受け入れてくれた。

まあこの点に関しては、サフィスを採用して正解だったかな。

「でも、大丈夫。ちゃんとまおうを仲間のところに連れて行ってあげるからね」

「うん」

サフィスとまおうはほのぼのと会話しているけど、思わず俺は突っ込んだ。

「いやいや、確実にお前が連れて行ってもらってるだろ」

「えー。どうしてよ？」
と頭上から声がする。

「じゃあ、せめて自分の足で歩け」

と俺はまおうに肩車されているサフィスを見上げていった。

「えー。でも高いところから見ると、とてもいい景色なのに」

サフィスは、俺の言葉とはまったく関係の無い事を言うと、まおうの上でさらに伸びをして遠くを見渡した。

っていうか、なぜタメ口なんだよ。いくら仲間になったら上下関係はない、遠慮は無用って言っても遠慮なさ過ぎだろ。でも、ここで一々指摘して器の小さい男と思われるのも嫌だしな。

俺はやれやれとため息を付くと、黙々と目指す村へと足を進めた。

そして魔王がいるという村に到着し、さっそくギルドに顔を出して情報を集めるべくギルドに向かう。

その道すがら村の様子を見ると、村人達はおおらかそうだった。貧しい村だと人々も生きるのが精一杯でギスギスしているものだが、ここは割りと農作物の恵まれているようだ。

そしてギルドにつくと無人の受付に声をかけると置くから親父が出てきた。ギルドの受付と言えばやっぱり親父か。一度くらい美女が出てきても良さそうなものだと思うんだがな。

「この村の近くにいる魔王ってどんな奴なんですか？」

俺が受付でさっそく話を切り出すと、ギルドの親父は渋い顔になり顎を手で撫でながら、ちよっと説明するのを躊躇しているみたいだった。

「なにか問題あるんですか？」

「まあ、あるっちゃ大ありだな。悪い事は言わねえ。本当は俺がこんな事を言っちゃいけねえんだろうけど、止めておいた方がいい」

確かにギルドの受付の親父が受けない方がいいなんて言っちゃいけないんだろうけど、そのいけない事をするくらいやばい相手なのか？

「そんなに強いんですか？　今まで何人もの冒険者が返り討ちにあったとか？」

俺は親父の言葉から連想される率直な感想を問いかけたけど、親父はため息を付きながら首を振った。

「いや、奴と戦おうって奴すら今まで居ねえんだ。あんなのどうやって戦ったらいいか誰も分からねえんだよ」

「どう戦ったらいいか分からない？」

「ああ、その魔王はどうやら、人を操るらしいんだ」

「人を操る？」

「そうだ。そんな魔法を使える奴なんて人間でも魔物でも聞いた事がねえ。下手に手を出して自分が操られたらどうする？　魔物の手先になるなんて誰だって真っ平ごめんだ」

なるほど……。確かに試しに戦ってみようって訳にも行かないか。

冒険者には命知らずな奴が多いって言っても、魔物に操られて生きながらえるって、考えようによっては死んだ方がマシってやつだな。

うーん。どうしようかなー。でもそういえば……。

「人を操るって具体的にどうやって操ってるんです？」

「操っているところを見た奴は居ねえんだが、操られている奴が村を襲って来るんだ」

「操られている？」

「ああ。十数人のガキどもが田畑を襲いやがるんだ」

「え？ それって単に子供が田畑を荒らしているんじゃないんですか？」

だが俺の率直な疑問に親父は首を振った。

「村の奴らも始めはそう思ったさ。だがそのガキどもをとっちめてやろうと後を追うと、そのガキどもは醜い魔物の元にせっせと盗って来たもんを差し出してやがった。ガキどもが脅されてやっているにしては、田畑を襲う時に魔物はやってこねえ。だったらガキどもも簡単に逃げられるはずだ。だからガキどもは魔物に操られてるんじゃないかって事になったのさ」

「でも、仲間を人質に取られていて、無理やりやらされているかは考えられないんですか？」

「いや、無理やりやらされているにしては、こっちが追い払おうとした時に、必死で抵抗してきやがるんだよ」

なるほど……。子供達が自主的に魔物に加担して略奪していると考えるににくい。確かに操られているっぽいな。

「ガキどもを追い払おうにも、操られているだけと思っちゃ中々手荒なマネは出来ねえが、向こうは操られているだけあって手加減してくるわけじゃねえ。ガキを追い払うのも一苦労で、八方ふさがりよ」

うーん。どうしようかな。これはちょっと即答できないな。

「すみません。もう少し考えて見ます」

「ああ、そうした方がいい。なに依頼なら他にもあるんだ。名を上げる為に魔王とやりたいって奴は多いが、無理する事はねえ」

ギルドを後にする俺達に親父はそう言って忠告してくれた。

ギルドを出た俺達は、飯屋へと向かい飲み物を注文してそれを手に村はずれの林に向かった。残念ながらこの村にはまおうが入るほど大きな飯屋は無いみたいだった。いやそれどころかまおうが入れそうな宿屋も無く、せつかく村に着いたのに野宿をしなければならなさそうだ。

林に着くと俺達以外には人影が無い事を確認し、一本の木にもたれ掛かってさっそくまおうに質問をした。

「まおう。お前の世界に人を操る魔法ってあったか？」

「ううん。そんな魔法はなかったよ」

「じゃあ、この村の魔王ってまおうの仲間じゃないの？」

うーん。確かにまおうの世界には無い魔法を使う奴ならまおうの仲間じゃない。それで間違いないはずなんだが。俺はちょっと引っかかっていた。

「人を操る魔法っていうのが本当だったらな」

「違うって言うの？」

木ではなく、まおうにもたれ掛かっているサフィスが首を傾げている。確かにギルドの親父が言っていた話を聞いている限りでは人を操っているっばい。でも俺には納得できない事があったのだ。

「そんな魔法を使える割にはやっている事がしょぼくないか？」

「しょぼいって？」

「近寄って来た人間を操れるっていうならもう最強だ。大勢の大人を操ればやりたい放題のはずなのに、やっている事と言ったら子供を操って田畑を荒らしているだけなんだぜ？」

「じゃあ、人を操れるっていうのは間違っているの？」

「ああ、それに出来たとしても、操れるのは子供だけとか、何人までとか、なにかしらの制約がある可能性は高いと思う」

「そうかも知れないわね」

「制約付だろうと人を操れる魔法が使えるなら、まおうの仲間じゃないだろうけど、その魔法が間違えならまおうの仲間の可能性が消えた訳じゃない。可能性は低いかも知れないけど、まおうの仲間が沢山こっちに来ていいるとは限らない以上、確認もせず放置する訳にはいかないだろう」

「サイエスありがとう！」

俺の言葉にまおうは抱きついてきたけど、怪力で締め上げられちよつと身体が悲鳴を上げた。

こうして俺達はその魔物の元へと向かう事になったがギルドの依頼は受けないで置いた。なぜかと言えば、人を操る魔法が本場で、俺達も操られかねないなら全力で逃げなければならぬ。一旦依頼を受けた後断ると違約金やら大変なのだ。

俺達は子供達に田畑を荒らされたという農夫に、子供達がどこから来たのかを聞き出してその方向へと進んだ。

言われた道を進むと始めは木々が生い茂り緑に囲まれ、鳥の鳴き声なんかも頻繁に聞こえて来る道だったのが、次第に木々も疎らになり鳥の鳴き声も聞こえなくなってきた。

「どんどん道が険しくなっていくわね」

「ああ、木々も途切れてきているし、荒れ果てた岩山って感じでいかにも魔物の棲家らしい風景だな」

「僕、こんなところ好きじゃないよ」

「まおう、動物とか好きだもんね」

短期間で仲良くなりまおうの趣味なんかも聞き出しているサフィスは、まおうの言葉に相槌を打ち、相変わらずまおうの肩に乗って軽快そうだ。

「でも、もしかしてこの魔王がまおうの仲間だったら、やっぱりまおうと姿は似ているの？」

「もちろんだよ！」

「そっかー。楽しみだなー」

爬虫類好きのサフィスは、まおうみたいなトカゲに似た魔王と遭遇する事を期待しているみたいだ。まったく能天気な奴だな。本当に役に立つのか？ これじゃまおうと仲が良いだけがとりえだろ。

俺達がさらに進むと、まったく草木は無くなり、石ころだらけの痩せた土地が続いていた。そして小高い岩山に登り見下ろすと、それはあった。

「なんだ！？」

それは「村」だった。もちろん、十数人の子供が下に村の田畑を襲ったんだからそいつらが暮らすだけの設備はあるとは考えていたし、小さいながらも村っぽい物があっても不思議じゃない。

しかしそこには、十数人の子供ではなく、数十人の子供達が数件の小屋が立ち並んだ村に暮らしているらしかったのだ。

おいおい、この魔王が人を操れるとしたら、こんなに沢山の人数を従わせる事が出来るって言うのか？　ちよつと甘く見ていたかも……。あれ？　でもあれって……。

「なあ。あれって赤ん坊じゃないのか？」

「あ。本当だ。女の子が赤ん坊を背負ってる」

「女の子もいっぱいだねー」

目を凝らしてみると女の子が背負う赤ん坊は5、6人は居そうだった。どういう事だ？　と俺が首を捻っていると、その村の中で一番大きな小屋から魔物が出てきた。

あれがここの魔王か……。その姿は醜悪の一言に尽きた。体長は俺よりもすこし低いくらいだが、ずんぐりとして重そうで、粘液状のぶよぶよとした身体に数本の触手。間違っても触りたくないといった風貌だった。とてもじゃないけどまおうの仲間とは思えない。

ちっ！　無駄足だったか。しかしこんなにも大勢の子供達が操られているっていうなら、ほっておく訳にもいかないよな……。でも、まおうの仲間じゃないなら、人も操る魔法を使えるっていう確率も高まるんだよな……。

「どうするサイエス？」

俺が首を捻っているとサフィスが無然とした表情で問いかけてきた。あの魔王はどうやら彼女の趣味ではないらしい。

「うーん。どうしようかと考えてはいるんだが……」

と俺がさらに首を捻っていると、信じられない光景が目飛び込んできた。

女の子が背負っていた赤ん坊を魔王の触手に差し出したかと思うと、なんと魔王は赤ん坊を粘液状の身体に押し付けたのだ。そして赤ん坊はどんとその粘液に埋もれていく。

まさか赤ん坊を食べているのか!?

俺の頭は一瞬のうちに焼け付く様に沸騰し、目眩がしそうだった。赤ん坊を食料にするなんて許される事じゃない!!

「突っ込むぞ! あの化け物を殺してやる!!」

「サイエス!」

「待ってよー!」

俺は2人の制止に構わず突っ込んだ。突然の俺の突進に魔法で操られているはずの子供達も反応できず、遮る者も無く一気に化け物の元まで駆け抜けた。

「死ね! 化け物!!」

俺はソードキルを抜き放って振りかぶり化け物に切りかかった。すでに赤ん坊は完全に粘液に取り込まれているが、化け物の身体を切り裂いて助け出せば間に合うかもしれない。

だが振り下ろした剣は化け物にとどかず途中で止まる。

「止めて!!」

と赤ん坊を背負っていた女の子が俺の前に立ち塞がったのだ。

「どけ！」

操られているだけとはいえ今は赤ん坊の命が大事だ。俺はその女の子の襟首を掴んで力任せに横に放り投げた。まおう頼みの戦い方をしていると思われがちな俺だが、これでも村の道場では一番の剣士だったのだ。女の子を片手で吹き飛ばすくらい訳は無い。

だがその間に別の子供がまたも俺と化け物の間に立ち塞がる。くそ！ きりが無い！ と思っていると別の子供が俺に飛び掛ってきた。俺は剣を片手に空いている手で振り払おうとするが、子供達は次々と俺に飛び掛かる。

「こら！ 放せ！ 目を覚ますんだ！」

とはいえ化け物を倒す事を考えれば剣を手放す事は出来ない。片手でなんとか子供達を振り解こうとしたが、十数人の子供に飛び掛られてはさすがに数が多すぎる。遂には地面に倒され、押さえつけられてしまったのだ。

しかしそこにまおうが追いついてきた。高速で動けるまおうは突然出現したかの様に化け物の前に現れたのだ。

「まおう！ 赤ん坊を助け出せ！」

だが化け物の前に子供が立ち塞がっていては、優しいまおうには手も足も出ない。手詰まりか！

「ストームー！」

しかしそこへ、ストーム（暴風）の魔法が魔王とまおうの間に割って入った。やっと駆けつけて来たサフィスが魔法を放ったのだ。子供達はストームに吹き飛ばされたが、体重の重い魔王とまおうは飛ばされない。ナイス、サフィス！これで邪魔者は居なくなつた。

「まおう！ いけ！」

「うん！」

人を傷付けるのは嫌いなまおうだが、今は赤ん坊を助けるのが先決だ。魔王の粘液状の身体から赤ん坊を助け出そうと、その身体に手を伸ばす。だがまたもそこに男の子が割って入り、そして叫んだ。

「ママに酷い事をするな！！！」

その言葉に俺達は固まった。

それからしばらく後、俺達はその村で一番大きな建物の中にいた。

男の子の叫びに固まっている俺達に、魔王はその姿からは想像も出来ない様な美しく落ち着いた声で言った。

「あなた方は何か勘違いをなさっています。みんなも落ち着きなさい」

そして話があるところの小屋に俺達を誘ったのだ。あっけにとられた俺達は、顔を見合わせたが、状況についていけず魔王の言葉に素直に従う事にした。

まおうも窮屈そうになんとか入り口をくぐり、みんな小屋に入って床に座ると、俺達の正面に座った魔王は口を開いた。

「あなた達はここを魔物に操られた子供達が住む村と思っているようですが、それは違います。もっともそう思われているのを知っていて、都合が良いと放置していた私達にも問題はあるのですが」

「じゃあ、この村はなんだと言うんですか？」

俺の問いかけに魔王は静かに口を開いた。

「ここは人間達に捨てられた子供達が住む村です」

第28話

子供達が住む村の小屋で、驚く俺達に魔王の話は続いていた。

「私がここに来たのはこの世界の時間で、もう14年前になります」

14年か……かなり長い時間だよな。やっぱり待っていたらいつか自動的に元の世界に戻れるとかは無さそうだな。そもそもまおうと同じふうにくっちの世界にやって来たのか？

「もしかして、ある日いきなり深い霧に包まれたかと思ったら、こっちの世界に来ていたとかですか？」

「ええ。そうです。ご存知なのですか？」

魔王は驚いた様に粘液状の身体をブルブルと振るわせた。やっぱりそうか……。共通点があるって事は同じ理由でこっちの世界に連れて来られたって事なんだろうな……。

「はい。実はこのまおうも同じ様にしてこっちの世界に連れて来られたんです」

まおうに視線を向けながらの俺の言葉に、魔王はまたも身体をブルブルと震わせたが、表情は分からない。驚いているらしい事は分かるのだが。

「そうでしたか……。私以外にも同じ境遇の者が居たのですね」

「はい。あ、でも、今はこの話をする時じゃないですね。話を進め

てください。話の腰を折ってすみませんでした」

「分かりました。それでは話を続けさせていただきます。こっちの世界に來た私は、霧が晴れるとまわりの風景が一変しているのに気付きました。もちろんすぐに異世界に迷い込んだと考えた訳ではありませんが、見た事も無い植物が生い茂り、動物が駆けていました。夢でも見ているのかとも思いましたが、いっこうに夢から覚める事はありませんでした。そしてここが自分の元居た世界ではないと認めざる得なかったのです」

「はい」

「幸い……と言って良いのか分かりませんが、私は水と日の光さえあれば生きていけます。その時はここよりはるか離れた川辺に居て、水には不自由しませんでした。ですが……異世界で生き延びる手立てを得てみたものの、改めて自分の境遇を思えば絶望だけです。誰も居ない世界で1人残されてどうすれば良いのでしょうか？ その時はまだこちらの世界の人間と遭遇していなかった事もあります……。もっとも、もしあの時遭遇していたら多分私は殺されていたでしょう」

うーん。確かに突然この姿の魔王に遭遇したら、俺だって反射的に嫌悪感を抱いて敵と判断してしまうかも知れないな……。

「そして私は干からびて死ぬ心算で、水の無いこの場所にやって來たのです。そしてここで赤ん坊に……私の事を「ママ」と呼んだあの男の子と出会ったのです」

ああ。あの男の子か。結構気が強そうな感じで、俺の事を睨んでいたな。

「私がこの場所に着くと、何かの泣き声が聞こえてきました。そして声がする方に行くと、あの子が布に包まれて地面に捨てられていたのです。もっともその時の私は捨てられているのだとは思いますが、ありませんでしたけど。私が赤ん坊に恐る恐る手を伸ばすと、あの子は私の手を掴みそして言ったのです「ママ」と」

じゃあ、この魔王はこっちの世界に来てからこっちの言葉を覚えたんじゃなくて、初めから言葉が通じたって事か。まあうも以前出会った魔王もこっちの世界じゃ言葉が通じなかったのに、こういうのを奇跡とでも言うのかな。

「私はこの子を死なせる訳にはいかないと思いました。ですが死ぬ心算でここに来た私自身がすでに干からび始め、命が危うくなっていたのです。元居た川辺に戻るまでは持ちそうにありませんでした。私は必死で水を捜し求め、やっとのおもいでこの付近に僅かに水が染み出ている場所を見つけ命を繋いだのです」

「でも、赤ん坊はどうしたんですか？ 赤ん坊は水だけじゃ生きられないと思いますけど」

「私の世界では大人は水と日の光だけで生きられますが、赤ん坊にはまだその機能は備わっておりません。ですから大人が赤ん坊を身体の中に取り込み栄養を与えるのです。私には他に方法はありませんでした。そして幸いな事に上手く行き、あの子を死なせずにすんだのです」

なるほど、という事は俺が見た赤ん坊が食べられると思った光景は、この魔王が赤ん坊に食事をさせている所だったのか。しかし奇跡のオンパレードだな。この人にとってはこっちの世界に連れて来

られたのは不幸だったかも知れないけど、あの男の子にとってはまさに天の助けだったんだろうな。」

「それで他の子供達は？」

「取り合えず赤ん坊の命を助ける事が出来たと安心していたのですが、しばらくすると、また赤ん坊の泣き声が聞こえてきたのです。そしてまたしばらくするとまた1人……。始めはこの世界では赤ん坊を放置するのが普通なのかとまで考えましたが、やはりどう考えてもそれでは赤ん坊が死んでしまいます」

「そりゃまあ、そうだろうな……。どんなに世界が変わろうと、生まれてきた赤ん坊をワザと殺す生き物は居ないだろう。こっちの世界だって虫や魚じゃあるまいし、生まれてきた赤ん坊を放置する動物なんてほとんど居ないはずだ。」

「私は、いつも赤ん坊が置いていかれる場所を見張る事にしました。そしてそこにやって来た、赤ん坊を連れた2人のこちらの人間の会話を聞き、貧しい村で口減らしの為に赤ん坊を捨てに来ているのだと知ったのです」

「口減らしで赤ん坊をか……。普通口減らしと言えば年寄りって聞いたけど、いや、それでも悪いんだが、まさか生まれたばかりの赤ん坊を捨てるとは……。もしかすると、生まれたばかりで愛情が深くなる前に捨ててしまえって事かも知れないけど。」

「まったく酷い話ね！ そんな奴らとつちめてやれば良かったのよ！」

今まで大人しく話を聞いていたサフィスが、憤慨の声を上げた。

まあ俺もまったくの同感だ。そんな奴らぶん殴ってでも赤ん坊を連れて帰らせれば良いんだ。しかし魔王はサフィスの声に粘液状の身体をねちゃねちゃと鳴らしながら首を振った。

「私もそうは思いました。しかし赤ん坊の母親らしき人間が、一度は地面に置いた赤ん坊をやっぱり捨てられないと駆け寄ろうとし、父親らしき人間が泣き叫ぶ母親を引きずる様にして連れ去っていく光景を見た時、私は何も言えませんでした。それ程の想いをしてもし捨てなければならぬなら、それ程の状況なのでしょう。たとえば今私が出て行って赤ん坊を連れて帰らせても、それでは一家ともども飢え死にするかも知れません。もしかしたら別の場所に捨てるかも知れない。それでは意味がありません。私には黙って赤ん坊を引き取るしか出来なかったのです」

「そうですか……」

なんて言ったら良いのか分からず、俺にはそう言うしかなかった。しかしこの魔王むちゃくちゃ良い人だよな。俺だったら相手の状況まで考えず、泣き叫ぶくらいなら連れて帰れて怒鳴っていただろう。しかし……。

「今の話だと、赤ん坊を捨てに来ているのはこの下の村って訳じゃないですか。下の村は口減らしが必要なほど貧しくは見えませんでした」

「はい。ここに赤ん坊を捨てに来ている人達は、罪悪感からかかなり遠く離れた村から捨てに来ている様なのです。赤ん坊を捨てた場所が目につくところに有ると耐えられないのでしょうか」

「それじゃ、どうして下の村を襲っているの？」

まおうが控えめに口を挟んできた。まおうにしてみれば、じゃあ下の村の人が悪い訳じゃないのに、どうして襲ったりするの？　って事なんだろう。

「食べる物が足りないからです。下の村の人達にすれば八つ当たり……。いえ、とぼっちを受けているだけと思われるでしょうけど、子供達を飢えさせる訳にはいけないのです」

「やはり、自給自足は難しいですか？」

「はい。もうお察しとは思いますが、子供達の数も増え、大きくなった子もいます。私からの栄養だけでは全然足りなくなったのです。私には赤ん坊とまだ小さい子供達だけで精一杯です」

「ですが……。この痩せた土地では駄目でも、他の場所に移れば……」

だがやはり魔王は首を振った。

「ここにはまだ赤ん坊が捨てられ続けています。どうやらここに赤ん坊を捨てるのは一つの村ばかりでは無いらしいのです。年に……。数人は捨てられています。その赤ん坊達を助ける事を考えればそう遠くには行けません。ここから通える範囲内で食料を集めるには限度があるのです」

「いつその事、下の村に助けを求めているのはどうですか？」

「はい。それも考えました。ですが、2つ問題があります。1つは子供達がそれでは私と離れ離れになると考えて嫌がっている事、そ

してもう1つは……」

「もう一つは？」

「下の村の人達も、無限に子供を受け入れる事は無いでしょう。事情を知れば間違いない、ここに赤ん坊を捨てるのを止めさせるはず……。ですが先ほども言ったとおり、それでは別の場所に赤ん坊を捨てるだけなのです。赤ん坊を助ける為には、ここが赤ん坊を捨てる場所であればなりません」

「ですけど、いつまでも下の村を襲うなんて事を続けられないでしょう。今はまだあなたの事を恐れているので、近づいては来ないですが……。下の村が耐えられないほど襲い続けられればさすがに黙ってはいないでしょう」

「それは分かっています。私も下の村に住む人達をそこまで苦しめたいと思っている訳ではないのです。ただ他に手立てが無い為なのです。どうにかしてここで自給自足が出来る様になれば良いのですが……」

「この土地で自給自足するって何か方法があるんですか？」

「はい。私には分かるのですが、ここは水が無いだけで土自体が痩せている訳ではありません。水さえ引く事が出来れば十分畑として機能するでしょう」

「水は無いのに土地は肥えているんですか？」

「はい。普通水の無いところの土地は痩せているものですが、昔はここにも水が来ていたと考えます」

「じゃあ、水さえ引けばまた土地が蘇るという事ですか？」

「そうです。しかもその方法も分かっています」

「方法が分かっている？」

「そうです。ここからさらに登った所に谷間があり、その谷間を大きな岩が塞いでます。どうやら昔はその岩は無く、谷間に川が流れここまで水が引かれていたと考えられます。おそらく地震か大雨か……とにかくなんらかの天災によってその岩が水の流れを堰き止め、長い時間をかけて川の流れも変わってしまったのだと思います」

「じゃあ、その岩をどうにかすれば水がまたここまで来るんですか？」

「昔とは川筋が変わっていますので、こちらに水呼び込む為には多少土を掘って道筋を作ってあげなくてはならないでしょうけど、大丈夫なはずです」

「それなのに出来ていないという事は、やっぱりその岩をどけるのが困難という事ですか？」

「はい。お察しの通りです。とても大きく動かせそうにありません。子供達も少しずつでも岩を割ろうと、何とか運べる大きさの岩を崖の上まで運んで、上から落したりもしているのですが、そんな方法では何年かかる事か……。やらぬよりはマシと続けてはいますけど」

「なるほど……。しかし今更ですが、どうして俺達にここまで詳し

く話してくれるんです？ 俺達はあなたを倒しに来たというのに」

「あなた方は信用できると思ったからです」

「信用ですか？ しかし俺達何か信用される様な事をしましたっけ？」

「先ほど戦った時……少し乱暴ではありましたが、あなた達は子供達をなるべく傷つけまいとしていました。ですからお話しても良いと考えたのです」

「なるほど。信用してくれてありがとうございます。何か力になれるかも知れません。遠慮なく言ってください。もしかしたら、まおうならその岩を何とか出来るかも知れません。やってくれるよな？ まおう」

「もちろんだよ！」

「ですが……。確かにその人は身体も大きくて力も強そうですが、それだけでどうにかなりそうな岩ではないのです」

魔王はねちゃりと首を傾げ、あまり乗り気じゃなさそうだけど、まおうにはさっきは見せなかった手から放つ火炎がある。もしかしたらその岩も焼き砕く事が出来るかもしれない。

「いえ、とにかく一度見せて貰えませんか？ もしかしたら何か方法が見つかるかも知れないし」

こうして俺達は、魔王と子供達に連れられ、その大岩へと向かったのだった。

第29話

これは……。さすがにちょっと考えが甘かったか？

それが谷を塞いでいるという大岩のところ案内され、それを見た感想だった。

その大岩は直径10メートルはあろうかと言う巨大な物で、いくらまおうでもそう簡単には砕けそうに無かったのだ。

「どうです？ どうにかなりそうですか？」

大岩と対面し内心途方に暮れていた俺に、魔王から微かに期待を含んだ声がかけられた。確かに自信ありげに連れてきてもらったし期待されるのも当然か。こうなったらとにかく後には引けない。取り合えずやるだけやってみよう。

「まおうあの岩に火炎をぶつけてみてくれないか？」

「うん。分かった！」

と、まおうは、俺の言葉に素直に頷いてくれ、手から火炎を打ち出し大岩に立て続けにぶつけた。魔王の手から放たれた火の玉は次々に大岩へとぶつかり、ぶつかった瞬間、バンツという音をたて四散する。だがそれは硬い岩肌を焼け爛れさせたものの、岩が砕けたかという表情を僅かに削っただけだった。

駄目か……。

俺は失敗だと落胆したが、しかし意外にも粘液状の身体を持つ魔王は、その身体をブルブルと震わせ感嘆の声を上げたのだ。

「なるほど。炎で岩の表面を焼く事で脆くさせるといふ事ですね。この場所に子供達が崖の上に運んだ岩を落とせば、効率よく大岩を砕く事が出来そうです」

「そっそうなんですよ!」

そうだったのか。熱を加えると岩が脆くなるとは知らなかった。しかしこの魔王は良くそんな事を知っていたな。そういえば、土地が肥えている事は私には分かるとか言っていたし、もしかしたら土や岩の状態を感知する能力を持っているのかも。

だがそうと分かればこっちのものだ。

「よし! じゃあ、焼いた場所に崖の上から落とす岩をぶつけ易い様に、俺達も崖の上に行ってそこから大岩に向けて炎で焼こう」

「うん。分かった!」

「じゃあ、まおう肩車して!」

おい。サフィス……。さっきちょっと役になったかと思ったらそれか。まああのまおうが喜んで肩車してやってるんだから俺が文句を言っても仕方ないんだが。

だがすると魔王と一緒にしてきた数人の村の子供達が、指を咥えまさに絵に描いた様な羨ましげな表情で、まおうに肩車されているサフィスを見上げた。

「どうした? お前も肩車して欲しいのか?」

俺が子供達に声をかけると、子供達はびっくりした表情となり首を振った。だが多分村に住む自分と同じ子供か魔王としか喋った事が無くて、人見知りしているだけだろう。

俺はまおうに肩車されているサフィスを見上げ、声をかけた。

「おい。サフィス降りろ！」

「えー。どうしてよ？」

サフィスはまおうの肩の上で口を尖らせ、不満そうに声を上げた。

「変わりに子供達を肩車させてやるんだよ」

子供達と言われているサフィスも文句は言えず、渋々といった感じでまおうから降り、まおうは子供を1人ずつ背負ってやった。

「落ちない様にちゃんと捕まって気をつけてね」

まおうが肩に乗る子供の足を手で押さえてやりながらそう言うとき、子供達は「うん」と素直に頷いて、まおうの大きな頭にしがみ付いた。さすがあの魔王と物心付いた時から暮らしているだけあって、外見で怖がったりとかはなさそうだ。まおうと仲良くしてくれたら、まおうも喜ぶだろう。

崖の上に着くと、子供達が運んできたらしい俺の身長くらいありそうな大きな岩が、何個か置いてあった。結構でかい岩を頑張って運んだんだな。いくら子供でも数十人も居れば頑張ればこれくらいの事は出来るという事か。たいしたものだ。

「まおう。じゃあこっから頼む」

崖から大岩を見下ろしながらまおうに言うと、まおうは大岩目掛け火炎を連射する。またもや火炎は音をたて大岩にぶつかり大岩を焼く。そして十分大岩を焼いた後、子供達が崖の上まで運んであった岩をみんなで押して、その焼いた場所目掛けて落とした。

ゴガアンッ！！

岩はうまく大岩の焼いた部分に直撃し砕けたが、俺には大岩の方は僅かばかりしか割れていない様に見えた。労力に対してあまりにも成果が少なすぎる。だが魔王と子供達は歓喜の声を上げる。

「おお。一度落としただけでこれほど割れるとは！」

「いつもの倍以上割れてるよね！」

おいおい。これでいつもよりずっと割れているって？　どれだけ地道な作業をしたんだよ。こんなペースじゃ1年以上はかかるぞ。しかし、まあ当事者達が喜んでるのに水をさす事もないか。

「これを次々と繰り返せば良いんですか？」

「いえ。下に割れた岩の破片があつては次に落とす岩の邪魔になります。一度破片を取り除かないと」

「なるほど……」

とはいうものの、地道過ぎるぞ。岩を落として下を片付けてまた落としてってやってるのか。うーん。だが郷に入っては郷に従えだ。

「じゃあ、下に降りて岩の破片を取り除くか」
と俺達はまた崖の下へと向かう。

こうしてあまりの面倒くささに、心が萎えそうになりながらも、俺達はまた崖の下へと降り、俺は岩の破片を取り除くべくそれを手に取った。だがそのとたん、

「うわっちい！」

と取り落としてしまったのだ。

「ちよっ。むちゃくちゃ熱いぞ」

「そりゃそうだよ。炎で焼いたんだもん」

「まったくおっちょこちよいね」

まおうとサフィスが呆れた様子で俺に視線を向けてくる。くそ！
あまりの面倒くささに思考が停止していたぜ。

「サフィス。魔法で岩と破片を冷やしてくれ」

俺が大岩を指差しながらそう言うと、サフィスは、

「はい」

と返事をし杖を大岩に向けて魔法を放つ。

「ブリザード《吹雪》！！」

サフィスの魔法で焼けていた大岩とその破片はたちまち冷えていく。よしよし、これで触れるぞ。と思っていると、またも魔王がブルブルと身体を震わせ感嘆の声を上げる。

「おお。さらに岩が脆くなりました。これならばもっと大きく削れそうです」

「え？ そうなんですか？」

「はい。間違いなくさつきよりもさらに崩れやすくなっているはずですよ」

そうか……。熱くしたり冷ましたりすると岩って崩れやすくなるんだ。知らなかったな。だが、そうと分かればこっちのものだ。

「よし！ とっとと片付けよう。そして今度は、焼くのと冷やすのを何度か繰り返してから岩を落とすんだ」

「はい」

「りょうかーい」

こうして俺達は急いで破片を片付け、また崖の上に登った。また登るのかと思うと足が重くなりそうだが、作業がはかどるかも知れないと思うと、みんなの足取りは軽かった。そして上につくと早速指示をだす。

「まおうが十分岩を焼いたら、今度はまたサフィスは魔法で冷やして、さらにそれを繰り返してくれ。多分繰り返す方が岩が崩れやすくなると思う」

「うん。分かった！」

「はい」

俺の言葉に素直に頷いた2人は、それぞれ手と杖を大岩に向け火

炎と魔法を放つ。

「えい！ えい！ えい！」

「ブリザード！ ブリザード！ ブリザード！」

まおうが連続で火炎を放ち、その後にサフィスが立て続けに魔法を放つ。

俺と魔王と子供達はその間に崖から落とす岩の準備を行う。そしてまおうとサフィスの加熱と冷却が十分と思われたので、岩を落とす。

「いくぞー！ せーのー！」

掛け声と共に岩は大岩目掛けて落ち、そして……。

グシャッ！！

と音をたて、なんと落とした岩は碎けず大岩にめり込んでしまったのだ。どうやら大岩の10分の1は一気に碎けたか。

「やったー！！」

「すげー割れた！」

子供達は歓声を上げたが、俺は思わず首を捻った。魔王に視線を向けると魔王も子供達の様には素直に喜んでいないみたいだ。やっぱり、めり込んでしまったのはあんまり良くないか？

「どうしましょう？」

俺が魔王に問いかけると、魔王は少し考えている様でネチャリと首を捻りしばらくしてから口を開いた。

「岩が大岩にめり込んでしまっているのは良いとは言えませんが、今、大岩がかなり脆くなっているのは確かですし、もう一つ同じところに落としてみましょう。それで大岩がさらに砕けて一緒に下に落ちるかも知れません。同じところに落とせば、岩が2つともめり込むなんて事も無いでしょう」

「分かりました」

俺達はさらに岩を崖下に向けて落とすと、その岩はさつき落とした岩の真上に落ち、その衝撃で大岩がさらに砕ける。そして落とした岩はごろりと転がり落ち、始めに落とした岩も続けて転がり落ちた。

「よし！」

今度こそは俺も素直に喜びの声をあげ、魔王を見ると、魔王もネチャネチャと頷いている。

崖の上に準備している岩も尽きかけているし、下の岩の破片も片付けないといけないし、今日はここまでだが、この分だと1ヶ月もかからず破片を含めて大岩は綺麗に片付けられそうだ。

「いけそうですね」

「あなた方のおかげです。本当にありがとうございます」

俺が魔王に声をかけると魔王は丁寧にお辞儀した。しかしお辞儀とかっていう作法はこっちの来てから覚えたのか？ それとも魔王の世界にもお辞儀があったのか？ ふと疑問に思ったがまあどうで

もいいか。

「これで大岩の方は時間の問題です。後は、川の水を引き込む事です
ね」

「はい。ですがそれは難しくありません。元々川はこちらに流れて
いたのですから、少し水呼び込めばすぐに流れは出来るでしょう」

「なるほど」

この分だと、水を引いてここに畑を作るって言うのは上手いき
そうだな。だが魔王と子供達がここで暮らすにはまだ問題がある。
この事については魔王や子供達はさすがに気付いていないとい
うか、そもそも知らない事なんだろう。

こうなったら乗りがかった船だ。俺が何とかするしかないな。そ
う思った俺は早速それに取り掛かる事にしたのだった。

第30話

大岩を破壊するのは、まおうとサフィスに任せるとして、俺は残った大問題に取り掛かる為魔王と2人で話す事にした。

一番初めに通された小屋で、魔王と向き合って座った俺は早速切り出した。

「ここで貴女を除いたら、誰がこの村で一番影響力がありますか？」

「私を除いてですか？」

「ええ。貴女意外で、誰だったら他の子供達がいう事を聞きます？」

「それはアマデオと思います。今まで岩を壊すのも下の村を襲うのもすべてアマデオが先頭に立っていましたから、ですがそれがどうかしましたか？」

「これからずっとここに住み続け、農作物を栽培するならもう立派な村です。他の人間とかかわらずに暮らし続けるなんて出来ません。その時に人間の代表が必要です」

どれだけこの子供達から慕われていようが、他の人間からすれば貴女はただの魔物ではない。言外のこの意味を察しているだろうに、魔王は気を悪くした様子も無く、にちゃりと音を立てて粘液状の首を縦に振って頷いた。

「分かりました。確かに人間の代表が必要ですね」

「そのアマデオっていうのはどの子ですか？」

「私が一番初めに拾った子供。貴方達に最後に立ち塞がった子供です」

そうか……。あの子か。俺は思わずなるほど、と頷いた。

「分かりました。今そのアマデオはどこに居ますか？」

「みんなと一緒に崖の上に岩を運ぶ作業をしているはずですので、そこに居ると思います」

「ありがとうございます。ではちよつとそのアマデオをお借りしますね」

「はい。よろしく願います」

俺は、では。と魔王に頭を下げ小屋を出るとみんなが作業をしている崖へと向かった。今後必要な事を考えながら歩いていると、途中何人もの子供が俺を追い抜き駆けて行く。大岩を砕く目処がついてみんな張り切っているみたいだ。

だが崖下の大岩の元に着いたものそこには誰も居なかった。そうかやるんなら一気にと、今はみんな崖の上から落とす岩を集める作業に集中しているのか。考え事をしながら歩いていた所為で、こんな簡単な事に気付かないとは。

しょうがねえな。と改めて崖の上を目指した。するとまた後ろから走ってくる子供達に何度も追い抜かれた。考え事に気を取られず子供達がどっちに向かって走っているかちゃんと見てれば、無駄

足を踏まずに済んでいたか……。

無駄に遠回りしながらもやっと崖の上につくと、確かに俺達の前に立ち塞がった子供が居て、みんなに指示を与えながらも率先して働いていた。あれがアマデオか。

アマデオは黒髪を短く切り、顔つきも子供ながら精悍なものを感じさせた。まあ、こんなところでずっと厳しい生活をしていたんだ。普通の村の子供達とは比べ物にならないか。

だけど、それでも普通の子供達に比べ圧倒的に劣っているところがある。今後の為にもそれをちゃんと理解させてやらないとな。

丸太を下に敷いた岩を数人の子供が押し、そしてさらに別の数人が岩が通過した後の丸太を回収し、急いで岩の前に改めて敷きなおす。地道な作業だがまあ他に手は無いか。

アマデオに近づくと、向こうも俺に気付いたらしく、岩を押していた手を止めた。それを合図に岩を押していた他の子供達も手を止める。そしてアマデオは子供らしからぬ、にやっとした男っぽい笑みを返してきた。

「あんた達のおかげで大岩もどうにかなりそうだ。助かったよ」

アマデオなりに精一杯感謝の気持ちを表しているらしいが、子供が大人にいう台詞じゃない。外の世界と係わっていくなら、ここら辺もどうにかしないと。と思わず苦笑した。

「ちょっといいか？ 話があるんだ」

「ああ、いいよ」

アマデオは、そういうと振り返って残る子供達に指示を与え、そして俺の元にやってくる。俺達はそこから少し離れたところにある岩陰に入った。

「お前、あの魔王と仲間達は大切か？」

「魔王じゃねえよ。ママだ！」

アマデオはさっきまでの笑顔が嘘の様に俺を睨んでくる。うーん。沸点の低い奴だな。だがまあ子供達の大將ってのは、こんな感じの乱暴者っぽい奴がなってしまうのは仕方がないのかな。とにかくこいつにしっかりと貰わないと仕方が無い。

「ああ、すまん。そのママと仲間は大事か？」

「当たり前だろ」

と言いながら俺を睨み続けている。根に持つタイプか？ まあそれ程あの魔王を慕っているんだろう。なにせあの魔王が居なければ、ここの子供達は全員死んでいたんだからな。

「分かった。そのママと仲間を守る為にお前にやって欲しい、いや、お前がやらなくちゃいけない事がある。やれるか？」

「ママとみんなを守る為だったら、強盗だろうが人殺しだろうがなんだってやってやるさ」

俺の言葉にアマデオは即座に、にやっと笑い答えた。物騒な奴だな……。さすがずっと外界と離れて暮らしていただけあって常識が

無い。だが俺が、

「お前字は読めるか？」

と言ったとたん、アマデオの顔が陰しくなる。まあ予想通りか。

「お前、俺を馬鹿にしているのか？」

今にも飛び掛りそうな形相で、怒りを込めた低い声を出すアマデオだったが、冒険者で村一番の使い手だった俺にとっては、まあ可愛いもんだ。

「別に馬鹿にしている訳じゃない。だがママと仲間を守る為には必要だ。覚えろ」

「何でそんなもんが必要なんだよ！ そんなもん知らなくても仲間は俺が守ってみせる！」

「いや、それじゃ絶対にママと仲間は守れない。お前だって自分が軍隊に勝てるほど強いと思ってる訳じゃないだろ？」

「軍隊……。どっとうして軍隊なんかが来るんだよ！」

一瞬ひるんだアマデオだったが、ただの脅しと思ったのか、またも俺を睨みつける。

「お前達はここを自分達のもんだと思っていてるみたいだが、荒れ果てているからほって置かれてるだけで、実際は誰かの土地なんだよ。誰の土地でもなければ国の土地さ。そこに勝手に村を作ってそれが知られば、軍隊が攻めてくる。当たり前前の事だ」

「嘘だ！ だって俺達がずっと住んで居たんだぞ！ 今まで何も言

って来なかったじゃないか！」

「だからそれはここが荒れ果ててたからだって！ お前達が苦勞してここに水を引き、農作物が作れる様になれば、土地の所有者はお前達に感謝しながら、お前達を追い出すさ」

「じゃあ、俺達がやっている事は無駄っていうのか！？」

アマデオは齒軋りし、拳を強く握り締めている。今までの努力が水の泡どころか、その成果が他人の物になると聞いてよほど無念なんだろう。だがそうさせない方法がある事を教えてやらなくてはならない。

「いや、無駄じゃない。無駄にしない為にもお前は色々な事を勉強しなければいけない」

「でも……勉強なんてやった事ないし……」

「ママと仲間を守りたくないのか！ お前はみんなを守るんだろ！」

「本当に、俺が勉強すればみんなを守れるんだな？」

「ああ、嫌いとか苦手とか言っている場合じゃない。みんなの為にやらなくちゃいけないんだ」

「分かったよ……。それで何をやればよいんだ？ 字を覚えるのか？」

「よし！ まずは文字からだが、取りあえずは明日までに自分の名前が書ける様になればいい。出来るか？」

「出来るかって言われても、自分の名前なんて書いたことないし……出来るかどうか分からないよ」

「ああ、そうか。すまん。まあ名前くらいなら一晩あれば大丈夫だ。取り合えずここは他の子供達に任せて小屋に戻ろう」

「ああ、分かった」

アマデオは一旦みんなのところに戻ると、後の指示を出した俺のところに戻ってきた。そして2人で小屋へと向かう。そして手本にアマデオの名前を紙に書いてやり、明日までに手本を見なくても書ける様にしておけと言い残し、俺は小屋を後にした。

さーてと。これで第一段階は完了だな。問題は明日か。今まで運よくかなり稼げたから、多分金は足りると思うんだが……。まあこんな荒地ただ同然のはずだ。大丈夫だろう。っていうか大丈夫と信じるしかない。

翌朝、俺はアマデオを連れて下の村へと向かう。その道すがら隣を歩くアマデオに向かって話しかけた。

「下の村の人達って、お前の顔を知っているのか？」

「村を襲った時に、多分見られていると思う」

「そうか……それはちょっと不味いな」

「どうしたら良い？」

「うーん。まあ今のお前はボロボロの服を着ているし顔も泥だらけだ。村を襲った時もそうだったんだろ？　綺麗な服に着替えて顔も洗ったら多分気付かれないだろう」

「今さらつと失礼な事を言わなかったか？」

「気のせいだ。気にするな」

取り合えず村に入る時アマデオには下を向いて顔を見せない様にさせ、まず一番初めに、襟にまで刺繍が施されたいかにも金持ちのお坊ちゃん風な服を手に入れて着替えさせた。当然顔も洗わせた。

「なんだこの格好。動き難くてしょうがないな」

「仕方が無いだろ。これからする事には必要なんだよ」

「服なんてなんだって関係ないだろ」

「世間では服装で人を判断するんだ。泥だらけでボロボロの服じゃ誰も相手にしてくれないんだ」

「ちっ！　人は見かけじゃないっていうのに」

アマデオはまだぶつぶつ言っているが、俺は構わず次の目的地である村の役場を目指した。そしてあの子供達の村の土地の所有者を聞き出す。当然そこに村を作る予定なのは隠してだ。

「ああ、その土地だったらベットーニさんの土地じゃな。もっとも持っていても何の役にも立たないのでずっと売りに出しているそうじゃ。もっとも何の役にたたんのじゃから当たり前じゃが、買い手が

全然つかん。持っていれば固定資産税もかかるし、だったら村に寄付すればよいのに、さすがにただで手放すのは嫌らしい」

役場の爺さんにそう教えられた俺達は、そのベットーニ氏の家の場所も聞き出し、今度はそのベットーニ氏の元へと向かう。

「ずっと売りに出していたなら都合がいい。安く買い叩けそうだ」

「でも、そんなところを急に買いたいと言ったら、どうしてそんな土地を欲しがるのがかって疑われない？」

お？ それに気付くか。今まで勉強してこなかったから文字すら書けないだけで、結構頭は良いのかも知れないな。

「なあに、その為にお前にそんな格好をさせているんだ。今からお前は大金持ちの貴族のお坊ちゃんだ」

「俺が貴族のお坊ちゃん？」

「そうだ。正直俺もあんな荒地を疑われずに買う上手い理由が思いつかなかったんだ。だから強引だが貴族のお坊ちゃんの気まぐれで買うって事にする。俺はお前のお守り役になって、横であんな荒地をかうのは金の無駄だって言い続けるから、お前は精々駄々をこねてくれ。理由はもう「とにかく欲しくなった」でいいから」

「難しい注文だな。本当の俺とはまったくの真逆じゃないか」

アマデオはそう言ってうんざりした表情で肩をすくめた。

第31話

しばらく歩いた俺達は、役場の爺さんに教えてもらったベットーニ氏の屋敷に到着した。

門の外から眺めると、ベットーニ氏の屋敷は広い事は広いのだが、長い間修繕もされていないのか全体的に廃れた雰囲気がある。

いかにも昔は金を持っていたが、今は落ちぶれました。っていう感じだな。もしかしたら川の上流の、俺達が今から買おうとしている土地が荒れ果てたのと同関係あるのかも。

「さて、じゃあ入るか。あ、そうだ、一応自分の事は「俺」じゃなくて「僕」って呼んでおけよ。そこまで気をつけなくても良いかもしれないけど、まあ、念のためだ」

「僕、ねー。なんかこっぱずかしくなってくるな」

「ちよつとの間だけなんだから、それくらい我慢しろ。じゃあ行くぞ」

門には呼び鈴らしきものも無いので、勝手に門を開けて敷地内に入った俺とアマデオは、母屋の玄関へと向かう。そこで丸い金属で出来たノックハンドルがあったので、それでドアを叩く。

しばらくすると中から足音が近づいてくる音が聞こえ、その後しわがれた老婦人の声が聞こえてきた。

「どちら様ですか？」

「実は、この屋敷の主であるベットーニ氏がお持ちの川の上流にある土地を購入させて頂きたいと考え、伺わせて頂きました」

「……少々お待ち下さい」

俺の返答に老婦人はそう答え、足音が遠ざかっていく。ベットーニ氏に対応を聞きに行ったんだろう。まあ大丈夫だとは思うけど。

そしてしばらくまっっていると案の定、お入り下さい、という声と共に扉は開いた。

「失礼します」

と扉を潜り、屋敷内に入った瞬間脇にどいて「坊ちゃま」を通す。貴族の子弟のお守り役として正しい動作か俺にも分からないが、なんとなくそれっぽい雰囲気を出す為にやってみた。

すると老婦人は、とにかくこの子供が何やら偉い身分だとは認識した様子で、俺にはなくアマデオに対して、どうぞこちらへ、と先導して歩き始めた。

しかし扉を挟んでいて姿が見えなかった時は、歳を取った召使と違ってたけど、服装から見るとどうやらこの屋敷の奥方らしい。この規模の屋敷で召使が居ないとなると、そうとう落ちぶれているな。

「御客人をお連れ致しました」

老婦人に案内され居間に入った俺達は、白髪頭で痩せぎすの老人と対面した。この人がベットーニ氏に間違いないだろう。ベットーニはソファアーにも座らず俺達を待ち構えていた。

あの誰も買い手が付かなかった土地を買いたいというのが現れ、落ち着かなかったのだらう。俺達にソファ―に座るように促し、俺達が座ったのを確認してからベットーニ氏も大きなテーブルを挟んだ対面に腰を下ろした。

「あの土地を買いたいと、仰っているそうすな」

「はい、そうなのです」

「あの土地は、私の先々代の時は肥えた土地で作物も沢山取れたのです……。私も小さい頃の微かな記憶で覚えています……」

ベットーニ氏は過去を懐かしむように遠い目をしていった。

「それがその後しばらくした後、強い嵐となりその大雨で川が氾濫し鉄砲水が発生しました。そして嵐が通り過ぎたとき、鉄砲水でどこからか流されたのか、それとも崖の側面にでも埋まっていたのを鉄砲水で土が洗い流され下に落ちたのか、ともかく大きな岩で土地を潤わせていた川がせき止められてしまったのです。そして水の無い土地は荒れ果て、あのような何の役に立たない土地に……」

「そうですか……。それは災難でしたね」

俺が同情する様に言うと、ベットーニ氏ははっとした表情をした後苦笑した。どうやら、つい愚痴をこぼしてしまったのを恥じているようだ。

「それはそうと、その荒れ果てた土地をどうして買いたいなどと。勿論ありがたい話ですが、私が言うのもなんですが、あの土地が何の役に立つというのです？」

うーん。過去を懐かしんだりそれを恥じたり、殊勝な態度を取ったかと思えば、意外と抜け目無いな。その何の役に立つかを聞き出せば、土地の価値が上がる事もありえる。もし地下に何か資源が埋まっているというなら、俺達の申し出を断り自分で開発する事も考えられるだろう。

やはりここは「アマデオおぼっちゃま」の出番か。俺はテーブルの下でコツンとアマデオの足を蹴って合図をする。

「僕なんとなくあの場所の風景が気に入ったから欲しくなっちゃったんだ」

棒読みのアマデオの台詞に、もう少しくらい上手く演技出来ないのか、これじゃばれるじゃないか。と冷や汗をかいたが、どうやらベットーニ氏は演技だと気付かなかったようだ。しかしそれでも、子供が「なんとなく」で土地を欲しいとは、と怪訝そうな顔をしている。

「すみません。こちらはある王国の名のある貴族の若君なのですが、御遊学先から帰国する途中、偶然通りかかったあの土地の風景をとっても気に入り……。是が非でも自分の物にしたいと仰るのです」

「それは……風景を気に入って頂けたとは光栄ですが、風景を見るだけなら別に購入して頂かなくとも、ご自由にご覧下され。立ち入るななどと野暮は申しません」

ベットーニ氏にしてみれば売ってしまった方が良いだろうに、さすがに不思議に思ったのか疑問を口にし首を傾げている。

「いえ、それが、お坊ちゃ……若君はその風景を「自分だけの物」にしたいと仰るのです」

「自分だけの物……えー、その……それは剛毅な事ですな」

風景を自分だけの物にしたいという言葉に、ベットーニ氏も呆れたみたいだったが、どうにか無難な褒め言葉を口にする。

どうやら強引ではあるが、売って欲しいと言う理由については誤魔化したみたいだな。じゃあ、後は値段の交渉か。

「それである土地の値段は如何程でしょうか？　こちらはこの額なら御用意できます」

と俺の全財産の半分を提示した。だがやはりそれでは少なすぎるらしく、ベットーニ氏の表情は曇った。

「さすがにそれでは……。確かにあの土地は役には立ちませんが、愛着があります。その為、持っていても税金を払うだけ損と分かっているけど今まで手放さなかったのです。さすがにこの額では……」

やっぱり、無理か。確かにベットーニ氏にとっては思い出の土地で愛着もあるだろう。それを実は役に立つ土地に変えられる事を隠して、安く買い叩こうというのに一瞬後ろめたさを感じた。

いや、そうじゃないか。ベットーニ氏は過去を見ているだけだ。実際汗水たらしてあの土地を開発しようとしているのは、あの子供達だ。ベットーニ氏だって子供達と同じ様に汗水たらせば開発出来たかもしれない。だが彼はそれをしなかった。

子供達には、まおうやサフィスの力で大岩が砕けるという幸運が

あったとしてもだ。子供達はその幸運など関係なしに、ずっと頑張ってきたのだから。

ベットーニ氏に払うお金は、開拓して豊かになるあの土地としての値段ではなく、今まで通りの荒れ果てた土地としての値段で十分なはずだ。

ならばやはり安く買い叩く必要がある。なにせあの土地は開拓しないんだったら、本当に何の役にも立たない土地なのだから。そしてまた足で合図しアマデオが口を開く。

「でも、僕はあの土地をどうしても欲しいんだ！」

「しかし、いくらお坊ちゃまのお父上が大富豪であらせられましても、あの様な土地に大金を出すのはお怒りになられるでしょう」

そしてまた足で合図。

「いやだ！　欲しいんだ！」

「分かりました……。予算は御遊学費用の余った残金までと考えておりましたが、ほかならぬお坊ちゃまの為、私もいくばかりかなら用意がありますので、立て替えさせて頂きます」

そう言って、先に提示した金額の2割り増しの金額を改めてベットーニ氏に提示した。

だがやはりベットーニ氏は首を振る。

結局また俺はアマデオに合図を送り、そして俺とアマデオとの茶

番劇、そしてベットーニ氏の返答という事を数度繰り返し、最終的になんとか予算内、俺の全財産の8割ほどの金額で土地を買い取る事が出来た。

ベットーニ氏の気が変わらぬ内にと、即金で払いベットーニ氏から土地の権利書を受け取る。さらに所有者移転申請書提出手続きの委任状にサインもして貰う。

それらの書類を受け取った俺達は、またも役場へと向かう。そして固定資産関係手続きの窓口に向かう。

「土地の権利者の移転手続きを行いたいのですが」と窓口のお姉さんに言うと、いかにも事務的な声で事務的な言葉が返ってくる。

「土地権利移転には、その土地の持ち主の方と移転し新たに持ち主となられる方、双方の同意が必要です。双方がそろっていない場合、いらっしやらない方については委任状――」

「あ、これが土地所有者の委任状です」とベットーニ氏に書いてもらった委任状を差し出した。

お姉さんはその委任状に目を通すとまた口を開く。

「では、その土地の権利書を拝見させて頂けますか？」

俺が権利書を差し出すと、お姉さんは、

「しばらくお待ち下さい」

と権利書を片手に奥に下がった。そして帰ってくると手にした紙切れはもう一枚増えていた。

「これが役場で保管していた、この権利書の土地の所有者のサインの原本です」

といい、委任状のサインと照らし合わせる。

勿論共に手書きな以上、寸分違わず同じな訳は無いが、こういう役場や、それに銀行、そしてギルドの受付の者達は、それらのサインの筆跡で本人確認が出来る技能を習得している。

まあ、委任状は間違いなくベットーニ氏に書いて貰った物なので、問題は無いはずだ。安心して待っていると、お姉さんからも

「ご本人様の物と確認いたしました」と承認された。

そして土地所有者の手続きをするのだが、お姉さんはてっきり俺が新しい所有者と思っていたらしく、まだ子供と言って良い年齢のアマデオが新たな土地の所有者と聞いて驚いていた。

だが子供が土地を買ってはいけないという法律はなく、なんとも奇妙な顔をしながら手続きをしてくれ、こうして晴れてあの時はアマデオの、つまり子供達の土地になったのだ。

その後俺はお姉さんに言って、必要な書類を数枚貰い窓口を後にする。

役場を出ると開口一番アマデオが愚痴を言う。

「土地を買ってなんて面倒くさいんだ。みんなこんな事をやっているのか?」

「ああ、当たり前だろ。権利関係は重要だからな。その分手続きが

面倒なんだよ」

「でも、これで終わりなんだろう？ やれやれだ！」

アマデオはそう言って、大きく伸びをする。だが俺は追い討ちをかける。

「なに言ってるんだ。お前達はこれから村を作るんだろ？ こんなもん、面倒のうちにに入るか。まだまだ序の口だぞ」

「どんな拷問なんだよ」

そう言うとアマデオは頭を抱えた。

第32話

役場での手続きの後、アマデオの勉強の為の教材を買い揃える。

ずっと俺が子供達の村に滞在してアマデオに文字を教えてやれば良いんだろうけど、俺もまおうの仲間の魔王を探さなくてはならないのでそう長くはここに居られない。

アマデオは教える者が不在の中勉強しなくてはならなくなり、かなり大変だろうが頑張って貰うしかない。下の村の学校に通えば勉強もはかどるんだろうが、さすがにそれをするとは当然どこに住んでいるかという話になり、アマデオが村を襲ったのがばれてしまう。

「取りあえず俺がお前達の村にいる間は、俺が教えてやるから頑張れ。俺が居なくなったら聞く相手も居なくなるから、今のうちに何でも聞いておけよ」

「そんなの分かってるよ。でも結構大変そうだなー」

アマデオは伸びをしながらそう言った。俺はその背中を軽く叩いた。

「なに、お前だったら大丈夫だろう」

「根拠もなしに、簡単に言ってくれるよ」

アマデオは無然として言ったが、別に根拠もなしに言ったわけじゃない。

こいつは今、俺が居なくなると聞いても、俺に残ってくれと言わなかった。ちゃんと自分でやる積もりなのだ。なら大丈夫だと思ったのだ。

「まあ、さすがに村を作り始めてすぐに必要な書類は俺が書いてやるけど、お前もなるべく早く内容を確認できるようにしておけよ。問い合わせがあるかも知れないからな」

「ああ。分かってる」

そして俺達はさらに歩き続け、人影がなくなるとアマデオは坊ちゃん風の服装から普段の服に着替えた。アマデオはさっぱりしたという表情で言った。

「やっぱりいつもの服が良いな。あんな服は窮屈だ」

「まあ我慢しろ。村の事で外の人と交渉する時は、あれみたいな窮屈な服を着なくちゃいけない事も増えるんだからな」

「本当か？ まったく、勉強よりそっちの方が拷問だよ」

俺は「ははは」と軽く笑い、そして改めて2人で村に向かう。村に着くころにはすでに日は傾き夕刻に近くなっていた。

「サイエスー！」

村に入ると、既に岩を砕く作業から帰って来ていたまおうが大声で俺を呼び、その横にはサフィスも並んでいる。

俺がまおうに向かって手を振ると、まおうも手を振り返して来た。

「どうだった？」

さらに近づいた俺にサフィスがそう聞いてきたので、俺は土地を買ってきた事なんかをかいつまんで説明した。

「まあ、今のところ順調だな。そっちはどうなんだ？」

「こっちも順調よ。この分だと大岩は、すぐに片付けられると思う」

大岩はまおうの火炎とサフィスの冷凍魔法の二重攻撃のお陰でかなり崩れやすくなる。そこに岩を落とすと大きく砕ける訳だ。そして今はその落とす岩を集めている状態で、怪力のまおうはそっちを手伝っている。

サフィスは何をやっているのかといえば、サフィスが使える魔法はなにも冷凍魔法だけではない。まおうの火炎ほどの火力は無いが、炎魔法も使えるので、サフィスは1人で炎魔法、冷凍魔法を繰り返し、大岩を崩れやすくする作業に勤しんでいた。

「でも、大丈夫なのか？ 魔法を連発すると精神的負担が大きいだろう」

「大丈夫よ、これくらい。それに、みんなも頑張ってるんだし」

サフィスはそう言って微笑んだけど、その笑みは少し力ない。やはりかなり疲れてるんだな。

「あんまり無理するなよ」

と、上手い言葉が出ない俺は、そう月並みな言葉をかけ、サフィ

スの肩に手を置いた。

「ありがとう。でも大丈夫だから」

と彼女は俺の手に自分の手を重ねた。思わず手を引いた俺を、サフィスはあれ？ という目で見た後、苦笑した。いかん、意識しすぎたか。

「じゃあ、また後で」

俺はそう言っていると、そそくさとアマデオと共に魔王の居る小屋へと向かう。

うーん。正直、サフィスはもう少しやらちゃらしているっていうか、ふわふわしているっていうか、悪く言えばいい加減な人間かと思っただけで、結構責任感強そうだな……。

そう言えばこの村に来て魔王と戦いになった時もそうだったか。魔王が人を操る魔法を使う恐ろしい魔物かも知れないのに、頭に血がのぼって突っ込んだ俺を追いかけて参戦してくれたんだよな。

あれで爬虫類好きのまおう大好きでさえなければな……。と、俺は大きく溜息を付いた。

「どうしたんだ？ 疲れたのか？」

俺の溜息に気付いたアマデオが俺の顔を覗き込んで聞いてきた。

「いや、大丈夫だ。気にするな。それより今日から勉強だぞ」

「へいへい」

まったく口の利き方を知らない奴だな。村の外の人間と関わるならもっと礼儀も教えないといけない。もっとも勉強をするという事をなんだかんだいって投げ出さないのはたいしたものだが。

魔王の居る小屋へと引き上げた俺は、彼女に今日の成果を報告する。

「サイエスさんには、ご苦勞をお掛けします」

「いえ、たいした事をしている訳じゃないですから」

「ですが、お金もかかっているみたいですし……。どうして貴方はそこまでしてくれるのですか？ 元々貴方はこの村とは関係の無い人ですのに」

魔王は粘液状の首をにちゃりと鳴らし首をかしげて聞いてきた。魔王は異世界の住人のはずなのに、こういう仕草は世界が変わっても同じなんだな。と不思議に思いながら俺は言った。

「そんな事を言ったら、貴女だってここに居る子供達とは関係の無い人じゃないですか」

俺の言葉に彼女は一瞬動きを止めた後、またにちゃりと音をたて今度は首を何度も縦に振った。どうやら、確かについて事の様だな。ひとしきり首を振った後、彼女は話題を変えてきた。

「そういえば、アマデオに文字を教えているという事ですけど、私にもその文字を教えて頂けませんか？」

「貴女にもですか？」

「ええ。こちらの世界の読み書きが出来ないのは私もあの子と同じですが、私の世界には私の世界の文字がありました。まったく読み書きをして来なかったあの子より、私の方が覚えは早いでしょう」

「それはそうかも知れませんが……。でもどうしてです？」

「だって貴方はここに長く留まる積もりは無いのでしょうか？　だったら早く文字を覚えられる者に教えた方が良いでしょう。あの子には私から教えます」

確かにその通りなのだが、彼女達にはまだはっきりと長居をしないと云った訳じゃない。どうして俺が長居しないと分かったんだろう？

「確かにそうなのですが、まおうかサフィスが言っていたんですか？」

だが俺の問いに魔王は首をにやりと横に振る。

「そういう訳ではありません。ですが、貴方達は元々旅の冒険者。その旅をここで終える筈がありません。それにあの子。あのまおうの仲間を探す旅をしているという事も聞いています。はやくあの子の仲間を探し出してあげて下さい」

「そこまで分かってきているなら、もう僕から言う事はありません。あの大岩を砕いて川の水が引かれる事を確認したらこの村を出る事にします。まおうもこの子供達と仲良くなっているの、離れるのを悲しむかも知れませんが、仕方が無いですし」

「そうですね……。貴方達が居なくなるのは子供達も悲しむでしょう。もし……。不吉な事を言うようですが、もし……。あの子の間が見つからなかったらこの村に戻ってきて下さい。いつでも歓迎致します」

「そうですね……。その時はお願いするかも知れません」

俺は魔王に頭を下げ言った。その後小屋を出て俺達にあてがわれた部屋に入る。するとまおうとサフィスが先に部屋に戻って待っていた。

「お帰りサイエス」

2人はそう言って俺を出迎えてくれた。俺も

「ただいま」

と返す。

「さっきも聞いたけど、ここの土地をかうって話は上手く行ってるんでしょ？　じゃあ、後はあの大岩を壊すだけね」

テーブルに座ったサフィスが肘を付いて俺に顔を向けながら言う。俺もその向かいに座りながら答えた。

「ああ、その後に川から水を引くってのも残っているけど、大岩が片付くならそれは問題ないだろう」

俺の答えに、サフィスは微笑んだ。

「あなたやまおうとの旅ってもう少し気軽な旅になると思ってたけど、いきなり大変な事になったわね。まさか村作りをする事になるなんて」

「当てが外れたか？」

すると俺の言葉にサフィスは少し考え込んだが、すぐにまた微笑

んだ。

「ええ。当ては外れたわね。でも、悪い方には外れていないわ」

「そうか……じゃあ、良かったよ。まあ、俺も村を作る事になるとは思っても見なかったがな」

「それはそうでしょうね」

サフィスはそう言うのと、今度は声を出して笑った。なにやら気恥ずかしくなった俺は、目をそらし床に胡坐をかいていた、まおうに視線を向ける。するとまおうはすでに半分寝かかっている。

まおうも昼間の岩運びでかなり疲れているみたいだな。それで無くともまだ子供で夜更かしは苦手みたいだし。

「じゃあ、もう寝るか」

とサフィスに声をかけると、彼女も頷く。まともな寝具も無いので、まおうを横にさせ毛布を被せてやり、俺も毛布に包まって床に横になった。

「まるでお父さんみたいね」

サフィスはそう言って笑ったが、俺はその言葉を無視して、

「お休み」

と寝に入った。

そして数日後、崖の上に岩が蓄えられ一気に大岩を砕く日が来た。俺達はみな崖の上に集まる。そして下の大岩を見下ろした。

「取り合えずどうするの？ やっぱり僕が始めに火炎であの大岩を

焼いたら良いのかな？」

「そうだな。始めにまおうの火炎で大岩を焼いて、その後サフィスの魔法で冷やして、そして上から岩を落とす」

「うん。分かった」

「了解」

俺の言葉にそう返事をしてまおうとサフィスがそれぞれ構える。

「じゃあ、いくよ！」

まおうは掛け声と共に火炎を連射しみると崖の下の大岩が赤く焼け爛れていった。そしてその後サフィスのブリザードの魔法が連射される。

「この後、もう一度まおうの火炎で熱した方が崩れやすいんですけど？」

崖の下を覗いていた俺は、振り返って魔王に問いかけた。彼女は例によってにちゃりと音を鳴らし首を縦に振る。

「ええ。そうです。冷却され再度熱せられれば、さらに岩は砕けやすくなります」

「分かりました。じゃあまおうもう一度頼む！」

魔王の言葉に、まおうに向き直ってそう声をかけると、まおうもまた、

「うん。分かった！」

と返事し火炎を連射する。

サフィスの冷凍魔法により冷え切っていた大岩が再度赤く焼け始める。そして十分に熱くなりその熱気で大気も揺れ、大岩の姿も歪んで見えるほどになる。

もうそろそろかな？ そう思った俺は、今度は集めた岩のところで待機しているアマデオ達に向き直った。アマデオ達は、遂に大岩を砕く日が来たと意気込み今か今かと待ち構えている。そして俺が口を開く前にアマデオが先に口を開いた。

「やっと俺達の出番か？ だったらとっとと落とそうぜ」

俺が思わず苦笑し頷くと、アマデオは他の子供達に合図し子供達に押された岩が動き出す。

「せーのー！ せーのー！」

という掛け声と共に岩は大岩の真上まで運ばれる。そして一際大きな掛け声がなされる。

「いっせーのーで！！！」

岩が崖を落ち真っ直ぐ大岩へと向かって行く。俺達はガコン！という大きな音になる事を想像したが、予想に反してグシュッと鈍い音をたて落とした岩が大岩へとめり込んだ。そしてさらに石が割れる音が続き、砂で作った山が崩れるに様に、岩は大岩を砕きながら転がって傍に落ちる。

かなりの数の岩を落とさないといけないと思っていたら、一つ目の岩で大岩の4分の1ほどが砕けみんなは歓喜の声をあげた。

「へー。結構簡単に崩れるもんだな」

感心し、俺が独り言の様に呟くと、その声を聞いた魔王が律儀に

答えてきた。彼女はサフィスへとにやりと顔を向ける。サフィスはまおうと手を取り合って喜んでいる。

「サフィスさんが毎日大岩に魔法をかけ続けてくれたお陰でしょう。そのお陰で大岩に目に見えぬヒビが沢山出来ていたのです」

そうか……。あいつのお陰なのか。と思わずまおうと一緒にはいでいるサフィスへと視線を向けた。人は見かけによらないものだ。と思わず凝視していると、俺の視線に気付いた彼女も俺に顔を向け笑顔を見せた。

「やったわね。サイエス」

俺も彼女へと笑顔を向ける。だがすぐにアマデオ達を振り返って言った。

「さあ、どんどん岩を落とそう。早く落とさないと折角まおうが大岩を焼いたのに冷えてしまうからな」

その言葉にアマデオも改めて大きな声でみんなに声をかける。

「よし！ お前らどんどんいくぞ！」

そして子供達も

「おう！」

と答え、その言葉通り岩を大岩に向けてどんどん落とす。もつともどんどんと言っても、大岩はサフィスのお陰で脆くなっていたので、その後、1つは狙いはずしたものの4つほど岩を落としたところで、大岩はすべて運べそうなほどの大きさの破片に砕けた。

子供達はまた改めて歓声を上げ、手を取り合い抱きしめあつて喜びを表した。魔王も触手で子供達と手を握り合い、まおうはサフィスを肩に乗せ、サフィスはその上で笑顔を見せている。

俺も魔王に近づき右手を差し出した。すると彼女も触手を伸ばし俺の手に撒きつく。

「ありがとうございます。これも皆さんのお陰です」

いや、子供達が頑張ったからです。反射的にそう言葉が出そうになったが、ここで謙遜するのもワザとらしいと口を噤んだ。なので思った事をそのまま口に出す。

「大岩を砕いたのは、まおうとサフィスです。俺は何もしていませんから」

だが魔王は俺の言葉に、にちゃりにちゃりと首を横に振った。

「お二方には当然感謝しています。ですが、初めに貴方達がこの村に来た時、貴方が私に向かってこなければ何も始まらなかったはずです」

そういえばそんな事もあったな。と俺は頭をかいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7278s/>

魔王使い

2011年11月8日23時11分発行